
Eternal Love 2

月久麻子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Eternal Love 2

【NZコード】

N5263U

【作者名】

月久麻子

【あらすじ】

再びディの居る世界に戻ってきた廉は喜ぶが、それもつかの間。ディが大国タランフイリアの王女から求婚されていることを知り複雑な心情になってしまう。断れば国同士の戦争が勃発すると聞いた廉は思い悩むが、しかしディと二人で乗り越えて行こうと決意を固め、その意思を聞いたディも求婚を断つた。一人でいれば乗り越えて行ける、そう信じていた廉だったが、自分を巻き込む嵐は想像以上のものだつた。複雑に絡み合い始める過去と現在・・・廉を待ち受けているものは一体何なのか。

第一章・第一話（前書き）

第一章です。前章よりもやや重い内容ではあります、可能な限り皆に幸せを・・を信条にアップしていきたいと思つていますのでどうぞよろしくお願ひします。

第一章・第一話

「ディーと再会出来るなんて思つてもみなかつた俺はそれ以上に、ディーに「愛してる」と告げられ、もう言葉も出なくなつてしまつていた。ディーは約束をいくつも守つてくれていたんだ。あの時、ディーと契りを結んだ時。俺がディーに「愛してる」と言わないで欲しいと言つたことを今の今まで。

「ディー・・・ディー、俺も。俺も愛してる。誰よりもディーのことをしてる。」「レン・・・・

「嬉しい、ディーが俺のこと覚えててくれて・・・・・」「忘れる訳がないだろ?」「

ディーの呆れたような口調が俺の顔を起しにさせた。ディーは口調と同様に呆れた表情を浮かべていた。

「俺はもう一度ディーから口付けられ、よつやく体を離した。「ところでレン、その格好は?」

俺の両手を握り締めながらディーが不思議そうな顔をしている。俺は自分の格好を改めて見てみた。野球のユニフォーム姿だ。そう言えば今日は甲子園で戦つてきたんだつた。

「今日が甲子園の初戦だつたんだ。それでその帰りだつたから。これ、野球をする時の服装なんだ。」「

「・・・そんな専用の衣装が用意されるほど凄いものなんだな。」「

ディーは感嘆の声を上げる。俺は苦笑を浮かべた。

「そんないそなうなものじゃないよ。スポーツ」と専用のユニフォームつてあるし。」「

「・・・・スポーツ?」「

「ディーの国も、運動とかしたりしない?走つたり、球をかごに投げ入れたり打つたりとか。」「

ディーは難しい顔をして考え込んでしまつた。どうやらこの世界に

はスポーツの存在がないのかもしれない。

「そう言えば俺、この世界のことまだほとんど何も知らないんだ。」「これからゆっくり覚えていけばいい。・・・しかし、どうしてレンはまたこの世界へ来られたんだ、世界樹を生むも者が一度もこの世界にやつてくるなんて聞いたことがない。」

「・・・そう、なんだよね。俺どうしてこっちへ来れたんだろう。確かに来たいってすぐ思つたんだけど。」

スポーツの話はさておき、俺とディイは顔を見合させて首をかしげた。前回種を生むためにここに来た時は召喚者に呼ばれてきた。今回ここへ来たのも、誰かに呼ばれたんだろうか。でもこんなタイミングよく？

「またライカが呼んだのかな？」

途端、ディイの表情が引きつる。考えられないでもないはずだ、だつてディイの血を使ったとは言え前回俺を呼び出したのはライカなのだから。

「早急に調べさせよ！」

ディイは俺の腕を取ると大股で歩き出した。

「ディイ、どこに・・・」

「城へ戻ろう。」

「・・・でも」

ディイとは一緒に居たい。だけど、ついて行つてもいいのだろうか。俺に役目はないはずだ。新しい世界樹はもうあるのだから。

「レンは、俺と一緒に居てはくれないのか？」

「や、違うよ。一緒に居たいよ。」

「だつたら何故？」

ディイが悲しげな表情を浮かべる。

ディイと出会えて嬉しいし、ずっと側にいたい。だけど、心が落ち

着いてくると同時に漠然とした不安が俺の心に湧き上がってきていた。説明がしようのないものだけ、何だか落ち着かないんだ。

嫌な予感がするなんて、そんなことを言つてもディイは聞き入れて

くれないはず。デイの態度で俺はそれを察していた。

「どう言えばいいんだろう。

「のままデイについて行つたら俺は何かとんでもないことに巻き込まれてしまうんじゃないだろうか。巻き込まれるのも、デイが一緒なら構わないんだけど。

この予感は一体何なんだろう。

「レン、側にいてくれ。」

「デイ……」

俺は拒否出来なかつた。ずっと会いたいと願つていた愛しい人が側にいてくれと言うのを、よく分からぬ理由でなんて断れるはずがなかつた。小さく頷いて見せた俺にデイは満足げな笑みを浮かべ、「愛してる」と額にキスをしてきた。

まさかこの先、前回以上の大事に巻き込まれ俺自身すらも大きな判断を迫られることになるなんて、これっぽっちも思わないままに。

久々に「デイの城へと足を踏み入れた。何だか懐かしく感じてしまつ。この城にいたのはほんの僅かな時間しかなかつたのに。

しかし懐かしさに浸る間もない。城は緊張した空氣に包まれていった。ピリピリしていると言つた方が正しいのかもしれない。

「デイ、何があつたのか？」

デイの肘をこそっと掴みながら囁くとデイは「大丈夫だ」と笑うだけだつた。そのまま俺は以前宛がわれた部屋へと通された。デイもそのまま一緒に居てくれると思っていたのに、デイは用事があると言い俺を置き去りにして部屋から出て行つてしまつた。

久々に会えたのだから、もつとゆつくりと話がしたかったのに。

俺はふて腐れながら大きなベッドにダイブして、ごろごろとその上を転がつた。

「・・・デイ、何があつたのかな。」

たぶん、何かがこの国で起ころっている。『ディ』は何も言わなかつたけど、いくら俺にだつて分かる。前に来た時はこんなに空気が張り詰めてなんていなかつた。

ここへ来たばかりの俺ですら分かつてしまつたのに『ディ』はそれを隠した。俺に知られることなのだろうか。

仰向けに寝つ転がりながら俺はぼんやりと天井を眺めた。

こんなことになるなんて思つてなかつた。ただ、『ディ』に甲子園に行けた報告をするだけのはずだったのに。

つい忘れてしまいそうになるけど、そう言えれば今日俺甲子園で試合してきたんだよな。

楽しかつた。あんな経験きつともう一度と出来ない。

楽しいことと嬉しいことが一気にあつた日なのに、どうしてこんなにも心が落ち着かないのか、分からなかつた。

することもなくベッドに寝ていた俺はそれまでの疲れもあつたせいかそのまま寝入つてしまつた。眠りに落ちる瞬間、何かの声を聞いた気がした。

「・・・・」

耳元で低い声が何かを言つている。急に夢から現実に引き戻される感覚。

「レン、起きてくれ。」

「・・・ディ・・?」

何度も瞬きを繰り返しあつくりとした視界には『ディ』が映る。

「起こしてすまない。話があるんだ。」

田を擦りながら体を起こすと『ディ』が俺の手を引き、ベッドを降りるように促してくる。俺は特に逆らいもせず、ベッドから降りた。『ディ』は無言のまま俺を部屋の外へ連れて出ると目的を持つた強い足取りでどこかへと向かう。

「ディ?どこ行くんだ?」

長い廊下を歩きながら俺は窓に向こうに視線を投げた。外はすっ

かり暗くなっている。こんな夜に呼び出されるなんて、何かあったんだろうか。

「…………こんな時にレンが戻つてくるなんて何か意味が……」「…………え、何?」「

早口で言つたデイの言葉は俺の耳には届かなかつた。聞き返すとデイは真つ直ぐに前を見据えながら掘んでいた俺の手に力を込める。その横顔は青ざめているようにも見える。

「…………デイ?」

こんなデイは初めて見る。俺は急に不安が強くなるのを感じた。繋いでいる手を俺も強く握り返す。

デイに連れて行かれたのは城の最上階だつた。真つ暗なその場所にデイが一步足を踏み入れると暗闇の奥で誰かが動く気配がした。

「…………誰か、いるのか?」

「…………ああ。レン、こっちへ。」

デイは誰かがいる方向へと向かう。真つ暗なのによく場所が分からぬ、と思っているとその人物の前でデイが足を止めた。ポケットから何かを取り出し、何かを打ち付ける音がする。直後、ぼんやりとした光が直径一メートルの範囲を照らし出した。

「…………え?」

「待たせたな。」

「…………つたく、俺を待たせるのはてめえだけだ。」

光に浮かび上がつたその人物の姿に俺は目を丸くした。あり得ない人物がそこに居たから。

「…………え、ライカ?」

「よお、ガキ。久しぶりだな。」

光に浮かび上がつたのは深紅の髪の色、間違えるはずがない。この声、この口調。間違ひなくそこにいたのはライカだつた。

でも、デイとライカは仲が悪いはずじゃ?

「混乱するのは分かるが今は時間がない。話は俺の城に着いてからだ。」

手を差し出され、俺はきょとんとライカの手を見た。そしてデイに振り返る。

「レン、時が来るまでライカの城に居て欲しい。」

予想だにしていなかつたデイの言葉に俺は息を呑んだ。

「え？ 何で？」

「話は全てライカにするように言つてある。今は時間がないんだ、レンの存在が見つかつたら話がこじれてしまつ。」

この時、俺は事態を全く理解出来ずについた。俺の存在が見つかつたらつて、一体誰に。それに話がこじれるつて、何が。

聞きたくても頭が回らなくて言葉にならない。

一向に動こうとしない俺に焦れたのかライカが乱暴に俺の手を掴み自身の方へと引き寄せる。掴んでいたデイの手はあっさりと離されてしまった。

「・・・・デイ？」

「すまない、他に方法がないんだ。必ず迎えに行くから信じて待つていて欲しい。」

デイの口調は徐々に焦りを帯び始めている。

「・・・デイ、俺・・」

「・・・・レン・・」

掠れたデイの声、間違いなくこの国で何かが起つている。それも良くないことが。

ここで「分かつた」と言えばいいだけの話だ。このままライカに着いていつて後できちんと説明をしてもらえれば納得出来るはず。なのになんだろう、この嫌な予感。このままデイと離れたらもう会えないかもしれない、そんな予感が肌にぴりぴりとまとわりついてくる。

「レン。」

強く名前を呼ばると我慢が出来なくなつて、俺はライカの手を振り払いデイの胸に飛び込んだ。俺を受け止め強く抱きしめてくるデイに俺はしがみついた。

「時間がかかるかもしれない、何が起るかも分らないんだ。だが、必ず迎えに行く。」

「・・・デイツ・・・」

怖かつた。理由も分からぬままデイと引き離されるのが、怖くて仕方がなかつた。

「レン、愛してる。」

髪を撫でられ顔を上げると、少しの間もなくデイの唇が触れてきた。触れるだけのそれはすぐに離れて行き、再び俺はライカに腕を捕まれデイから引き離される。

「いやつきたいのは分かるが、時間がねえつづってんだろー。」「デイ！」

「おら、行くぞ。」

強引に腕を引かれ、俺はライカの腕に巻き込まれた。デイは俺を追いかけてこない。

ライカが屋上の淵に足をかけ短く笛笛を鳴らし、すぐに俺を抱きこむと躊躇なくそこから飛び降りた。真っ暗な闇にダイブする錯覚を覚えながら俺は次第に遠ざかっていくデイに向かって手を差しのばした。デイはいつまでも俺たちを見つめていた。

「・・・つ！」「・・・つ！」

軽い衝撃と共に俺の体は何かの上に落ちた。

「そいつに捕まつて体を低くしている。」

ライカは俺の体を反転させ、たつた今飛び降りた何かにしがみつかせる体勢を取らせる。手に触れるのは動物の毛並みだった。これつて、怪鳥？

言われたように俺はそれにしがみつき体をその鳥に密着させる。ライカはすぐさま手綱を取り強く打ち鳴らした。

一気に速度が上がり、俺は目も開けられなくなってしまう。何が起こっているんだ、デイの身に。この国に。

デイの態度から深刻な事態には分かるけど、その説明が一切ないまま俺はライカに預けられた。それはつまり、俺がデイの側に

いてはいけないってことだ。

でもどうして。

考えても分からぬ。以前ここに呼ばれた時と同じで、俺には

何の情報もない。

どうするにも出来ないまま、俺は『テイから引き離されるしかなかつた。

第一章・第一話

どれくらいの距離を飛んだのか、突然鳥が飛ぶ速度が落ちた。ようやく目を開けられるようになり俺は鳥が向かう先に視線をやつた。次第に近づいてくるのは、デイの国カーミアと同じくらいの大きさの城。

「ライカ、あそこ？」

「ああ、俺の城だ。」

「・・・俺のって。」

「国主が城に住んでなかつたら笑いもんになるだろうが。」

ライカも王様つてことか。全然そんな風に見えないけど。
やがてすぐ側にまで城が近づくと鳥は城の上を旋回するように飛んだ。ライカは俺を乱暴に抱き上げるとタイミングを見計らつて飛び降りる。どうしてこいつ、やること全てがライカは突然で乱暴なんだ。ライカが着地するまでの間、俺は内心毒づいていた。

着地の衝撃はほとんどなかつた。結構な高さから飛び降りたはずなのにと俺は疑問に思いながら床に下ろされた。

「行くぞ。」

何故無事に降りられたのかと聞く前にぐいと手を取られ俺は引きたずられながら城へと引きずり込まれた。カーミアと違つてこの城には人の気配がほとんどない。

「ライカ、説明しろよ。」

どうしてデイの元をはなれなければならなかつたのか、それに他にも知りたいことはたくさんある。

「どうして俺はここへこさせられたんだ。」

「お前があそこに居ちゃ都合が悪いからだ。」

俺の腕を掴みながらずんずんと進んでいくライカは振り返りもせず言った。

「あの野郎にとつちや、お前が戻ってきたのはさぞ嬉しいだろうが・

・戻ってきたタイミングが最悪だ。」「

「だから、何でだよ。最悪つて・・・」

ライカはたどり着いた扉の前で足を止め俺を振り返った。

「あいつは今、求婚されている。その相手にお前の存在がばれたらまずいことになる。」

想像もしていなかつた言葉に俺は一瞬言葉を失つた。

「求婚つて・・・」

「タランフィリアという国がある。この辺で一番の大國だ、断るのはまずもつて難しいだろうな。」

ライカはこつちの感情を逆撫でするような笑みを浮かべ、扉を開け中に入った。俺も後に続いて中に入る。

「ライカ！」

「話せば長くなる、とりあえず座れ。」

部屋の中央には豪華なテーブルと椅子があり、ライカはそこを指差していた。食つて掛かりたい気持ちを必死に堪え、俺はそこから一番近い席に腰を落とした。

「何か飲むか？」

「いらない。」

しかしそんな俺を気にした素振りも見せずライカは棚から琥珀色をした液体の入ったビンとグラスを一つ持つて俺の真正面に座つた。音を立ててグラスにその液体を注ぐと一つを俺の前に置く。

「求婚つてどういうこと？」

差し出された飲み物なんて見向きもせず俺はライカを睨みつけた。チリチリと胸が妬け、嫉妬している自分に気がついた。

「言葉通りだ、結婚を申し込まれてんだよ。」

「そんなんのは分かる、どうしてデイが！」

「あいつは王だ、求婚なぞ腐るほど舞い込んでくるさ。」

俺の小さな嫉妬を見抜いたライカが唇の端を吊り上げた笑みを俺に向け「求婚」ときで嫉妬してたら身がもたねえぞ。」と追加していく。

「だつたら、タイミングが悪いってどうじつことだよ。俺がそれとどう関係があるんだよ。」

全うな返事をしてくるライカに俺は自分の中にある嫉妬に羞恥を覚えながらも囁み付いた。するとライカはグラスを一気に煽ると音を立ててグラスをテーブルに置いた。

「お前がただの一般人だつたら話はこじれずに済んだんだ。」

一般人？言葉の意味を図りかねて俺は体の力を抜いた。

「お前がどう思つているかは知らんが、世界樹を生んだ者はこの世界では絶対の存在だ。そして、あの野郎もその一人となる。お前たちは、契りを結び世界樹を生み出したんだからな。」

「だから、それとこれとどう関係があるんだよ。」

大事なことに触れず話そうとするライカに俺は苛立つた。声を荒げるがライカは気になった様子も見せずまたグラスに液体を注ぎ口をつける。

「・・・世界樹は、必要なんだろ？」

「無論だ。世界樹がなければこの世界は終わりだ、だからこそ。」

「だつたら・・・」

「生み出して終わりだつたら、誰も世界樹の親になんかなろうしない。」

「・・・親？」

そう言えば、忘れていたけどライカも世界樹を生ませる為に俺と契ろうとしていた。

そもそもこの世界にとつて世界樹は何なんだろう。ただ世界を守る為だけのものなんじゃないのか？でもそれならライカのように生み出す側の人間になることを望む人がいるのはおかしい。

その答えはライカが教えてくれた。

「簡単に言えば、お前を抱いて世界樹を生み出した男はこの世界の王になれるってことだ。そして新たな世界樹が誕生した今それはあの野郎になる。」

知りたかった。俺は知らないことだけで、自分がどうすればい

いかも分からぬくらい情報がなかつた。だから、知りたかった。

この世界を、俺の意味を。

少しづつ与えられる知識に俺は混乱し始めていた。

「・・・デイが、世界の王？」

もしかして俺が思つてゐる以上に世界樹はこの世界にとつて絶大な影響力を持つてゐるものなのだとしたら。ライカの口ぶりでその片鱗がうかがい知れた。

「それが、俺とどう関係があるんだよ・・・」

「・・・丁寧な説明は面倒臭えんだよ。要点だけを言つぞ。」

ライカはさも面倒臭いとばかりに顔を歪め、椅子の背もたれに体を預けた。

「お前と契り世界樹を生み出したあの野郎は今、この世界の王として君臨している。だが、カーミアはお世辞にも大国とは言えない、タランフィリアに戦争を仕掛けられでもしたら・・・世界樹に守られてはいても根本的な武力が圧倒的に違いすぎる。滅びはせずとも壊滅的な打撃を受けるはずだ。そこに目をつけたのがタランフィリアの王女で、同盟を結ぶ条件として自身との婚姻を持ちかけてきた。」

淡々と説明をするライカの言葉に俺は耳を傾けた。それは確かに俺の知りたかったことだった。デイが今、どんな状況にいるのか。

ライカの言葉数は少なかつたけれど、必要以上のことは話さず現実に起こっていることをただ告げられることで俺は頭の中を整理することができた。

「本来なら、あの野郎に断る理由はないはずだった。お前が戻つて来なけりやな。」

「・・・・・なんで・・・」

「俺があいつなら、断る理由はない。王女の申し出は諸手を挙げて受け入れる。」

「それはライカの話だろ。」

思わずムツとしてしまつたがライカは氣にもせず続けた。

「お前が戻つて来なけりや、あいつも受けたさ。」

その言葉に冷水を浴びせられたようなショックを覚えた。言葉が出ない。ライカは今、何て言った？

「お前が戻つて来なけりや、あの野郎は王女の申し出を受けてカーミアは安泰の一途を辿ることが出来たんだ。だが、もう無理だろくな。」

「・・・・・デイは、王女と結婚するのか？」

搾り出した声は震えていた。

「俺の話を聞いてたか？ もう無理だつて言つたひつ。あいつは断る。國の安泰を棒に振つてな。」

「・・・・・え？」

「あいつはお前を取る。馬鹿だとしか言いよつがない。」

いつの間に空いたのか、ライカがまたグラスに液体を注ぐ。つまり、デイは俺を選んでくれたつてこと・・だよな。単純に喜びが湧き上がってきた。

「喜ぶなよ、ガキ。お前の為にあいつは全てを犠牲にしたんだ。」

俺の内心を見透かしたのか、ライカはトーンを落とした声で俺の意識を引き戻す。

「・・・犠牲？」

「タランフィリアの民は気性が荒く中でも王女は群を抜いている、断りを入れればその理由を必ず聞いてくるはずだ。そして理由を聞いた王女はその原因を潰す。だからあいつは言わないだろう。お前を危険にさらすことになるなら自分が危険に陥る方を選ぶはずだからな。こうやって大事な大事なお前を俺に預けてくるくらいだ。」

「ライカに預けられた理由を知り、俺は何とも言えない気分だった。デイは俺を選んでくれた。その為に全てを犠牲にした。それをどう受け取つたらいいんだろう。」

デイが引き換えるものの大きさをこの時の俺はまだよく分か
つていなかつた。

「きっとあいつは最後まで理由を言わないだろ？、すなとビツなんとか分かるか？」

一
・
・
・
・
分からな
い
・
・
・

「面子を潰された王女はカーミアを潰しにかかつてくれる。国は滅ぼ

「たたかひ」

1

「タランフィリアが大国なのはそうやってどんどん国を潰し吸収して行つたからだ。王女にとつての望みは世界の王の妻になることで、受け入れられないのならその存在を消すだけ。別にあいつと婚姻を結ばなくとも、王女はもうほとんどこの世の王みたいなもんだからな。」

デイの顔が脳裏に浮かび上がる。緊張した城の雰囲気も。だから
デイはあんな顔をしていたのか。返事一つで国の明暗が分かれてしま
うから。

「お前が俺に預けられた理由は二つある。まず一つは万が一王女に存在を知られた場合、お前に矛先が向く可能性が高い。お前がいなくなれば拒否する理由がなくなるからな。」

だから。だからテイは敵対しているはずのライカに俺を預けたのか。でも、どうしてライカに？それなら城のどこかに隠れているだけいいはずじゃ。

「だが、今の話もお前が一般人だつたらの話だ。お前が世界樹を生み出した者だと王女にばれると話は更にやつかいになる。」

一
せ
か
い
こ
「

「世界樹の親を殺す」とは出来ないからだ。まあ、物理的に殺すことは可能だが、そうすると今度は世界の均衡が危うくなる。

のだろうか。だけどどうして？俺の頭は更に混乱した。俺の混乱を察したライカは呆れた口調で言った。

「自分を生み出した者を殺すような世界を世界樹が守るはずがねえだろ。お前は自覚なんざないだろうが、お前の生死にこの世界の命運がかかっていると言つてもいい。だが、あの王女はどう思つだろうな。自分が求婚している相手が世界樹を生み出した者と相愛で、それを理由に断られる。こんな侮辱はまずない。」

もう俺の考え方とは次元が違いますぎて意味が分からぬ。こんな話を聞いただけで「はい分かりました」と返事なんて出来やしない。「お前を殺す訳にもいかず、求婚も断られる。大国の王女の面子は丸つぶれだ。」

「面子で、国を滅ぼしたりなんて・・・するはずが・・・」

理解出来ない話の内容を必死で飲み込もうとしながら俺はそれでもライカの言つていることが間違ひではないかと願い、請うように言つた。

体中の血が下がつていくのを感じながら俺は震える手を何とか押さえようと固く握り締める。

「あるさ。自分の面子は国の面子だ、それでなくともあの王女は自尊心が高い。断りを入れた次の日には総攻撃でも仕掛けてくるんじやないか？」

「そんな馬鹿な話つてない！自分の都合で、たくさんの人を危険にさらすなんて！」

「デイが求婚を断れば國同士の争いになるのだとライカは言つ。國同士の争いつてことは戦争つてことだ。そうなればきっと多くの人が死んでしまう。」

「お前の尺で物事を計るなよ。世の中には面子の方が大事な人間もいる。・・・それに、この世界では戦争なんて日常茶飯事だ。」

「・・・戦争が、日常・・・？」

「お前は随分とのんびりした國の人間らしいが、争いが日常の人間もいる。」

「だけど、争いなんてない方がいいに決まってるじゃないか！」

声を荒げる俺に、ライカは笑つてみせるだけだった。

それきりライカは何も言葉にはしなかった。俺もライカを睨みつけるだけで。

この怒りはライカへ向けるものじゃないのは分かつていた。だけど他にぶつけられる物がなかつた。

沈黙が部屋に広がる。何の音もしない部屋に、俺とライカの二人だけしかいない。

そしてライカが笑みを浮かべながらこう言った。

「お前は自分が原因で他人が争うのが嫌なだけだろ？」

沈黙を切り裂いて、ライカの言葉は俺の心に突き刺さつた。

「争いになるのが嫌なんじゃない、自分が原因になるのが嫌なだけだ。」

「・・・違つ・・・」

「違わないさ。心のどこかでそう思つてるはずだ。こんなきれいごとばかりを言うのなら尚更な。」

「違う！」

感情が弾け、俺は目の前にあつたグラスの中身をライカにぶちまけた。そして、自分の取つた行動に呆然としてしまつ。

手の中からグラスが落ち、碎ける音がしたのを聞いた。

ライカは液体がしたたるにも気にして素振りも見せず、黙つて俺を見つめていた。俺は全身が震え出すのを止められず、蹲り頭を抱え込んでしまう。

俺はただデイに会いたかつただけだ。たつたそれだけだったのに、望みが叶えられたかと思つたら途端にこんなことになるなんて考えてもみなかつた。

デイが国王じゃなかつたら良かつたのか。それとも俺が世界樹の種を生む者でなければ？そもそも、この世界に呼ばれなければ。デイと会わなければ。

そうすれば苦しまずに済んだのかもしない。

蹲つたまま動じつとしない俺に、ライカは変わらない口調で話しか始めた。

「もう一つの理由は、カーミニアの王の側近たちだ。タランフィリアの申し出を受ければ國は安泰、断る國王がどうかしている。だがあいつは断る、その理由は？」

「…………俺…………？」

震える声で俺は答え、同時に自分の立ち位置をようやく知った。
「そうだ、お前が居るから國王は最高の申し出を断る。だったら、お前がいなければいいだけの話だ。」

だから俺はライカに預けられた。ディーは俺を守るために。
カーミニアにはもう俺の存在は邪魔なものでしかないから。

「お前は世界樹を生み出した者だ。奴らもお前を殺しはしないだろうが、國王の目の届かない場所へ幽閉なりなんなりしてお前を諦めさせられれば話はそれで済む。」

もう言葉は出ない。あまりの現実と事実に俺は打ちのめされたいた。

「だから、最悪のタイミングで戻ってきたって言ったんだ。お前はあいつを追い詰める為だけに戻ってきたようなもんだ。」

ライカは容赦なかつた。今ディーの身に起こっている事実を述べているだけだったとしても、俺にはナイフで切りつけられているように感じてしまう。

ディーを好きなだけなのに。たつたそれだけなのに、その気持ちが全てを狂わせていく。

体が動かない。動けない。

「ガキ。」

ライカに呼びかけにも俺は動けず、頭を抱えたまま蹲つたまま。

「…………ガキ…………おい…………ガキ。」

何度も呼びかけられても俺は身動き一つ取れない。そんな俺にライカは盛大にため息をつくとギシリと音を立てて椅子から立ち上がり俺から遠ざかるように足音を立てて部屋の奥へと向かつ。

「・・・・レン、顔を上げる。」

足を止めたライカが俺の名を呼んだ。
名前を呼ばれた。名前を呼んでくれた。それだけで自分の存在が
ここにあることを許されたような気持ちになり、俺はゆっくりと顔
を上げライカの方へと向く。

「泣くなもつとガキらしく喚き散らせ。」

滂沱の涙が溢れ続け俺の頬を濡らしていく、ライカは声もなく涙
を流す俺をそんな風に叱った。

「お前が悪いんじやない、それだけは確かなんだ。」

「・・・・でも・・」

「どうにも出来ないこともある。これからお前がどうするか、どう
したいかで未来は決まる。」

ライカは涼しげに言つと、外へ続くガラス張りの扉を勢いよく開
いた。暖かい優しい風が部屋に舞い込んできて俺を包む。

「とりあえず、こいつに慰めてもらつていい。」

こっちへ来いと手を差し伸べられ、俺はおぼつかない足取りでラ
イカの元へと歩み寄つた。差し伸べられたライカの手を震える手で
掴みその場に立ち归く。

「おい、こっちへ来い。」

扉の向こうに広がつてるのは緑溢れる庭のような場所。ライカ
は次にそこに向かつて声をかけた。すると暗がりの向こうから何か
が姿を現した。

「・・・・・ジャモン・・・?」

ジャモンが足音を立てずにむづくつと俺たちに向かつて歩いてく
る。

「どうしてここに?」

ライカに顔を向けると、ただ笑つてはいるだけでライカは何も言わ
うとはしなかつた。

「ジャモン・・」

縋るように両手を広げるとジャモンは大きな顔を俺に近づけ、柔

らかい毛並みを擦り付けてくる。

「・・・ジャモン・・・・・」

俺は強くジャモンに抱きつき、懐かしい匂いに包まれながら声を上げて泣いた。ジャモンは尻尾を俺の体に巻きつけ慰めるように優しく俺に顔を擦り付けてくる。

そしてジャモンは俺が抱きつたままの体勢でゆっくりと立ち上がる、尻尾と腕を器用に使い俺を守るより、抱きしめるよりしながら再び歩き出した。

遠くで扉が閉まる音を聞きながら俺は、濃い緑の匂いと、優しい風と、ジャモンに包まれ声が枯れるまで泣き続けた。

ただデイを想いながら。

ジャモンは子供をあやすように、時折俺の顔を舌で舐めたり尻尾で顔を撫でて来たりした。いつまでも泣き続ける俺を心配してくれているのか、その動作の全てが労わりに満ちていて俺に元安らぎをくれた。

光もない夜の暗闇の中、俺を慰めてくれる全てのものに包まれながらいつしか俺は泣き疲れて寝入ってしまっていた。

「…………」

目覚めたのは光の眩しさと小鳥のさえずる声。そして顔を撫でる優しい感触がしたから。

「…………ジャモン…………？」

うつすらと目を開くと視界いっぱいにジャモンの毛皮が飛び込んでくる。

そつか、昨日あのままここで寝けやつたんだ。

「…………ジャモン、おはよ。」

眠い目を擦つているとジャモンが俺の顔を覗きこんできた。

「お前つてすつごいあつたかいのな。外なのに全然寒くなかったよ。」

鼻頭を指先でくすぐつてから体を起すと俺は辺りを見回した。縁が濃く深い森のような場所、ここが城の中とは思えないくらいだつた。

立ち上がり壁際まで歩いていくとジャモンも俺の後ろについてくる。

壁には窓があり、そこから外を覗いてみると窓の外には大きな街が広がっていた。

「イリツィアって、大きな国なんだな。」

カーミアも大きな国だったけど。同じくらいかな。

それよりも大きな国があるんだ。

「タランフィリアって、どんだけ大きいんだろ。」

「この国の三倍はあるな。」

背後から急に声がかけられ振り返るとライカが昨日と同じ場所に立っていた。部屋と庭の境界線の辺り。

「ライカ。」

「いくつかの国を飲み込んで、その分大きくなつた。それも今の王女が統制を取るようになつてからの話だ。」

そんな人に『ディは求婚をされている。断つたら飲み込まれた国と同じ運命を辿るのかな。

「よく、眠れたか。」

「・・・・・うん、ジャモンが居てくれたから。でもどうして元にジャモンが居るんだ？」

しかし俺の問には答えずライカはこちちへ来るようひと手招きをしてくる。言われるまことに俺はライカの元へと歩いていく。

「朝食の準備が出来ている。話は食つてからだ。」

「・・・・・

ライカって俺が聞いたことに答えない時が多いような気がする、なんて思いながら俺は部屋の中へと入つて行つた。

昨日、ライカと話した部屋の中央にあるテーブルにはすでに食事が用意されていた。それを見た途端、急に空腹を覚える。

「見かけによらず大食らいってのは聞いてある。好きなだけ食え。落ち込んでいても腹が減る時は減るもので、俺は席につくと『いただきます』と手を合わせ用意してもらつた朝食に手をつけ始めた。カーミアの料理は少し辛目だったけど、イリツィアの料理は更に辛かつた。でもおいしい。俺は手を止めることなく黙々と食事を口に運び続ける。

少し経つてから目の前から呆れたような盛大なため息が吐き出されるのを聞いて、俺は顔を上げた。

「・・・・・信じられんくらいに食うな。」

「・・・・・そう?」

「その体のどこにこれだけの量に入るんだ?」

心底呆れているようで、ライカの目は驚きを通り越していた。用意はしたけどまさか本当に平らげる勢いだとは思つてもいなかつたみたいだ。

俺はもぐもぐと咀嚼しながら首をかしげた。これでも俺は少ない方なのに。他の部員なんて俺の倍の量を食べる奴だって居た。

「運動部だったからたくさん食べないともたなかつたんだ。」

そこで俺はここへ来たのが昨日だと言うことに気がついた。まだ二日目なんだ。すっかり馴染んでしまつていてからすっかり忘れていたけど。

「・・・ウンドウブ？」

ライカは俺が初めてデイに野球のことを話して聞かせた時とまったく同じ顔をしていた。まるで理解出来ないと言つたような。

「うーん、要は・・・もの凄く体を動かしてたつてこと。食べないと回復しないだろ？」

「あなるほど。戦争みたいなもんか？」

その返事に俺はつい笑つてしまつ。

「そんな物騒なものじゃないよ。決まり事を守つて楽しくやるもの。」

「・・・・・そうか。」

最後まで納得が出来なかつたのか、ライカは首をかしげたままだつた。

俺はテーブルに用意されていた全ての食事を平らげると「いぢそうさま」と手を合わせ、食器を重ね始める。

「・・・本当に、聞いていた通りだな。お前は。」

ライカがせつせと食器を片付ける俺を見て笑いながら言つた。なるほど、俺の取る行動は全部デイから聞いていたのか。

「だが、やつと笑つたな。」

「え？」

ライカは背もたれに預けていた体を起こし俺の方へと前傾姿勢になる。

「笑つていい。それだけで案外気持ちは楽になるもんだ。」

「・・・ライカ・・」

初めて会つた時は比べ物にならないくらい優しい顔だった。最

初は俺を殴つたり粗雑な扱いをしたりする嫌な奴だったのに。

いつからこんな顔で俺を見るようになつたのか。

そこで俺は沸きあがる疑問を口にした。ずっと、思つていたことだつた。

「ライカはどうして『デイの頼みを聞いてくれたんだ?』

まさしく一人は犬猿の仲のはずなのに。二人が対峙している姿は少ししか見なかつたけれど、短い時間ですら分かるほどに「一人は互いを嫌いあつていた。

「仲が悪いんじゃないのか?」

それなのにデイの頼みを聞き入れて俺を預かつたりするなんて。誰だつて疑問に思つはずだ。

「よろしくはないさ。今だつてあいつが自滅してくれることを待つているくらいだしな。」

「・・・だつたらどうして。」

ライカの言葉に俺は更に疑問を深める。俺だつたらそこまで嫌いな相手に協力なんて出来ないと思つ。

「あいつに貸しを作つておくのも悪くないだろ?」

ライカはそう言つたけれど、俺にはそつは思えなかつた。ライカは明らかに自分を危険な立ち位置にしている。まだ俺の存在はタランフィリアには知られていないけど、もしバレたりしたら否が応もなく巻き込まれるのは必至だ。

「本当にそんな理由で?」

「それ以外に何がある。俺はあいつが嫌いなんだ、もうずっとな。」

ライカは唇の端を吊り上げて、見慣れた嫌な笑みを浮かべて見せた。

突き落としたり、慰めたり。ライカは一体何を考えているんだろう。興味が頭をもたげ、俺は口を開こうとした。けれど聞く前にライカが席を立ち部屋から出て行こうとする。

「ライカ!」

「何だ。」

「どこに行くんだよ。」

「・・・お前と違つて俺は色々と忙しいんだよ。ガキの相手なんだから忙しいんだしてられつか。」

今度は突き放された。まあ、ライカも王様なんだから忙しいんだうづけど。

ライカはそのまま部屋を出て行つてしまい、俺はライカが出て行った扉をしばらくの間ずっと見ていた。

満腹になつて、昨日も一晩ちゃんと寝て、心が落ち着いていた。昨日よりずっと心は冷静だ。俺は昨日ライカから聞かされたことを考え始めた。

デイを好きな気持ちは変わらない。でもそれがデイを苦しめると言つのなら俺はいなくなつた方がいいのだろうか。

そうすれば少なくとも戦争になつたりはしないのかも知れない。

「・・・デイが好きなのを、諦めるつてこと？」

俺にそれが出来るのかな。こんなにも好きなの。考へても考へても、それは選べないような気がして俺は考へるのをやめた。

今こうして一人で考へていたつて答えなんか出ない。

俺は満腹な腹をさすつてから立ち上がつた。無性に体が動かしたくて仕方ない。

ふとベッドの上に視線をやるとそこには俺のカバンが置いてあつて、近づいて中を見てみるとボールとバットとグローブが入つていた。まあ、中身が変わっているなんてことはないんだろうけど。

カバンの横にはいくつかの服が置いてあつた。これを着ろつてことなのだろつか。手に取つて広げてみると動きやすそうな服だつたので、俺は着ていた服を脱ぎそれに着替えた。

そしてカバンを持って部屋を出ようとした所で一度振り返る。

「ジャモン、ちょっと出かけてくるな。」

声を上げると遠目にジャモンがこちらを向いて、そしてまた地面に寝そべるのが見えた。相変わらずマイペースな奴だ。笑いながら俺は部屋を出た。

長い廊下が左右に広がっていて、とりあえず俺は左へと歩き始める。ずっと歩き続けると先に階段を見つけたので行ける所まで降りた。その間、誰にも会わなかつた。

この城にはライカしかないのかな。そう思つてしまつ程に静まり返つている。

一階にたどり着いたのか広間にすると反対側の壁に大きな扉があつたので俺はそこから外に出た。きちんと慣らされた地面が広がる何もない場所。

「・・・何するこなんだ。」

でも丁度いい。

呟いて俺はカバンを地面に下ろし、中からボールとグローブを取り出した。一人でするのはちょっと味気ないけど仕方がないと、俺は壁に向かつて一人で投球を始めた。

壁がボールを弾く音が何もない場所にこだまする。それだけで無心になれる。

やつぱり頭がこんがらがっている時は野球をするに限るな、何て考えながら俺はひたすら黙々と投球練習をしていた。柿崎が居たらちゃんとキャッチボールが出来たのに。

それからどれくらい一人でそうしていたのか、少しずつ息が上がり始めて体が慣れてきたのを確認してから俺はボールとグローブを地面に置くとランニングを始めた。ダッシュを混ぜながら延々と何周したのか。

「・・・・・疲れた・・・

足を止めその場に座り込んだ。空を仰ぐと青い空が広がっていた。

「あー、何か・・・ちょっとだけすつきりしたかも。」

地面にじろりと横になりぼうっと空を眺めていると。

「お前は何をやってんだ。」

「どこからかライカの声が聞こえてきた。声のした方を向くと城の三階の窓からライカが俺を見下ろしていた。表情は呆れきったようなそれ。

「あ、ライカ！」「めんー、ちょっと場所借りてた。」

「それはいい。何をしているのかと聞いてるんだ。」

「体動かしてたんだ。なんかしてないと落ち着かなくて！」

声を張り上げているとライカが不意に窓の淵に足をかけ一気にそこから飛び降りた。

「ライカ！・・・って、・・・マジで？」

確かに三階から飛び降りたはずなのに、ライカはたいしたことでもないよう綺麗に着地するとこっちはと近づいてくる。

「足、何ともない？」

頑丈そうだとは思つていたけどつい心配になつて訊ねた。

「は？ 何がだよ。」

「だつて三階から飛び降りたのに・・・」

「別にあれくらいの高さくらい何でことないだろ。」

それはきっとライカだけだと思つよ、とは言わなかつた。

「部屋に居ないからどこへ行つたかと思えば、こんな所で何をやつてんだ。」

「何もしてないと嫌なことばっかり考えるからや、ちょっと体を動かそつかなーと思つて。」

埃を叩きながら俺は立ち上がる。

「ああ、ウンドウブとか言つつか？」

「あはは、ちょっと違うけどまあそんなもんかな。おかげでひょいとすつきりした。」

側にあるボールとグローブを拾うとライカは興味津々な感じで手を伸ばしてきた。その手にボールと手渡すと繁々と見入つっていた。

「これは？」

「ボール。」

「何をするものなんだ？」

「これを投げて、あっちのカバンに入ってるバットで打つんだ。」「バット？」

口で説明しても分からるのはティで学んでいたので、俺はライ力を引き連れてカバンに近づくと中からバットを取り出しライ力に見せる。

「このボールを少し離れた所から投げて、バットで打つて遠くへ飛ばすんだ。」

「・・・・・」

説明してもまだ理解して出来ないのかライ力が何とも言えない表情をしている。まあ、口で説明したって知らないものを理解するのは難しいよな。

「じゃあさ、ちょっとやってみる?」

「・・・俺がか?」

「ちょっと付き合つてよ。一人でやってても味気なかつたんだ。」

俺は変な顔をしたままのライ力に詳しく説明を始めた。事細かに説明をしていくとようやく理解をしたのかライ力が「何だ、そんなことか」とまるで嘲笑うように嫌な笑みを浮かべる。

「いい?じゃあ俺がボール投げるからライ力が打つてよ。」

「おう。」

俺は野球シユーズに履き替えるとほど良い距離までライ力から離れ足元の土を慣らした。ライ力が説明した通りの構えを離れた場所であるのを確認してから大きく腕を振りかぶる。

まずは軽く一球。

ライ力に向けてボールを投げると何とも気持ちのいい快音を立ててライ力がいとも簡単に打ち返してしまった。ボールは弧を描き反対側の壁にまで届いてしまった。

ゆるい球だったからって、これはちょっと。

「おら、そんな球誰だつて打ち返せるだろ?」

「・・・・いや、ライ力才能あるんじやない? いきなり長打が打てる人つて中々いないんだけど。」

カバンからもう一つボールを取り出すと俺はグラブの中でそれをきつく握り締めた。

「じゃあ、次はちょっと本気で投げるけどいい?」

声を張り上げると「初めっからそうしろ!」と怒鳴られてしまつた。ゆるい球でも超初心者に見事に打ち返されてしまい、闘志に火がついてしまう。

じりじりと照りつける太陽が甲子園を思い出させる。こんな風に暑くて、埃っぽさが妙に心地よかつた。つい昨日のことなのに随分昔のことのように思い返しながら俺はまた腕を振りかぶる。

この一瞬の緊張感がたまらなく好きだった。

俺は短く息を詰めると、全力で球をライカに向かって投げた。

ライカがバットを振る。空を切る音が俺の元に届き、直後ライカの背後でボールが壁に当たる音が響いた。

「・・・・やつた!」

ライカが空振った。小さくガツッポーズをしているともの凄い形相でライカが俺へと詰め寄つてくる。

「お前、今の球は何だ。」

「・・・・へ?」

「何か曲がつたぞ?」

それはスライダーをかけたからなんだけど。説明が難しい。といふか、よく球筋が曲がつて分かつたな。よっぽど目がいいんだ。「曲がるよう投げたんだから曲がるよ。」

超初心者相手に大人気ないとは思うけど、かけてなかつたらたぶんまた長打を打たれていたと思うから。見ていて分かつたけどライカのスイングの軌道はボールが落ちる直前までは完全に真芯を捕らえていた。ライカの運動神経の良さにはホント感心してしまつ。

「しかし、打てないと悔しいもんだな。これは。」

「だろ。」

「だがあ前の腕が良いんだろう。投げようとしていた時の表情なんてまるで別人だつたぞ。」

「ヤーヤと笑いながらそう言つてくるライカに俺は思わず真っ赤になってしまった。まさかそんな風に言われるとは思つてなかつたからちょっと感動してしまつた、のに。

「昨日はあんなに泣いてたのにな。」

「うーつるさい！」

更に顔を真っ赤にしながら俺は思わずライカを叩いていた。昨日は昨日、今日は今日だ。

それから俺たちは一人で野球をして楽しんだ。途中でピッチャーがやりたいと言つたライカにポジションをチェンジしてみると、こがまた見事な剛速球を投げてきて。バットに当てるのが精一杯だつた俺はライカに大笑いをされ、かなり悔しい思いをしてしまつた。ひとしきり野球を楽しんでから汗をかいた俺は一区切りをつけ、ライカに風呂をねだつた。案内された風呂場はカーミアと同じくらいに広くてまたもや温泉気分を満喫してしまつ。こんなのがびりしている場合じゃないってのは分かつていいんだけど、今は今で楽しむしかないと俺はついつい長風呂になつてしまつた。

この時どこかで予感をしていたのかもしれない。

これから巻き起こる風のような現実には、安息なんて全くないってこと。

俺がイリツィアに来て一週間が経つた頃、事態が動いたとライカが俺の所へやってきた。

「今日、正式な断りをタランフィリアに入れるそうだ。」

「・・・そう・・・」

それは嬉しいもあり、怖くもあった。デイの選んだ選択がこれら何を巻き起こすのか想像すら出来なかつたから。

それと同時に、デイが俺を選んでくれたことは嬉しいのに心の底からは喜べない自分がいることに俺は気がついていた。

「嬉しくなさそうだな。」

それを見抜いたのかライカが幾分冷めた口調でそう言った。

「嬉しいとか、そう言う問題じゃない。」

本当に断られたくらいでタランフィリアの王女は戦争を仕掛けてきたりするんだろうか。ライカが深読みしているだけなんじゃないのか。どうせなら、そうであつて欲しかつた。

俺には何も出来ない。ここに存在しているのに、まるで無いかのように扱われているから。でもそれに不満はない、デイは俺を守るうとしてくれいるんだから。

「まだ戦争が起こらないで欲しいなんてお綺麗なことで思つているのか。」

「当たり前だろ！ だつて馬鹿みたいじゃないか！ そんなことで争うなんて・・・・・」

「争いを起こさせない方法ならあるだろ？・・・」

ニヤニヤと笑うライカを殴り飛ばしてやりたかった。でも、それはもう何度も考えたことだつた。デイが王女の申し入れを受け入れたら無意味な争いも血も流れない。

俺の都合と多くの人の生死を天秤にかけるのなら、俺は後者を選びたかった。

ただ、それを選ぶ勇気が持てない。

どうしても「デイ」を失いたくなくて。

こんな自分がどうしようもなく嫌だった。

「デイと・・・話がしたい。」

あれきりずっと会つてない。声も聞いてない。自分が何の為にここにいるのか時々忘れそうになつてしまつて、これは夢なんじゃないかと何度も思つた。

だけど全ては現実でしかなくて。

「それは無理だ。」

「でもつ、結局俺はデイから何も聞いてないんだ。デイの気持ちを、ちゃんと聞きたいんだ。」

俺は今回のことを見てライカから聞いた。デイからは何一つ聞かされていない、だからなのかもしれないけどどうしても今一つ実感が持てないのもあつた。

「そんな気持ちのお前が会いに行つた所で何の意味も無い。会えば、更にあいつを苦しめることになる。」

「・・・・・俺が、デイを、苦しめる?」

「お前一人を選ぶ為にあいつが犠牲にするものの大きさを、お前はまだ受け入れ切れてない。あわよくば、どうにか万事を収められないか・・・」

「・・・・・」

「全ての人間が幸せに生きられないか、なんて考へてるんだろう?」

「それは図星だった。確かに俺はそう考へている、だけどそれの何が悪い?」

「そもそも、そこを天秤にかけている時点でお前には何もする権利がないんだよ。」

ライカの語調が不意に強くなる。俺は思わず身を竦めてしまった。

「あいつは自分の国の未来を捨ててまでお前を選ぼうとしている。それ程の覚悟つてことだ。だがお前は何だ?自分の想いも捨てられず、尚且つ戦争も起こらなければいいと思つていて。・・・何の犠

牲も払わざ全てを手に入れることができるとでも思つてんのか？」

「それは正論なのかもしれない。何かを得る為には何かを犠牲にしなければならない。

そんなことは分かつている。

「もしお前が何かをしたいと思い、何かを変えるつもりなら・・覚悟を決める。お前の意思で全てが変わってしまう人間もいるんだ。あいつの元へ戻りたいのならそれを決める。その代わり、何もしないでこのままここにいるのならそのまんまの気持ちでいいればいい。反論が出来なかつた。ライカが言つてることは正しいと、思つてしまつた。

自分でもどこかでそれを感じていたから今まで何もしなかつたのだ。行動に移せば何かを選ばなければならなくなる。分かつていて、俺にはそれが出来なかつた。デイを好きだという気持ちを諦めるなんて、とてもじゃないけど出来ない。でも自分のせいで起こらなくていい争いに巻き込まれ命を落とす人がいるのも嫌なのだ。

全部、全部ライカの言つとおりだ。

俺は全てから逃げて甘えている。

たとえ俺自身が巻き込まれてしまつた側の人間であつても、関わつてしまつた以上は俺にも責任は出でてくるのだから。

何かを選び、捨てなければならない。

デイがタランフィリアに返事をするということで自動的に俺は多くの人の命を危険にさらす選択を取つてしまつことになる。

自分の想いか、他人の命か。

今日、デイが返事をするといふのならその刻限はもう僅かしか残つていはないはずだ。

「人に惑わされるな。お前がどうしたいのか、何をするべきなのかを考えるんだ。その上であいつに会いたいと言つのなら協力はしてやる。」

「・・・・ライカ・・」

「何を選んだとしてもお前が責められるいわれは無い。誰だつてそ

うやつて生きているんだ。」

「・・・・・うん・・・・

ライカの厳しさは優しさだ。きつい言い方をしてくるけど、それは全てのことを見ての言葉だから素直に自分の中に入ってくる。

俺は改めて考えた。

今、自分がどうしたいのか。

その時間はほんの少しのものだつた。初めから俺には答えが出ていたのかもしない。

顔を上げ、俺はライカと目を合わせ言った。

「ライカ、俺をデイの所へ連れて行って。」

俺は守る。デイへの想いも、デイの国の人々も。

「決めたのか。」

「うん。俺は、何も捨てないし何も諦めない。・・・・・戦うよ。」

戦う。何をどう戦うのかはまだ分からぬ、戦争になってしまふのだとしたらそれでもいい。それでも俺は守つてみせる。

「いい顔になつた。」

ライカがニヤリと笑みを浮かべた。そして手を差し出してくる。

「連れて行つてやろう。」

「・・・ありがと。」

俺はライカの手を取つた。

運命の選択をした。もうきっと、戻れはしないだろうナビ後悔はしていなかつた。

「球を放つていた時のお前の顔は戦う戦士そのものだつた、お前なら・・大丈夫だろ。」

不意にかけられた言葉に、熱いものが込み上げそつになつて俺は唇を噛んでそれを堪えた。

「泣き虫なのに変わりはないがな。」

最後には茶化してくるライカを俺は一度殴つてやつた。それから、全力で笑みを浮かべる。

俺はもう泣かない。

立ち向かつて行つてやるんだ。

それからのライカの行動は速かつた。こうなることが分かつてい
たんじやないかと思うくらい全ての準備が整えてあつたのだ。

「行き先はこいつが知つてゐる。お前は乗つてりやいい。」

「うん、ライカ・・・ありがとう。」

一人で怪鳥に乗り込みしつかりと手綱を手に巻きつけながら俺は
ライカを見下ろした。

カバンを肩からかけ、俺はライカにお礼を言つた。全部片付いた
らちゃんとライカにお礼を言いに来よつ。そして色々話がしたい。

「じゃあ、行つてくる。」

「ああ。」

怪鳥が何度も羽ばたくとその場に風が吹き荒れる。ライカの赤い
髪が風に舞うのが綺麗だつた。飛び立とつとする俺をずっと見続け
るライカの目がとても優しくて。

デイのそれと重なる。

前にもこんなことを思つた気がする。全く似てない二人なのにそ
の眼差しだけが酷似してゐるのは気のせいなんだろうか。

俺の思考を振り切るかのように一気に怪鳥が舞い上がりすぐには
イカの姿が小さくなつていつた。俺はすぐに前を向き体勢を低くし
た。行き先はカーミア、この鳥が連れて行つてくれる。

俺は強い眼差しで前を見ながら歯を食いしばつた。

デイ、今から帰るから待つていて。俺の言葉を、気持ちを聞いて
から決めて。

たつた一人で全てを決めないで。

強く心に思いながら俺はたつた一人で戦つてゐるデイの元へ一直
線に舞い戻つた。

カーミアに辿り着いたのはすぐだったようにも感じた。実際にはかなりの距離を移動したのかもしけないけど、俺にはほんの僅かな時間でしかなかつた。

城の横にある怪鳥が離着陸する専用の場所に鳥が舞い降りると、何事かと側の小屋から男が出てきた。怪鳥の世話をしている男だ。

「ごめん！こいつ見ててやつて！」

鳥から飛び降り走り出しながら俺は呆気にとられている男に向かつて叫んだ。そして向かつた先は玉座の間だ。

「デイはきっとそこに居る。

長い階段を一気に駆け上り廊下を走り抜ける俺を通りすがる侍女たちが呆然とした眼差しで見ていたけど、そんなものを気にしている暇なんてない。

やがて廊下の先に目的の部屋の扉が見えた。息をつく間もなく俺はその扉の向こうへと飛び込む。

「デイ！」

足を止め、上がった息を整えようと短い呼吸を繰り返しながら玉座を見る。

そこには目を見開いたデイが半ば腰を浮かせるようにしてこる姿があつた。

「レン、どうして……」

「話があるんだ。」

デイが俺にかけ寄ってきて、強く肩を掴む。

「どうして戻つてきたりしたんだ。」

「話があるから。」

「それは、全てが終わってからでいいだろ？。」

「良くないよ。デイ、俺のいない所で全てを決めないでよ。」

肩を掴んでいるデイの手を俺は握り締めた。

「・・・レン？」

眉根を寄せるデイに向かって俺は真っ直ぐに視線を投げかけた。

「固く決まった心はこれっぽっちも揺らがなかった。

「デイが俺を守ろうとしてくれるのは嬉しい。だけど、自分一人で決めないで。俺も一緒に決めさせて欲しいんだ。」

「デイは明らかに困惑した表情をしていた。俺がこんな事を言い出すなんて考えてもいなかつたようだ。

「デイ。一人で何でも解決しようとしたしないでよ。俺は何の為にデイの側にいるの。」

「レン・・・」

「一人でなんて戦わないでよ。」

俺の言葉にデイの顔が一瞬だけ歪んだ。俺はデイの手を両手で強く握り締めなおす。

「俺も一緒に戦う。デイの守りたいものは、全部俺も一緒に守る。」

「・・・・レン」

「デイの大切なもの、俺にも守らせて欲しいんだ。」

額をデイの胸にこつんとくっつけ、繰り返した。

「タランフィリアの王女が何をしてこようとも、俺はこの国を守るから。だから、ちゃんと言つて。」

「・・・・・レン」

「俺がいるから、諦めて欲しつつて。ちゃんと言つて。断つて。」

一言一言を、デイに。自分に言い聞かせるように区切つて強く言い放つた。

「・・・・いいのか?」

長い沈黙の後、震える声でデイが言つた。顔を上げると顔を歪めたデイがいた。

「レンが思つている以上に辛いことに巻き込むことになる。それで も?」

頭にデイの大きな手が触れ、優しく撫でられる。

「巻き込まれるんじゃない。俺が選んだことだから、デイはそんな風に思わないで。」

「レン。」

「それに、俺の方こそごめん。」

「これはずっと胸の中にあつた想いだった。俺が居なければこんな風にはきっとならなかつた。ディにこんな苦しい選択をさせてしまつたのは俺が原因なんだ。

だけど、出会わなければ良かつたなんて思えないんだ。

「ディに苦しい思いをさせて、『ごめん。』」

何も知らない俺を必死に守ろうとしてくれていたディの心の優しさがどうしようもなく嬉しかつた。それと同じくらい、苦しかつた。もう守られるだけなのは嫌だつた。

「これからは俺も、ディを守るから。」

「・・・レン・・・」

ディの首に腕を回し抱きしめる。いつもディにしてもうつているように優しく。すぐにディの腕も俺の背に回り俺たちは久しぶりに抱きしめ合つた。

温もりがこんなにも近くにあるということは当たり前のことではないんだ。それを痛感しながら俺はディの首筋に顔を埋める。

「愛してるよ、ディ。」

「・・・俺も、愛してる・・・レン」

この腕を失いたくない。その為だったら俺はどんなことだつてみせる。

俺は決意した。

「・・・なるほど・・・」

涼しげな声がデイの向こう側から聞こえてきたのは一度その時。俺はデイの肩に埋めていた顔をそちらへ向ける。

「どれほど王を説得しても無駄だったのがようやく分かりましたね。」

その人物を目にして俺は思わず息を呑む。見たこともないくらいの美人さんがそこにいたのだ。声からして男なんだろうけど。

「しかし、お一人の時間に浸るのはもう少し後にしてもらつてもよろしいですか。」

につこりと微笑みかけられ、俺は慌ててデイから体を離した。

その人はつかつかと俺に近づいてくると目の前で膝をつき俺の手を取ると自分の額に押し当てる。

「お初にお目にかかります、レン殿。私はナジエイル・リー。王の側近を務めています。」

「あ、はい。初めてまして・・・」

ナジエイルと名乗ったその人は顔を上げると切れ長の目を細め真つ直ぐな眼差しを俺に向けてくる。この国の挨拶か何かだろうか、そう言えば初めてこの城に来た時にデイも似たような仕草をしていた。

俺は至近距離にいるその人をまじまじと見た。藍と銀を混ぜたような不思議な色の髪が腰までかかっている。目の色は深い青。一見すると黒にも見えるけど、よく見ると青い色をしている。前から思つてたけど、この世界の人つて顔立ちが整つているというか、美人が多いというか。デイはかつこいい部類なんだけど、このナジエイルという人は美形だ。兎に角美形だ。こんな美人さんは見たことが

ない。男だけど。

ナジエイルは俺の手を放すとゆっくりと立ち上がり、再び笑みを浮かべて見せた。

「王の心を射止めた方がこんな純朴な少年だとは思つてもみませんでした。」

「ナジエイル、よせ。」

「おまけにどこからどう見てもただの少年でしかない彼が、世界樹を生み出した者だと言われて信じがたくもあります。」

「ナジエイル！」

ディは俺の腕を引くと強い力で自身の腕の中に抱き込んだ。

「レンを前に無礼な口を聞くのは許さん。」

「・・・申し訳ありません。」

全くそう思つてないような表情でナジエイルは言つた。態度と言葉で自分が良く思われていないのは明白だつた。

それはそうだ。俺が居なければタランフィリアの王女とディは結婚してカーミアは安泰になるのにそれを俺が邪魔するから。ディの側近といつになら快く思わないのは当然だ。

「して、レン殿。先程のお言葉ですが。」

「さつき？」

ナジエイルはあくまで微笑みながら何事もなかつたかのように俺に語りかけてくる。

「タランフィリアと戦つと申されたでしょう。」

「あ、・・・はい。」

嫌な感じはしないけど、言葉の端々に棘がある。ディもそれを感じ取ったのか俺を抱きしめる腕に力を込める。

「今のお二人を見ている限りあなた方を引き離し、王にはタランフィリアの王女と結婚をして頂くのはどうやら無理のところ様子。」

「あ！当たり前だ！」

涼しげに言い放つナジエイルに、俺はつい声を荒げディの腕にしがみついた。

「王は断り、王女は怒り、戦争は避けられない現実となるでしょう。レン殿、あなたは今、全てを守るとおっしゃられましたがそれはどうのうになさるおつもりなのですか？」

「え？」「

「戦争は確実に起ころるでしょう、あなたはぜひやつて全てを守るつもりかと聞いているのです。」

ナジエイルの言葉に一切の容赦はなく、俺は返答に詰まってしまつた。具体的に何かを考えていた訳ではないからだ。ただ、デイー人に負担をかけたくない。自分も何かをしたくて。

戦争なんてしたことはもちろんない。だけどそれでも守りたいと思つたから。

「・・・それは、まだ・・・でも」

「王には国民を守り抜く義務がある。それを放棄させるのはあなたですよ、レン殿。それを重々承知された上で改めて後ほどお心をお聞きしましょう。」

ナジエイルはデイに視線を向け、厳しい表情を浮かべた。

「王、じきにタランフィリアの使者が参ります。どうぞご準備を。」
深く頭を下げるとなじエイルは踵を返し、部屋から出て行つてしまつた。俺はその背中を見つめることしか出来なかつた。

ナジエイルの言つていることは間違つていない。だからこそ彼の言葉は重かつた。

「・・・・レン、すまない。」

「デイ・・・」

「あれは、责任感が強くてな。」

「・・うん、分かつてゐる。ごめん俺、もっとちゃんと考えて物を言わないと駄目だった。」

全てを守る。言葉にするのは簡単なことだけ、一体どうすれば俺はこの言葉を守れるんだろう。俺はナジエイルに言われてようやく自分がどれだけ重たい言葉を放つたのかを知つた。

ナジエイルが部屋を出て行つてから俺たちもそこを出て、ディイに連れられるまま長い廊下を俺は歩いていた。

「ディイ、どこに行くんだ？ もうすぐタランフィリアの人来るんだろ？」

返事の前にここにたどり着けたのは良かつたけれど、ディイはどこかのんびりしているようにすら見えるのは気のせいだろうか？

「ああ。その前に用意をしておかないといけないんだ。」

ディイは振り返らずに俺の手を引いたまま前を歩き続ける。それ以上は何だか聞きにくい雰囲気を感じたのでそれきり口は開けないまま、俺はある部屋まで連れて行かれた。

一人で豪華で大きな扉をくぐり、

「・・・・・・・

部屋の中にあるものを見て俺は言葉を失った。

所狭しと並べられているきらびやかな衣装の数々にも驚いたけどそれ以上に、ガラス棚に並べられているものが。

俺の見間違いでなければガラス棚の中にあるものは宝石だ。大小色とりどりの宝石が棚中に溢れんばかりに並べられていく。壁一面にあるその棚全てがそうなのだとしたらと思つと俺は冷や汗をかいてしまう。

「レン、豇つちへ。」

息を呑む俺を気にした素振りも見せず部屋の中へと導くとディイはそこで手を放し、自分はガラス棚とは反対の壁へと歩いていく。そこは壁一面がクローゼットの扉のようだった。

少しの物音を立ててディイがゆっくりとその扉を開く。

「・・・・・・・

俺の予想は当たつていた。そこには一面に服がしまわれていく。

「・・・・・ディイ・・・・？」

嫌な予感がする。ディイの目的が少しずつ見えてき始め俺は思わず一步後ろへと後退した。

「レンには・・・やはり、白が似合つな。」

そう言つてこいつかの白い服を手に取ると、トイはよつやく俺を振り返る。

「何？それ、俺が着るの？」

もう間違いない。ここは衣裳部屋で、俺はこれからトイが手にしている服に着替えさせられるのだ。でも、何で俺が？

「当たり前だ。タランフィリアの使者は王女の代わりの者、正装でなければ無礼だろう。」

「・・・俺も会うの？」

「もちろんだ。レンを会わせなければ納得はしないだろうからな。トイの目は至って真剣そのもので、これが『冗談なんかじゃない』と告げていた。まさか俺までその使者とかいう人に会う羽目になるなんて思つてもみなかつた。

特定の相手がいるから『めんなさい』で終わるほど簡単な話じやないつてことか。そもそも国を統治するほどの人たちの結婚つてのがあまり俺には想像がつかないんだよな。

一般人のなら兄貴の結婚式に参列したから分かるんだけど。

「レン。」

強く名前を呼ばれ、俺は観念した。のろのろとトイの側まで近づくと、トイはすぐ横にあつた小さな台を指差し「服を脱いでそこへ」と簡潔に言つ。そりや、着替えるんだから服を脱がないと始まらない。俺は泣きそうになりながら今着ていた服の下着以外全てを脱ぎ落とし、その台へと乗つた。

トイは俺にはどう着るのか見当もつかないその服を器用に一枚一枚着せていきながらも、ふとその手を止めた。

そして顔を上げると真つ直ぐに俺を見つめてくる。

「トイ？」

「いきなりこんなことになつてすまなかつた。」

トイの手が俺の頬に伸ばされ触れられる。

「いひつて言つてるだろ、俺が望んだことなんだからトイはそんな風に言わないで。」

「

「だが、もつと俺に力があればこんなことにはならなかつた。」

「何の理由もなく求婚を跳ね除けられれば俺を理由に擧げる必要もなかつた。デイはそれを悔やんでいた。そんなのデイのせいじゃないのに。」

俺は頬に触れているデイの手をそつと包み込む。大きな骨ばつたデイの手が俺は好きだつた。

「俺は今のデイで良かつたと思つてるよ。」

「それは、どう取つたらいいんだ。」

少し複雑なそうにデイが苦笑いを浮かべ、俺はこつこつと笑う。「だつてデイにもつと力があつて、全部自分で片付けられたりしたら俺の出る幕なんてないだろ？ もしそうだつたら、俺ちょっと寂しかつたと思う。」

どんな形でも俺はデイの助けになりたい。一緒に乗り越えたい。一人でそれをされたら俺は自分がデイの側に居る意味をきつと見出せなかつた。

「デイから見たら頼りないと思つけど、俺にも頼つて欲しいんだ。」

「・・・レン。」

「だから、今回のこととは俺・・むしろ嬉しいよ。そりや、他の国の中の偉い人に会つたりするのはあんまり得意じやないけど。俺が居ることでデイの助けになるのならそつちのが断然いい。」

デイの手に頬をすり寄せ、ニカッと笑つてみせた。するとデイは泣き出しそうに顔をくしゃりと歪め俺を抱きしめると胸に顔を埋める。台に立つているから俺の方がデイよりも少し高い位置に目線があつて、俺は初めてデイを見下ろしていた。

急に愛しさが胸に込み上げてきて俺はデイの頭をギュッと抱える。

「レンは強いな。」

ぐぐもつた声が耳に届いて俺は「そんなことないよ」とデイの耳元で囁いた。デイが一緒に居るからそう思えるだけなんだ。一人じやきつと何も出来なかつた。

「・・・レンを愛している。それが何を意味するのか分かつていて

も俺にはレンしか選べなかつた。今まで俺を信じついて来てくれた国民を裏切つて、切り捨てる結果になると知つても・・・俺にはもう、レンが側に居ないのは耐えられない。」

国王としての責任を投げ出してしまおうとしている自身に、デイは苦しんでいた。同時にそこまで想われていることが嬉しかつた。嬉しかつたけど、ここまでデイを苦しめてしまつたのはやはり自分なのだ。俺は胸が締め付けられてしまう。

「・・・もし、俺が戻つて来なかつたら・・・どうしてた?」

するいことを聞いてしまつた。聞いたつて仕方のないことだけど、もし自分さえいなければきっとデイは。

けれど、返事は俺が思つていたものとは違つていた。
「戻つてこなくとも断つていたよ。レンを愛しているのに他の人間と結婚など出来ない。」

「・・・そつなの?」

「たとえもう一度と会えなかつたとしても、俺は死ぬまでレンを想つていた。」

会えたけれど、と小さく呟きトイはゆっくりと顔を上げた。

俺は唇を噛み締め零れそうになつた涙を堪えた。少しでも、そつなんじやないかと思つてしまつた自分をすごく恥じた。

ここへ、戻つてこられて良かつた。戻らなければトイを一人で戦わせることになつっていた。

「ああ、だから俺はまた、この世界に呼ばれたのだ。トイを守るため。」

「トイ」

トイの両頬を手で包み込みそつと口付ける。トイも俺を抱きしめてくれて、どんどん口付けは深くなつていいく。想いが溶け合つよう

な錯覚を覚えながら俺は少しだけ泣いてしまった。

唇を離してからも俺たちは互いを見つめ合つた。深い灰色の目が優しげに細められ、窓から入り込む日差しに銀髪が照らされ輝いていた。

本当なら会うはずのない人だった。こんな運命が待つていなければ、きっと自分の世界で人並みの人生を送っていた。出会わないままに生きていた。

「・・・俺、ここに来れて良かつた。ティと会えて良かつた。」

「・・・レン」

「この人を守るために何だつてする。何だつて捨ててやる。
がんばろうな。」

待ち受けているだらり戦いは俺の想像なんて遙かに凌駕するものだと思つた。

「ああ、がんばろう。」

勝ち負けじやなくて、ただ守る。自分の守りたいものを。俺たちには互いを守りあつかのよつに強く抱きしめ合つた。

着替えを終えて玉座の間に戻るとすでにナジエイルが待っていた。他にも数人の兵士が壁際に等間隔に並んでいる。

全員の視線が俺たちに集まり居た堪れない気持ちになつたけど、俺は胸を張つてデイの隣を歩いた。ふとナジエイルと目が合つ。その目は驚きに見開かれていて絶句しているようにも見えた。

デイは俺の手を取りながら王の椅子に腰を落とした。俺はその横に寄り添うように立つた。ナジエイルが気になつて彼に視線を向けるとナジエイルはハツとしたように視線を床に落としてしまう。

俺、何か変な格好でもしているのだろうか。

急に不安になつた。デイにされるがまま用意された服を着せてもらつたけど、似合つてないだろ?」ことは百も承知していた。だつて、すごいんだこの服。

着物とアラブ系の服を足して二で割つたような作りで足元まですっぽりと覆われてしまつてゐる。そしてたぶん生地はすごい上質な物、だつて肌触りが全く違う。それに最後に着させられた上掛けに細かい刺繡と宝石みたいなのが散りばめられているんだ。間違いなく高級品。汚さないように気をつけないと。

デイは俺にこれを着せ終えると満足した顔で「綺麗だ」なんて言つてたけどあれは絶対に嘘だ。俺にこんな綺麗な服が似合うはずがない。それに締め付けられて苦しいし。でも正装しなきゃ駄目らしいから、終わるまではこの格好に耐えないといけない。

デイには申し訳ないけど終わつたら速攻で脱いでやる、と心に決めていた。

それから少しして部屋に兵士がやってきて「使者の方が参られました。」と言つてきた。デイはそれに頷き、一度だけ俺の手を強く

握り締める。俺も返すように強く握った。

次に扉があけられた時、そこには兵士と一人の男が立っていた。まだ若いだろうその人は兵士に促され部屋の中央まで歩み進むとテイから少し離れた位置で足を止めた。

「カーミアの王よ。長らく待たされましたが返事を伺いに参つた。」
低くよく通る声が言い放つと途端に部屋の空気が張り詰めた気がする。上からの物言いに俺は内心ムツとしてしまう。

まあ、タランフィリアはカーミアよりも大国なのだからわざわざ返事を聞きに来てやつたって態度なかもしない。言われてみれば自國よりも小さな国に対しても返事だけをわざわざ聞きに来るのも疑問だ。後でデイに聞いてみると「申し込んだ方が足を運び返答を聞く」のがこの世界の通例なんだそうだ。

「う」足労頂き申し訳ない。

固いディの声がそう返事をした。男はそんなディの声音を気にした様子も見せず、真っ直ぐに俺を見てきた。

「返事を聞く前に一つ聞かせて頂きたい。貴殿の横に居る人物は一体なんだ？」

聞かれるとは思つていた。向こうからしてみれば求婚の返事を聞く大事な場に他人が居るのは気になることだろう。俺は自分に矛先を向けられ緊張を覚える。手の平にじんわりと汗が滲みはじめた。

「この者はこの場に必要な人物だ。」

「必要？」

「そうだ。簡潔に申し上げよう。私はタランフィリアの申し出をお断りする。」

ザワツと空気がどよめいた。その様子に俺はナジエイル以外にはこの求婚の返答を知らされていなかつたことを知つた。

「正氣か？その返事が一体何を示すのかわかっているのか。」

「無論だ。分かつていて私はこの返事を申し伝えている。」

まさか断られるとは思つてもいなかつたのか、男はあからさまに

動搖していた。

「・・・その、横にいる人物が着ているものはカーミア国正妃が着るものだとお見受けする。その者はつまり・・」

「そう、まだ正式に迎えてはいなが私の正妃となる者だ。」

「デイの言葉に俺は仰天した。慌ててデイを振り返るがデイは淡々と言葉を続けた。

「この者は私と契り世界樹を生み出した者。もう一人のこの世界の王だ。」

「デイの言葉に使者の男は言葉を失った。信じられない俺を凝視してくる。そして部屋中にいる兵士たちも男と同じような表情で俺を見ていた。

「世界樹を・・生み出した者だと?まさかそんな馬鹿な・・・」

「嘘を言つてどうする。確かに世界樹を生み出した者が再度この地に足を踏み入れたという前例はない、だがこれは間違いなく真実。心と体を契り合わせた人物がいてはタランフィリアの申し出を受け入れることは出来ない。そう、王女にお伝え頂きたい。」

男はデイの言葉を聞いてもなお、信じられない。表情がありありとそう告げていた。

その場を沈黙が支配した。誰も言葉を発することが出来ない空気が部屋に満ち溢れていて、俺は一人おろおろと辺りを見回した。ナジエイルが一人、宙を仰ぎきつい視線で一点を見つめていた。もう取り戻すことの出来ない発言をデイがしてしまったことで、この先に起こることを憂いでいるからなのだろう。

「・・・分かった。」

男が苦々しい声で言った。

「カーミアの返事、確かに受け取つた。だが、その者が世界樹を生み出した者とは簡単には信じられぬ。我が国の王女とてそう思うであらう。何か証明をしてもらえるか。」

証明?俺は男の言い出した言葉に戸惑つた。どうすればいいのか分からずデイの手を握り締めると「大丈夫だ」と言わんばかりに優しく握り締め返される。

「証明など必要ない。私の言葉がその証明だ。」

「……しかし……」

「これ以上言つことは何もない。」

「……良かる。その返事に後悔をしてももう遅いぞ。」

「後悔などせん。」

きつぱりと言い切るデイは、それで話は終わつたとでも言わんばかりに入り口に立つていた兵士に合図をした。兵士が慌てた様子で入り口の扉を開けると男は俺を一瞥してからマントを翻し部屋から出て行つてしまつた。

「・・・デイ・・・」

俺は急に不安に襲われた。男の態度で十中八九戦争になつてしまふのはもう明白だつた。おまけに正妃とか言われて俺の頭は混乱を極めてしまつっていた。

でも混乱した頭でも聞きたいことはたつた一つだけ頭にあつた。

「デイ、この服つて・・・」

「黙つていてすまなかつた。その服は代々受け継がれているカーミアの正妃となるべき人間が着るものなんだ。」

デイはさつきまでの固い表情を崩し、苦笑を浮かべながら俺のそう言つた。

「正妃つて！聞いてたら絶対に着なかつたのに！」

「言つたら着てくれないと思つたから言わなかつたんだ。」

「着るわけないだろ！デイの馬鹿！」

繫いでいた手を振りほどくとデイはすまなさそうに笑うだけで。

「やはりレン殿は『存知ではなかつたのですね。』

遠くから呆れたように放たれた言葉はナジエイルのもの。

「おかしいと思つたのです、それを人前で着る意味を知つていればそう簡単には袖を通さないものですから。」

つかつかとナジエイルが俺たちの側に歩み寄つてくると盛大にため息をついた。

「おまけにレン殿が世界樹を生み出した者であることまで告げて・・

・。言う必要などなかつたでしょ。ついでレン殿の危険度がかなり上がりましたよ。」

「レンは俺が守る。」

「そういう問題ではないのですよ、王。」
子供に言い聞かせるようにナジエイルは呆れ顔のまま『テイを叱つていた。

「いいですか、そもそもあんな言い方をせずとももつと穩便に済ませられる言い方があつたでしょ。あれでは戦争を仕掛けてくれと言つているようなものです。」

「断ればどの道戦争になるんだ。だったら少しぐらには鼻をあかしてやつてもいいだろ。」

「！」

驚いた。まさか『テイがこんな子供っぽいもの言いをするなんて。そんな『テイの反論を聞いてナジエイルが柳眉を逆立てる。そのままガミガミと説教『ースまつしぐらに言葉の応酬が始まった。

何だかナジエイルと話しているとあんなに大人っぽい『テイがまるで子供みたいに見えてきて、俺は込み上げる笑いが押さえ切れなくなつてしまつた。

「『テイ、子供みたい。』

ついに耐え切れなくて俺は声を上げて笑つてしまつた。まるで母親に叱られる子供。大人である一人が、いや主に『テイがなんだけど、こんな子供じみた口喧嘩をしているのがおかしくてしょうがない。

「・・・レン・・・」

しまつた、と『テイがばつの悪そうな顔をした。それがおかしくて俺は腹を抱えて笑つた。

玉座の間には笑い転げる俺と、ばつの悪そうな顔をした『テイと、呆れ返つた顔をしたナジエイルと、唖然としている兵士達がいた。広い部屋に俺の笑い声だけが響く中、まるでさつきまでの緊迫した空気が嘘みたいだった。

「・・・・レン、そろそろいいか。」

唸るように発せられたディイの声に、俺は涙の滲んだ手じりを拭い、「ごめん」とディイに向き直る。すっかりご機嫌を損ねた様子のディイが何だか可愛くてまた顔がにやけてしまったくなるのを必死で堪えた。

「ディイ、ごめん。笑つてる場合じゃないんだよね。」

「その通りだ。」

子供みたいにそっぽを向いてしまったディイの手を俺はそっと掴み笑いかけた。

「じゃあさ、これからどうなるのか、どうするべきなのかを俺に教えて欲しいんだけど。」

使者の男が最後に言つた言葉とナジエイルの言葉から、きっと戦争は起こつてしまつるのは推測出来る。そうなれば何も知らない俺は足手まといになるだけだ。それだけは嫌だつた。

起こらなければいいけれど、起こつてしまつのなら俺は知らないといけない。

「俺、何も分からぬから。」

「・・・レン」

戦わなければならぬのなら、知らなければ話にならない。

戦争とは何なのか、どういうものなのか。

この国の在り方を。

「・・・分かった。」

ディイは少しだけ辛そうな顔をしてから、俺の手を握り締めてくれた。

「レン殿の方がよっぽど大人でいらっしゃる。良い正妃をお迎えになられましたね。」

ナジエイルがにこやかに嫌味を言つと、ディイがまたそれに噛み付きそうになる。それを押し留めて俺はディイを引きずるようにして玉座の間から出て行つた。

俺の部屋にたどり着くとデイは自分の正装を剥ぎ取り、部屋の中にあるソファの上に放り投げた。その横に乱暴に腰を落とすと背もたれにもたれかかりながら天井を仰ぐ。

「デイ、俺もこの服脱ぎたいんだけど。」

側まで近づいて声をかけるとデイがこっちに視線を戻した。

「脱ぐのか？」

「脱ぎたい。これ、苦しいんだけど。」

胸下から腹にかけて帯がギュウギュウに巻きつけられているんだから苦しいのは当たり前だ。でも自分で着たわけじゃないから脱ぎ方が分からなくて。

「もつたいない。」

「？」

「せっかく似合っているのに。」

デイの言葉に俺は頬がカツと熱くなつた。着せられた時にも言ってたけど、それ絶対に嘘だ。こんな綺麗な服が、おまけに正妃って言つたら女物つてことじゃないか、それが俺に似合つてるなんて絶対に嘘だ。

「もう！いいから早く脱がしてよー。」

「・・・分かつた。」

渋々といった感じでデイは立ち上がると俺の服に手をかけ、ゆっくりと脱がせ始めた。帯が解かれ一気に呼吸が楽になると俺はつい安堵の息をついてしまう。

「もつたいない・・・」

脱がすのが心底嫌だと言いたげに、顔をしかめながらデイは一枚一枚俺の服を脱がせていく。けれどその手つきはよどみなく。

「いいじゃん、また絶対着なきやならない機会があつたら着るから。」

出来ればあつて欲しくないけど。

「・・・分かつた、レン。約束だぞ。」

最後の肌着を脱がせながら「デイが嬉しそうに顔を綻ばせる。俺はと言えば、ようやくきつい服から解放された喜びに満ちていた。締め付けられないってすばらしこと思ひ、何て思いながら大きく伸びをしながら、

「デイ、戦争つてすぐに起ころるの？」

脱がせた服を綺麗にソファにかけて「デイの正面に腰を落としそう訊ねると、デイは最後の一枚をこれまで綺麗にソファにかけてからその横に腰を落とした。

「いや、すぐには起ころないだろ？ 向こうも準備が必要だらしく、何より初めに宣戦布告をしなければならないんだ。」

「宣戦布告？」

「突然仕掛けるのは基本的に禁止されてる。もちろん守らない国もあるにはあるが、タランフイリアは今まで宣戦布告をしなかつたことはない。最低限の礼儀はわきまえているようだからな。」

「・・・へー。」

戦争なんて野蛮なものを仕掛けるくらいだからいきなり来るのかと思つてたけど、どうも違うみたいだ。戦争には戦争のルールがあるなんて、何だか複雑な気持ちになつてしまつ。俺は戦争なんて経験したことがないから知らないけど、地球で起ころつてる戦争とかもそんな感じなんだろ？

それから俺はデイに色々なことを教えてもらつた。どんな風に戦争が進められるのか、どんな武器を使うのか、兵士は何をするのか。その戦い方の全てを聞いた。そして終わり方まで。

「ふーん、じゃあ戦争つて言つてもそんな長引くものじゃないんだ。」

「ああ。長くとも七日で終わる。」

たぶん、正しくは「終わる」んじゃなくて「終わつてしまつ」ってことなんだと思う。

タランフィリアの圧倒的な力の前に、戦いを挑まれた国はろくな抵抗もしないまま白旗を揚げるそつだ。戦つたとしても力の差がありすぎて叩き潰されてしまう。下手に抗つて犠牲を出すよりは潔く負けを認めて被害を最小限に抑えた方がよっぽどましなのだろう。それにタランフィリアは基本的な戦闘能力が違うのだと、デイは言つた。

「どうしてタランフィリアはそんなに強いんだ？」

「分からぬ。今の王女が王位を継ぐ前は小国で、簡単に戦争をしかけたりする国ではなかつたんだが……」

だから戦争の期間が短いのに、壊滅的な打撃を受けて滅亡する国が多い。

気分が重く沈んでしまつ。俺にはその王女の考えていることが全く分からなかつた。戦うんじゃなくて、同盟とかすればいいのに。俺が俯いて落ち込んでしまつてると、デイはいつの間に用意したのか水差しからグラスに水を注いで口をつけついた。

「あ、デイ。俺にも頂戴。」

喉が渴いていた俺は水だと思い、デイに手を差し出した。デイも頷くとグラスの半分まで水を注ぐとそれを俺に手渡してくれて、俺は一気にそれを飲み干す。

「……！」

これ、水じゃない！

全てを飲み下してしまつてからそれに気がつき、俺は盛大に咳き込んでしまつた。慌ててデイが俺に駆け寄り背中を撫でてくれる。

「…………デイツ……これ……なに？」

咳き込みながら聞くと、

「……酒だ。」

と返事があった。

「知つていて欲しがったのかと思つたんだ……」「すまなさそうに俺の背をさすりながらデイが俺を覗き込む。少しずつ咳が収まつてくると今度は体がどんどん火照つてきて、目が回り始める。

「・・・あつい・・・」

「レン、大丈夫か?」

おろおろとデイが俺の様子を伺いながら背中をさする。

「・・・お酒なんて・・・初めて飲んだ・・・」

グルグルと回る視界の中に歪み始めたデイの姿が映つている。その顔は心配そうに歪められていた。

「レン、ベッドに横になるんだ。すぐに水を用意させるから。」

半ばデイに抱えられながら俺はベッドに連れて行かれ横たえられる。すぐにデイが部屋から出て行つてしまい一人部屋に残された俺は、ひたすら回る視界の中でデイを呼んだ。

「・・・デイ・・・デイ・・?」

ベッドの上に手を這わせデイを捜すがいない。水を取りに行つたと分かつていても、デイが居ないのが寂しくてしょうがなかつた。

「・・・デイ・・・」

うつ伏せになりシーツに顔を埋めると涙が出てきた。思考がまとまらない、ただデイは水を取りに行つただけなのに置いていかれた気分になつてしまい、後から後から涙が流れ落ちてシーツを濡らす。しばらくすると乱暴に扉が開けられる音がして、こっちにかけ寄つてくる足音がした。その頃になると俺はもうしゃっくりを上げて、声を上げて子供のようにわんわんと泣いてしまつっていた。

「レン!どうしたんだ!」

それを見たデイが素つ頓狂な声を上げて俺を抱き上げ顔を覗きこんでくる。

「・・・ディ、・・・る」、行つてたの？

「水を取りに行つてたんだ・・・、レン・・・飲めるか？」

グラスに水を注ぎ俺の口に当てて飲ませようとしてくるが、しゃつくりが邪魔をしてうまく飲めず水が頬を伝つて落ちていく。

「レン、とにかく飲んでくれ。薄めないと・・・」

「・・・のめない・・・」

「レン。口を空けて。」

「・・・・・れきない・・・」

水なんてどうでもいいから側に居て欲しい。俺はもう何も考えられないで、ディの邪魔をするように胸にしがみつく。すると脣にディの動きが止まつた。

「・・・・・ディ？」

顔をディの胸に押し付けようとするとこきなり顎を強く捕まれ上を向かせられ、薄く口を開かされたかと思いつとそのまま温かい何かが唇を覆つた。

流れ込んできたのは水だつた。口移しで水を飲ませられているのだと気づいたのは何度もそれを繰り返した後。

「・・・・・レン、大丈夫か？」

額にかかる髪を撫で上げながら優しくディが尋ねてきた。

「・・・・うん、・・・・・へーき・・・・」

「本当にすまなかつた。」

「も、だいじょうぶ。」

「そうは見えないが。」

苦笑いを浮かべ、もう一度ディが口付けをしてきた。

「今日はもう寝るんだ、疲れただろう？」

ベッドに俺を横たえると離れてここうとするディに俺はしがみついた。

「・・・・レン？」

「いっちゃん、やだ・・・」

「・・・・しかし・・・」

「・・・・・」

「やだ・・・」

一人になるのが嫌で、俺はデイにしがみついたまま駄々をこねる。涙が滲む視界でデイが困った顔をしているのが見えた。

「レン、やめるんだ。」「

俺の手を無理やり引き剥がすとデイは俺から一步遠ざかった。この時の俺にそれはかなりのショックで、俺はデイに伸ばした手を引つ込めてしまった。

「・・・・・レン?」

「・・・・・・・分かつた・・寝る・・」

涙声になるのを必死で押し殺しながら俺はデイに背を向けシーツを頭まで被る。

デイの馬鹿。デイの馬鹿。

頭の中で念仏のようにそればかりを唱えながら俺は溢れる涙を止められずにいた。押さえようとしても嗚咽が漏れて、きつと泣いているのはデイにバレバレだ。

「・・・・・レン。」「

声が近くで聞こえ、同時にベッドがギシリと音を立てた。シーツ越しに頭を撫でられる感触がする。

「どうしたんだ? 何でそんなに泣いてるんだ。」「

宥めるように何度も頭を撫でられながら、それでも俺はシーツの端を掴んで顔を出そうとはしなかった。すると急に強い力でシーツを剥ぎ取られ、デイが俺に圧し掛かってきた。

「レン、何で泣く。」「

背けようとした顔を、顎を掴まれてデイの方へと向かせられる。

泣き止まない俺にデイは困惑していた。

「レン、言つてくれないと分からない。」「

指で流れ落ちる涙を拭いながらデイは静かに聞いてくる。

「だつて・・・・・、デイが行っちゃうから・・・・」

「今日は色々あつて疲れただろう?」「

「でも・・・・俺はデイと一緒に居たいんだ。側に居たい・・・」

もう会えないかと思つていたのにまた会つことが出来て、なのに
すぐに離れないといけなかつた。それでもまたこうしてデイの側に
やつと居られるようになったのに。

今は少しでもデイの温もりを感じていたかった。それだけだつた。
「レン……だが、な……」
らしくなく、デイが口ごもる。
「お願い……今日だけでいいから……一緒にいて。」
頬を撫でるデイの手に自分のそれを重ね、頬を搾り寄せるとデイ
は固く目を閉じ何かに耐えているようだつた。

「……煽らないでくれ。」

「……デイ？」

「」のまま一緒に居たら、レンを抱いてしまつ。」

再び口を開いた時、デイの口の奥には炎が揺れていた。

「それでなくともかなり煽られているんだ。これ以上はもう、我慢
が出来ない。」

指先が唇をなぞつては離れていく。何度もそれを繰り返しながら
デイは自分の中の欲望を押さえ込もうとしていた。

俺を想つて、自分の気持ちを押さえつけようとするデイが愛しい。
そう、思つた。

「……一緒にいてよ、デイ。」

だから、そう言えばどうなるかなんて分かつていて。

デイは一瞬だけ辛そうに顔を歪めたけど、すぐに口の奥に熱を取
り戻すと俺に顔を寄せてくる。

「レン……」

どうされてもいい。どうなつてもいい。デイが側に居てくれるの
ならそれだけでいい。

俺はデイの首に腕を回し肩に顔を埋めた。頬に触れる温もりが気
持ち良かつた。

「」のまま……朝まで一緒に居て？」

デイの体の強張りが緩んだ。そして俺に体重をかけてくる。

「・・・まつたく。」

苦笑を帯びた声が耳朵をくすぐった。

「今日は手加減なんて出来ないぞ?」

抱きしめられ耳に送り込まれた言葉に、俺は小さく頷いた。

「いいよ。だつて俺、デイの奥さんになるんだろ?」

「オクサン?」

また意味が通じなくて、少し考えてから「・・・正妃つてこと。」と呟いた。

「なつてくれるのか?」

まるで閉じ込めるように俺の顔の両脇に肘を突き、俺を覗いてくるデイは嬉しそうに顔を緩める。

「してくれないの?」

「もうレン以外には考えられないな。」

言葉のやり取りがくすぐつたくて、俺が笑うとデイが額に口付けをしてきた。

「ね、デイ。」

デイの髪に手を入れて引き寄せるとされるがままにデイが近づいてくる。

「お願いがあるんだけど。」

「・・・ん?」

断言しよう。この時の俺は間違いなく酔っていた、雰囲気ではなく酒に。翌日、正気に戻つて思い出し顔から火を噴く羽田になるのだが、言ってしまった言葉はもう取り戻せず後の祭りだった。

「愛してるとか、好きとか・・・いっぱい言つて。」

それに似た言葉に心当たりがあつたのかデイは一度真顔になつてから、すぐに破顔した。

「もちろん、言われるまでもない。」

それ以上言葉を紡ぐことは出来なかつた。デイに深く口付けられたから。

第一章・第八話（前書き）

エッチです。読まなくとも次話に差し支えはありませんので苦手な方は飛ばしてやってください。

第一章・第八話

酒のせいですっかり火照っている体に、デイのひんやりとした手が這うのが気持ち良かつた。いつの間に服を脱ぎ捨てたのか、シーツを剥がれ、デイの体が折り重なってきた時。

その重さが愛おしく感じて俺は無意識に、デイの背に腕を回していった。

口付けの合間に、デイは何度も「愛してる」と囁いては俺を覗き込んでくる。頭がふわふわしているのはきっと酔いのせいだけじゃないと思つ。

「デイ・・・」

唇から顎に、そして滑り落ちながら喉に唇が触れる感触に俺は体を震わせた。力が抜けてシーツに落ちた手をきつく握り締められて、反射的に握り返すと肩に、デイの唇が触れた。

「・・んっ」

ぐすぐつたくて身を揺るとすぐ側で、デイの含み笑いが聞こえた。

「レンの体、すごく熱いな。」

俺の体が熱いのはお酒を飲んだからだ。それと、デイの体が冷たいからつていうのもあると思う。火照った体に、デイの体の冷たさが心地良くて、俺はうつとりと目を閉じた。

デイの手が俺の脇腹を滑り落ち、唯一身に着けていた下着に触れる。そのままするりと中に入り込み、熱を持ち始めていた俺の中心を握り締めてきた。

「んあ・・・」

ゆるゆると扱かれ一気に中心は硬度を持ち、俺は沸きあがる快感に声を上げてしまった。同時に胸の突起がぬるりとした感触に覆われる。

「・・う、ん・・・」

空いていた手で、デイの髪を掴むと、突起に軽く歯を立てられゾク

ツと背筋を何がが這い上がつた。

「や・・・、デイ・・・」

下着を取られすっかり裸になつた俺にデイが体重を預けてきて、密着した肌が湿り氣を帶びてくる。俺の熱が移つていくかのよう少しすつデイの体が熱くなつてきていた。

「・・・レン・・・」

俺の名を呼んだデイの声が情欲を抑えきれない色を含んでいて、思わずデイの髪を握り締めていた手に力が入る。

「あ・・・デ・・・イ・・・、やあつ！」

急に強く中心を握られ甲高い声を上げてしまつた。体が跳ね上がるたけでデイにそれを押さえつけられ、更に強く中心を扱かれ嬌声を上げてしまう。

自分でも分かる程に先走りが漏れている。俺の中心を擦り上げるデイの手の動きがどんどんスムーズになつて行つて、快感がどんどん強くなつてくる。

徐々に濡れた音が耳に届くよつになつてきて、あまりの羞恥に顔が一気に熱くなる。

「や、いやだ・・・」

恥ずかしさにデイの手を止めようとしても、空いた反対の手で捕らえられなす術がなくなつてしまつ。

「・・・・ひつ・・・あ、あつ！」

「レン・・・」

デイの熱に浮かされたような声が聞こえ、目の前が真っ白に染まつた。

呆気ないくらいに、声もなく俺はデイの手の中に白濁を吐き出してしまう。今まで感じたことがないくらいの快感だった。

「・・・・・んつ・・・」

荒い呼吸を繰り返しているとデイが口付けを落としてきた。素直にそれを受け入れると差し入れられた舌が自分のそれに絡んできた。卑猥な音を立てるのを聞きながら俺はまだチカチカしている頭のま

まほんやりとしていた。

声もなく足を押し広げられながら俺のもので濡れたデイの手が奥へと入り込んできたのはそんな時だった。

「・・・んうっ・・・」

深い口付けに言葉を奪われながら、次にされることを抑制しようと俺はデイの腕に自分の手を伸ばす。快感が強すぎて今何かされてしまつたら訳が分からなくなつてしまつ。でもそんな俺の抵抗など意に介した様子もなくデイの手が俺の最奥へと触れた。

敏感になつてゐる体がびくりと痙攣する。

口内を舌で犯されながら、デイの手がゆっくりと孔に入つてくるのを体中で感じた。体内に異物が侵入してくる感覺に肌が粟立つて、広げられた足ががくがくと震えた。

「ん、・・・・・んあ・・・・・はつ・・・・・デイッ・・・

「レン・・・・痛くないか？」

「・・・・・いた、くは・・・ないけど・・・・・」

前にした時はこんなリアルに自分のされていふことを感じたりはしなかつた。だけど今は違つた。体内に入つてゐるデイの指の形まで分かつてしまつくらいなのだ。

「・・・・けど？」

何度も俺に口付けながら合間にデイが言つた。薄つすらと閉じていた目を開くとデイと田^由が合つた。欲情しきつたその田に射すべくめられながら俺は投げ出していた手でシーツを握り締める。

「・・・・なんか、変な感じが、する。」

異物感と圧迫感。それを感じるのは当たり前だ、あるべきではない物が体の内にあるのだから。でもそれ以外の何かも感じていた。腹の奥が、重たい感じ。

俺の言葉を聞いてデイが笑みを浮かべた。そしてまた口付けてくると不意に差し入れていた指をうごめかせ始めた。内壁をなぞられ、出し入れされると堪らず俺は嬌声を上げてしまう。何度も出し入れを繰り返されながら次第に大きくなつていく圧迫感に俺はもうなす

術がなく、翻弄されるだけだった。

「やつ・・・・、デイ、やあつ！」

あまりの快感に涙がこめかみを伝つて落ちていく。それを舌で舐め取りながら、デイはそれでも動きを止めなかつた。

「あつ・・・・、デ・・イ・・・もう・・・・、うあつ！」

奥の一点を指で擦られた瞬間強烈な快感に襲われ、何が起つたのか理解する前に俺はまた、熱を吐き出してしまつていた。

「・・・・・・な・・・・に・・・・？」

一度達し、体中の痙攣が止まらない中俺はつわ言のように囁いた。でも、デイは何も言わないまま俺の体内から指を引き抜くと俺の両足を自分の肩にかけ、無言のまま一気に押し入つてきた。

「あああつ！」

熱い自分の体よりも更に熱く、硬いものが奥を貫いた。衝撃に悲鳴が喉から迸つたけれど、デイは動きを止めず激しい抜き差しを始めた。中を擦られ押し広げられる。奥まで抉られて頭の中は真っ白になつてしまつた。

肉を打ち付ける音と、俺の声が部屋に響いていたけれどもうそんなのも分からなくなつてしまつくらいに俺は翻弄されてしまう。

「あつ・・・・・うあつ・・・・・や、まつ・・・・・デイ・・・まつて・・・・・」

「レン・・・」

激しい嵐に巻き込まれてしまったようだつた。それ程にデイは容赦がなかつた。飢えを満たすかのように、俺を食いつぶしていくつりんじやないかつて思うくらゐに。

「・・・・・デ・・・・・まつて・・・・・ひつ・・・・・」

「待てない。」

「・・・・・んむつ、・・・・・んう・・・・・」

腰を打ちつけながら、デイは俺の足を抱え直すと身をかがめ噛み付くように口付けてくる。深く貪られて、舌を絡められ、俺は苦しげにデイの首に腕を回して縋り付いた。

体中、触れ合ってない場所がないくらいに俺たちは一つに重なつて交わった。デイとの体の間に挟まれた俺自身も動きに呑わせ擦られていて、俺はまた達し自分の腹を白濁で汚してしまつ。そんなことすらも分からなくなつてしまつくらい、デイは激しく俺を求めていた。

「レン・・・レン、愛してる・・・」

顔にぽたりと涙が落ちてきて、俺は揺ゆぶられながらそれでも何か目を開けると泣き出しそうな顔をしたデイがそこにいた。額に滲んだ汗が幾筋もこめかみを流れ、俺の上にぽたぽたと落ちる。まるで涙みたいだ。

「・・・・・デ・・・・イ・・・・俺も・・・・・あいして、る・・・・・

愛しさが込み上げて、勝手に涙が溢れてしまつ。

どうしてこんなにデイを好きなのか分からない。もう出合つ前になんてもう戻れない、デイの存在がないと嫌だ。

こんなにも自分が誰かを求める日が来るなんて思つてもみなかつた。

「・・・・レンッ・・・

「・・・・うつ・・・あつ！」

汗ばむデイの背中に手を回すと同時に奥を抉られそこに爪を立ててしまつ。

「あああっ・・・・デ・・・・イ・・・・・

短い悲鳴をあげ、俺はもう何度もになるのか分からない絶頂を放つた。デイも限界が近いのか激しい抽送が更に速くなつてくる。そして短く息を詰めたかと思うと最奥まで腰を打ち付けると動きを止めた。

熱いものが体の奥を満たしていく。デイの迸りを体の一一番奥に受け、俺は喘ぎながら体を弛緩させた。

互いの荒い呼吸が耳元に聞こえ、デイの重みが増した。

「・・・・レン・・・・」

少し掠れたデイの声が俺を呼ぶ。体力を限界まで使つてしまつた

俺は眠りに転げ落ちそうになりながら、それでもその呼びかけに何か目を開けるとすぐ側にまで、デイの顔がせまっていた。そのまま口付けられ、啄ばむよつて何度も、デイの唇が俺のそれに触れる。

「レン、愛してる。」

瞼に唇を触れさせながら、デイが繰り返してくれる。

一度目の時にはなかつた言葉。あの時もデイと体を繋げて、嬉しかつたけど悲しかつた。だけど今は違つた。こんなにも全てが満たされている。

「・・・れも・・・・、愛してる・・・よ・・・」

笑みを浮かべると、デイは愛おしそうに目を細め俺を抱きしめてくる。俺も抱きしめ返そうとしたけれど、もの凄い眠気に襲われてしまいそうする前に意識を手放してしまつた。

深い深い眠りに落ちていく闇の中で、脳裏に世界樹が浮かび上がる。

何かを語りかけてくるような声が聞こえた気がしたけど、その前に俺の意識はふつりと途切れ聞き取れないます。

第一章・第九話

目を覚ますと心地良いシーツに包まれ俺はベッドに寝ていた。部屋は明るい光に満ちていて、眩しくて目を細める。

「・・・おはよう、レン。」

髪を撫でる大きな手の感触がして、顔を上げるとデイが優しい眼差しで横にいた。

「おはよ・・・」

擦れ切った声が喉から飛び出る。喉がカラカラに渴いてた。

「水を飲んだ方がいいな。」

デイは体を起こすとサイドテーブルに載せてあつた水差しからグラスに水を注ぐと俺の体を起こし、手渡してくる。口をつけると冷たい水が喉を通り過ぎて美味しかった。

「体は大丈夫か?」

空になつたグラスを受け取るとデイはまた俺の髪を撫でてくる。恥ずかしくて、顔を真っ赤に染めながら俺は小さく頷いた。汚れていただろう体はすっかり綺麗にされていて、それがまた恥ずかしかった。

「今日はゆっくりするといい。」

デイはそう言うとベッドから足を下ろし俺に背を向けた。広い背中には幾つもの古い傷跡が散つていてそのどれもが痛々しかった。その中に新しい傷が走っている。

爪で引っ掻いた痕は間違いなく昨日俺がつけたものだ。デイの体に俺のつけた傷がある。

手を伸ばしその傷跡にそつと触れた。デイが一瞬体を固くし、すぐ振り返る。

「あ、ごめん。痛かった?」

「いや、大丈夫だ。どうかしたのか?」

「・・・爪痕、つけちゃった・・・」

傷に触れないようにその横を指でなぞるとデイがくすぐったそうに身を捩つた。まだ少し血が滲んでいて痛そうだ。

「痛くない？」

「痛くないから大丈夫だ。それにレンがつけた傷ならむしろ嬉しい。」

恥ずかしいセリフを恥ずかしげもなくデイが言って、俺はまた更に顔を赤く染めてしまった。デイは触れている俺の手をそつと握り締めて引き寄せると俺に口付けってきた。

触れるだけの優しいキスだった。

そして「寝ているんだぞ。」と言い残すと側に落ちていた服を身に纏い部屋から出て行ってしまった。ずっと一緒に居たかったけどそういう訳にもいかないのは承知していたから俺は引き止めずデイを見送った。

タランフィリアとの戦いに備え、色々と準備をしなくてはならない。

人の命を奪うかもしれない争いに身を投じたことなんてない俺には何をどうすればいいのがも分からぬけれど、デイを信じて今は待つしかなかつた。

寝ていろと言われたけど、妙に落ち着かなくてベッドから降りようとしても足に全く力が入らなくてまともに立つことも出来なくて。昨日の行為のせいだと分かつていたから俺はベッドに横たわり、一人顔を真っ赤に染めてしまっていた。思い返すと恥ずかしくて消えてしまいたくなる。

あんなこと、デイに言つて引き止めてしまうなんて。

両手で顔を覆つて、俺は一人ベッドの上で転げまわってしまう羽目になってしまった。

「・・・・・」

ふと、元の世界のことを思い出した。ここへ来てしばらく経つけどあっちの時間は過ぎていらないだろうか。前、来た時は大丈夫だつたけど。

以前大丈夫だったのなら、今回も大丈夫だと思つ。もしさうじやなかつたら大騒ぎになつてしまつてゐよなー、なんて俺はのん気に思つた。

そのままベッドで「ぐるぐるしながら何度か転寝を繰り返していた俺は、午後にもなるとよつやく立ち上がることが出来るよつになつていた。

ベランダに出て広がる景色を見ながら、自分だけこんなにのんびりしていいのかとも思つたけど、今日一日くらにはデイの言葉を守つて大人しくしていよう。

眼下に広がるカーミアの町並みの通りにたくさん的人が居て慌しく動き回っているのを申し訳なく感じながら、俺はいつまでもその光景を見下ろしていた。

翌日になつてもタランフィリアからの宣戦布告は出されなかつた。デイも首を傾げていたけれど、いつ仕掛けられるかは分からぬで氣を緩めようとはしなかつた。

俺はと言えば特にすることもなく、と「うか」デイにさせてもらえないのだけど、部屋にこもるのも昨日で飽きてしまつたので城内の散策に勤しんでいた。

いつもはもつと人気が少ないけど、いつ戦争を仕掛けられるか分からぬ今はどこに居ても緊張した面持ちの兵士達ばかりだつた。そして一階の玄関ホールに足を踏み入れた時、それは起こつた。

「お前がデイ様をたらしこんだ奴か。」

歩いてこるとこきなり背後からそんな言葉を投げつけられた。振り返るとそこには三人の兵士が立つてゐる。見覚えはなかつた。

「お前がいなけりや、こんな無駄な戦争を吹つかけられずに済んだつてのになあ。」

怒りと嫌悪をあらわにした言葉に、俺は少なからずショックを覚えた。言葉が出てこない。分かつていてことだけ、当事者から改めて言葉にして言われると辛かった。

「・・・・すみません・・・」

「すみませんじゃあすまないんだよ、こいつは命を懸けるんだ。自分は安全な所で高みの見物を決め込んでいるんだろう。ほつきり言つてムカつくんだよ。」

「・・・俺は・・・」

高みの見物なんてしない、俺だつて戦おうと思つてこむ。そういうおうとしても中々それは言葉にはならなかつた。

中央にいる兵士が舌打ちをして、俺の胸倉を掴み上げる。

「今からでもいいからお前消えろよ。」

「・・・・・」

「ディ様の為に戦つのは構わない、だがお前がこじるといつちの士氣が下がるんだよ。」

胸倉を掴まれ締め上げられながら俺は兵士から目を逸らさなかつた。浴びせられた言葉にショックは覚えていても、逃げるわけにはいかなかつた。言われている言葉のほとんど全てが事実なのだから。「俺の責でこんなことになつて申し訳ないと、思つてます。でも・・・

「分かつてるんじゃねーか。」

「でも俺は高みの見物なんかしない。俺が招いたことなんだから、俺も戦います。」

「戦う? このひょろつちに腕でか?」

俺の言葉に兵士達は声を上げて笑い出した。そしてひとしきり笑い終えると、鋭い目つきで俺を睨みつけてくる。

「ろくに戦つたこともないだろ? んなこと言われても足手まといでしかないんだよ。」

周りがざわざわとし出していた。何事かと、俺達を遠巻きに場内の人々が集まり出している。俺はそれでも兵士から視線を逸らさず

真っ直ぐに見つめた。

「何をしていいー。」

突然鋭い声が兵士達の後方から聞こえた。現れたのはナジエイルだつた。険しい顔をして俺達に近づいてくる。俺の胸倉を掴んでいた兵士がその手を放し、俺は少しよろめいてしまった。

「その方に無礼な真似をすることは私が許さん。」

「ナジエイル様・・しかし・・」

「言い訳は聞かぬ。」

深く青い目が怒りに燃えていた。まさかナジエイルに助けられるなんて思つてもみなかつた俺は呆然と立ち去ってしまった。

「・・・申し訳ありませんでした。」

兵士達がナジエイルに頭を下げその横を通りその場から立ち去る
と、ナジエイルは表情を和らげ俺に近づいてきた。

「レン殿、申し訳ありませんでした。」

「・・・・あ、いえ・・」

「宣戦布告が出されない状況で兵士達も苛立つてゐる様子。お許し下さい。」

深々と頭を下げる俺は慌てて両手を振つた。

「やめて下さい。あの人は言つてゐることは間違つていなかから。」

「・・・レン殿。」

「俺の責でみんな、戦わなくともいい戦いに巻き込まれるんです。
こんな風に思われているとは思つてましたから。」

面と向かつて言葉にして浴びせられたのはさすがにショックだつたけど、俺ですらそう思つてゐるんだ。俺が居なければこの争いは起こらなかつた。

「あの人達を怒らないであげて下さい。」

「……レン殿・・」

「ディにも言わないで。」

きつと悲しむから。

俺の責でディが悪く言われるのだけは嫌だった。

「・・・分かりました。」

ナジエイルが悲しそうに顔を歪める。そんな顔をさせてしまったことが俺の胸を締め付ける。消えてなくなってしまいしたかった。

「でも、ナジエイルに助けられるとは思ってなかつた。」

誤魔化すように、気持ちを悟られないようにわざと笑みを浮かべそう言うとナジエイルは眉根を寄せ、手を伏せた。

「あなたは王が正妃として迎えられるお方です。お守りするのは当然のこと。」

再び顔を上げた時、ナジエイルの手は驚くほど劳わりに満ちていた。
「私も全力でお守りいたします。」
「・・・・ありがとう・・・」
全てが俺の責だと知つていて向けられる言葉に涙が出来しそになつた。

俺が全ての引き金になつてこの事態を招いてしまつた。言葉で自分も戦うと言つても、何をどうすればいいかも分からぬ俺に兵士達があんな風に思つことも知つていた。快く思われないだらうことも知つっていた。けど、やっぱりあんな風に言わると胸が痛む。言われた言葉が棘になつて、刺さつた心にじくじくと痛みを広げていく。

「・・・・ちょっと、外に出てきてもいいかな?」「外に、ですか。」

「ずっと籠つてたから、外の空気を吸いたいんだ。」

ナジエイルは少し考えてから「分かりました」と言つた。

「ですが、あなたは今誰よりも危険な立場であることをお忘れなく。」

「・・・うん。」

「あまり遠出はなさらないでトドセ。」

「分かった。」

頷いて見せて、俺は踵を返し歩き出した。そんな俺の背中を悲しそうな顔でナジエイルが見つめていたことに最後まで気づかなかつた。

外に出ると俺は真っ直ぐに怪鳥が居る小屋に向かつ。ここから離れて一人になりたかったから。

辿り着くとそこには世話人の男が居て、俺を見て口をへの時にする。

「またお出かけですか。」

「へへ。いつもごめん、ちょっと一羽借りてもいいかな?」

「許可が出でいるのでしたらどうだ。」

男はすっかり心得たように小屋に入るとその中の一羽に乗れる準備を施す。そして今度は外にまで連れて出てくれた。

「こいつは一体どこの奴ですか。気性が荒くて世話をするのが大変なんですが。」

そう言われて思い出した。ライカの所から一羽借りっぱなしだったんだ。連れてこられた怪鳥を見るとこいつはライカの所から乗つてきた奴だった。

「出来れば飼い主に返してやつて下さい。」

「うん、出来たらそうするよ。」

手綱を男から預かり俺は怪鳥の背によじ登つた。首を撫でると怪鳥が高く、一度鳴き声を発した。

「行こうか。」

しつかりと手綱を手に巻きつけ合図を出すと怪鳥は数度羽ばたき、一気に上空へと舞い上がる。どんどんと地上が遠ざかっていくのを目にながらどこへ行こうか、なんて考えた。行き先なんて決めていなかった、ただ少しの間だけ城から離れたかった。

それだけ。

「あ、ディに何も言わないで来ちゃつたな。」

どこかへ行く時は一緒に行くと言つてくれていたのに、しつかりしてた。帰つたら怒られるかもしれないなあと思いながらも、俺は

戻ろうとはしなかった。

ほんのちょっと出かけるだけなんだから大丈夫だ。ナジヨイルには言つてあるし。

心の中でそんな言い訳をして、俺は無意識に世界樹のある方向へと向かう。

眼下の景色から町並みがなくなり、荒野が広がるようになると小さな集落がぽつぽつと点在し始める。そのどこもが慌しげに武器や防具を倉庫らしい場所から出していった。ここも、戦争に巻き込まれてしまうのか。

カーミアの領土内なのだから仕方がないのかもしれないけど、こんな離れた場所の人たちまで巻き込んでしまう事実に俺は唇を噛み締めた。

守ると言つた言葉に偽りはない。デイの守りたいものを俺は守りたかった。でもそれをいざ田の当たりにするどデイの背負っているものあまりの大きさに怯んでしまう自分が居た。

こんな気持ちになつていて自分がたまらなく嫌だった。

今は少しでも離れたくて俺は高度を上げた。小さな集落は更に小さくなり、あつという間に視界から消えうせてしまう。そして荒野を過ぎると広大な森が広がっていた。果てしなく続く森は深く、大きかった。

そう言えば初めてデイに会つたのもこの森だ。ライカに召喚されて、逃げ出した先でジャモンと出会つて、そしてデイに出会つた。まさかあの時はここまでデイと深く関わることになるなんて思つてもいなかつた。あの、小さな泉で出会つた時は良い感情なんてこれっぽっちも覚えていなかつたのに。

その時を思い出して俺はつい笑つてしまつた。

そうだ、あの泉に行つてみよう。この近くのはずだから。

あの静かな場所で心を落ち着けたい。そう思い、俺は泉を探した。広い森の中からあの小さな泉を探すのは至難だつた。場所もあまりよく覚えていなかつた俺はそれからしばらくの間ずっと森の上を

飛び続けそしてどれくらい時間が経ったのか。

「あ！」

見つけた。真上を通りてやつと分かるくらいの小さな泉をやつと見つけた。

「こんなに小さかったんだ。」

俺は旋回しながらその泉の上まで戻るとゆっくらと高度を下げ、何とか無事に泉の側に着陸すると俺は怪鳥から飛び降りた。小走りに泉に近づき水の中に手を突っ込むとひんやりとした冷たい感触に覆われる。

「気持ちいい。」

ばしゃばしゃと水面を波立たせ、顔を突っ込む。目を開くと底が見えるくらい透明度が高かつた。

「ふはー。」

顔を上げ、濡れた前髪をかき上げる。もうちょっと暑かったら泳げたのに少し残念に思いながら俺はズボンの裾をまくり上げ、両足を泉につけた。そのままばたりと地面に倒れこむと遠くに空が見えた。高い木の向こうに見える空はぽっかりと丸く小さくて、まるで俺自身のような気がしてしまつ。

手を上に持ち上げ掴もうとしても遠くて何も掴めやしない。当然だけど。

この手に何も掴めない。何かを掴んでいたとしてもそれが正しいものなのか分からぬ。

「・・・・デイ・・」

一体俺に何が出来るんだらう、戦うと言つたけれどこの世界の戦い方なんて何一つ知らない。知つたとしてもそれが出来るのかどうかも分からなかつた。

宙に持ち上げていた手をぱたりと地面に落とし、俺はぼんやりと空を見上げた。聞こえてくるのは鳥のさえずりの声と、風に揺られ木々が葉を鳴らす音だけ。自分の存在がちっぽけに思えてしまつけど、でも、不思議と心は落ち着きを取り戻し始めていた。

このまま眠つてしまいそうなくらいに心地良くて俺は目を閉じた。ふわりと優しい風が頬を撫で、自分も自然の中に溶け込んでしまつたような気分になる。

気持ちが良い。

ここへ来て良かったのかもしれない。何だか気持ちが楽になつた。俺は目を開いた。やっぱり見上げた空は遠かつたけれど、でもさつきみたいな気持ちにはならなかつた。

その時、パキッと小枝を踏みしめる音が聞こえ俺は体を起こした。辺りには誰の姿もない。

「・・・気のせい?」

泉から足を引き抜き立ち上がり何度見回してみるけれど誰の姿も見当たらない。気のせいにしてはいやにはつきりと音が聞こえたんだけど。

俺がキヨロキヨロしていたその時、急に風の動きが変わった。

穏やかだった風が急に吹き荒れ始めたのだ。まるで何かを教えようとするかのように俺に向かつてその風は吹いていた。少しづつ嫌な感じが胸に込み上げ、俺は一步後ずさつた。

帰つた方がいい。それは直感だつた。

風が吹き荒れるのと同時に空気が重く淀み始めている。ここに居たら駄目だと本能が告げていた。こめかみを汗が流れ落ちていき、俺はそれを拭つた。そして足を引きずるように少しずつ怪鳥に向かつて歩き出す。

その向こうに、人影が見えた。木の幹に隠れていてよく見えないけれど、確かに人がそこに立つていた。

「・・・誰か、居るのか?」

声をかけるとそれを待つっていたように一人の女が姿を現した。ゆるいウエーブのかかった金髪を揺らめかせながら俺に近づいて来る。

「こんにちは。」

鈴を転がしたような高い声。けれど綺麗な声のはずなのに俺にはまるでそれが毒を吐き出したもののように聞こえてしまつ。

「こんな時に一人で出歩くなんて、無用心よ。」

ぐすぐすと笑いながらその女は一步、また一步と俺に近づいてきた。怪鳥が警戒心をあらわに鋭く鳴き声を上げるが、女は気にも留めず俺に向かつて歩き続ける。

「初めまして、ね。いきなり『めんなさい、私はエルミナ。』

ついには俺の目の前に立ち、女は自らをそう名乗った。なびく髪をかき上げると表情があらわになる。女は恐ろしく綺麗な顔をしていた、寒氣がする程に。

「・・・・誰？」

俺の心臓が警鐘を鳴らすように高鳴り始める。この女の側に居たら駄目だ、そう思つて逃げようとしても足が言つことをきかない。女のエメラルドグリーンの目に見つめられ、俺の体は石になってしまったかのように体中の動きをなくしてしまつ。

「名乗つたじゃない、私はエルミナ。」

華奢な腕を伸ばし俺の手を取るとこいつと微笑み、言った。

「タランフィリアの王女、エルミナ・テュバンよ。」

「・・・・タラン・・、フィリアの・・」

「そうよ。初めまして、レン。」

「・・・・！」

俺の存在がタランフィリアに知られているのは当然だ、あの時デイが言ったから。でも、名前まで知つてないなんてどうして。

「・・・俺に、何か用ですか。」

カラカラの喉でやつとの思いで声を発するとエルミナは握っていた俺の手をスルリと放した。

「用があるからわざわざ出向いて来たのよ？」

「・・・だから、何の用ですか。」

体の奥から湧き上がる震えを必死に押さえようとした。風が吹けば手折れてしまいそうな華奢な目の前の女、エルミナに信じられない

いくらいの恐怖を俺は覚えていた。

「私ね、断られるとは思つてもいなかつたのよ。もの凄い屈辱だわ。

「何がなんて聞くまでもない。『テイが拒絕した婚姻の話だ。

「それは……」

「おまけに断られた理由が、あなたでしょ？・まさか男の子だとは思わなかつたけどレンは可愛いからカーニニアの王もその氣になつてしまつたのね。」

細い指が俺の髪を撫で上げる。その間も俺は身動き一つ取ることが出来なかつた。どう見ても恐怖を覚える片鱗なんてその姿からは取れないのに、エルミナの存在は禍々しい。

「本当に可愛い。あなたじやなかつたら、きつとこの場で殺していたわ。」

髪を撫でていた手が頬まで下りてきて、震え続ける俺の頬に触れた。

「だけどね、受けた屈辱の分は返さないと氣が済まないと。」

「そんなの、あんたの都合だろ！』

「・・・そうかしら？」

触れられている頬から毒が伝わつてくるかのよう、氣分が悪くなつてくる。目も霞んで呼吸が荒くなり始めた。

「でもね、そう思うのはあなた達の都合なよ。」

ギリツと頬に爪を立てられ痛みに顔をしかめるとエルミナは嬉しそうに微笑んだ。こんな人間が居るなんて考えたこともなかつた。存在そのものが禍々しい。

俺の異変に気づいたのか怪鳥が鋭く鳴き、威嚇するように毛を逆立てていた。何度も威嚇の声を上げ続ける怪鳥に、ふとエルミナが笑みを顔から消した。

「つるさいわね。」

感情も何もないその顔に、俺は足の震えが更に大きくなつてしま

う。

怖い、この女が。

エルミナは顔だけで振り返ると手を怪鳥に向かってかざした。目に見えない何かがその手の平に集まつていいくを感じ、俺は嫌な予感に囚われた。

動けたのは奇跡に近かったと思う。

俺はエルミナに向かつて飛び掛り地面と共に倒れこむとエルミナの手を怪鳥とはあさつての方向へ向けた。一瞬の間を空けて手が向けられた方向にあつた木が蒸発するように消えてしまつ。

「逃げろ！」

何が起こつたかなんて分からぬ、だけどこの場に居たら危険なのは容易に想像がつく。無意識に俺は怪鳥に向かつて叫んでいた。ここに居たらあいつは間違なく殺されてしまう。

「早く！逃げろ！」

エルミナを押さえつけながら何度も叫ぶと、怪鳥は躊躇いながらも一気に空へと舞い上がつていった。その姿が視界から消えるのを確認すると、俺はエルミナに視線を戻した。

「邪魔しないでくれる？」

エルミナの手が俺の胸に軽く触れほんの僅かだけ押された、それくらいのこと。

「・・・・ッ！」

たつたそれだけのことと、俺は弾き飛ばされ泉の向こう側の木に背中から叩きつけられてしまつていた。体の中で骨の折れる音が聞こえ、激痛が体に走る。

「・・・・つぐ・・・・う・・・」

地面に叩きつけられ蹲つていると近づいてくる足音が聞こえてきて、顔だけを上げると田前にエルミナがせまつっていた。逃げなきや殺されてしまつ、分かつていてももう体の自由がきかなかつた。肋骨が折れているのかもしれない。

「馬鹿ねえ。あんな鳥一匹を守るために自分を危険にさらすなんて。

「・・・・・」

エルミナは膝をつくと俺の髪を掴み強引に顔を起こす。微笑んでいることで返つて恐怖を煽られる。

「でもまだあなたは殺さないわ。」

立ち上がったエルミナに強引に引き起こされるように俺は上半身を起こさせられる。掴まれている髪が引っ張られまた別の痛みに襲われるが、それ以上に肋骨の痛みが酷かつた。息すらままならない苦しみなんて初めて味わつた。短く浅い呼吸で痛みが最小限になるようにしていてもこれだけの痛みがあるなんて、相当酷く折れているか折れているのが一本では済んでいないのか。

「可愛いレン、あなたは逃げたら駄目よ？」

投げ出している俺の足の、丁度右膝の辺りにエルミナが自身の足を軽く乗せた。

「・・・・・、・・な、にを・・」

「立てなかつたら、逃げられないわよね。」

言葉の意味を脳が理解する前に、体内から碎ける音がした。

「うああああああっ！」

灼熱の炎に焼かれているような、そんな痛みが膝を襲つた。掴まれていた髪を放されまた地面上に叩きつけられるように伏し、その衝撃で肋骨の痛みが増すが、もう声すら出なかつた。

「レン。」

全身を激痛に苛まれ、俺は地面に転がり呻くことしか出来なかつた。脂汗が額を流れ落ち、息もまともに出来ない。

「・・・・・う、・・・・・」

何かを考えようにも思考がまとまらない。あるのは痛みだけだった。

「明日まで生きなさい。そうしたら、『褒美をあげるわ。』

頭上からエルミナの声が聞こえて、俺は必死の思いで目をそちら

へと向けた。にこやかに微笑むエルミナの姿と、その向こうにある
深い縁と遠くの空が視界に入つて。

そこで俺の意識はプツリと途切れた。

第一章・第十一話

体中が痛い。最初に感じたのはそれだけ。水面に引き上げられるよしに、急浮上する意識の中で暗闇の中に銀色が見えた気がした。

「・・・・・イ・・」

泣きながら俺は目を覚ました。

体の痛みは引くどころか一層酷くなっていた。骨折のせいで発熱したのか全身が熱かった。

「お目覚めね、レン。よく生きていたわ。」

「ゴツゴツとヒールの足音が聞こえ、近づいてくるのが分かつた。

「・・・エル・・ミ、ナ・・」

「泣いてる顔も可愛いわ。夢でも見ていたのかしら?」

俺の頬に伝う涙をエルミナの指が拭つた。触れる手が冷たくて、気持ちがいい。

「じゃあ、ご褒美をあげるわね。」

額に手をかけられ顔を起こされると田の前には巨大な鏡があつた。そこには俺とエルミナの姿が映し出されていて、俺は初めて自分の取らされている体勢を知つた。

天井から降りている鎖に腕をつながれ頭上で一括りにされ、膝がつくギリギリの所で吊るされるような格好を取らされている。肋骨を骨折している体でこんな体勢を取らされいたら痛みが酷くなるのは当然だった。

エルミナが鏡に向かつて手をかざすと映つていたものが消え、鏡が一瞬ぼやけた。そうかと思えば次には何かの姿を映し出していた。見慣れた、人の姿だった。

「・・・・・デ・・・イ・・」

霞み始めた視界の中に、映つたのはティの姿だった。自然と涙が零れ落ちた。

「カーミアの王、『きげんよう。』

エルミナが何でもないかのよつてそつ鏡に向かつて話しかけると、

鏡の中のデイの表情が険しくなつた。

「ううむつむつだ、タランフィリアの。」

怒りを抑え切れていないデイの声が俺の耳にも届いた。

可愛い小鳥を見つけたの。あんまり可愛いから捕まえちゃった。

11

エルミナ

エルミナが振り返り、俺の方へと近づいてくる。そして胸に手を置くと強く押してきた。

「ああああ！」

圧迫されて走った激痛に俺は悲鳴を堪えきれず、痛みに反射的に体に力を込める。肺の辺りでチリツとした痛みが走った。全身がぐがくと痙攣をし始め繋がれている鎖が金属音を立てた。

古文書一冊

鏡越しに聞こえてくる

鏡越しに聞こえてくるデイの声に明らかな怒氣が含まれた。俺は襲い来る激痛を堪え鏡の中のデイを見た。デイは怒りに体を震わせながらも俺から田を離そうとしない。

「デイにそんな顔をさせているのは俺だ。何て馬鹿なんだ、また同じことを繰り返してデイに心配をかけて。

「・・・デイ・・・・・じめ・・・・・なせ・・・・」

守りたいなんて言つておきながら自分がこんな目に遭つてしまつてゐる。謝つても謝りきれない。俺は止められなかつた涙を零しながら鏡の中のデイに謝り続けた。

一
レ
ン、
語
す
な
」

元々は「めんざし」の意味で、この言葉が「めんざし」と「めんざす」の二重構造で、その意味を複数の言葉で表現する形で、それが「めんざめんざ」となった。

卷之三

- 1 -

言葉は途中で途切れ、急に吐き気を覚え俺は堪えられず逆流して

きた物を吐いてしまった。口の中に鉄の味が広がり、足元を見るとそこは真っ赤に染まっていた。

「レン！」

「あらあ、ちよつと弱つてきちゃつたみたいね。」

エルミナのそんな言葉も、俺にはもう何の意味もなかつた。視界が狭まつて意識を保つているのが限界になつてくる。

「もうこの子はいいわ、あなたにあげる。」

「…………何だと？」

「元気がない子を飼つてもつまらないでしよう？」

涙と血でぐしゃぐしゃになつた俺を一瞥すると、エルミナは鏡に近づいた。

「私の城の前に出しておくから、いるなら取りにいらつしやい。」

エルミナが歌うようにそう言つた瞬間、巨大な鏡にひびが入り砕け散つた。向こう側からティイが破壊したのだ。

「短気な人ね。」

それでもくすくすと笑いながらエルミナはまた俺に近づいてきた。「これであなたの役目はお仕舞いよ。生きて、ご主人様と会えるといいわね。」

「…………」

何かを言いたくてももう言葉が出ない。体を襲う痛みは激しさを増し、炎を纏つたかのように体が熱い。意識が薄れていく中で、それだけを感じながら俺は再び転がり落ちるように意識を失つた。

意識は波間に漂つようふわふわと揺れていった。夢から覚める瞬間に似たような感覚。

「肋骨が何本か折れて、肺に刺さっています。吐血の原因はこれがと……」

搾り出したような苦しげな声音には聞き覚えがあつた。少しづつ意識が覚醒していく。これは、ナジエイルの声だ。どうしてそんな

辛そうな声で話すんだろう。そんなことを思いながらも俺は現実と夢の間を行き来していた。

「それと・・・・・、右膝を粉碎されています。」

誰に話しかけているんだろう。俺に、怪我の具合を教えようとしてくれているのか。それなら応えてあげたいけど、重くて口を開くことが出来ない。

「・・・申し訳、ありません。私がお一人で行かせなければ、この様なことには・・・」

「もういい。悔いても何も変わらん。」

ああ、デイの声だ。デイがここに居る。俺の側にデイが。「ごめんなさい、デイ。勝手なことをしてごめんなさい。自分の馬鹿さ加減には本当に嫌になる、お願ひだからもう俺のことは放つておいて。これ以上デイの迷惑にはなりたくないんだ。

「一刻も早く戻つてレンの治療を。」

頬に暖かいものが触れた。きっとデイの手だ。俺は何とか口を開こうとするけど、重たくてピクリとも動かせなかつた。

「いけません、この状態のレン殿を動かすのは危険です。」

「このままここで指を咥えて見ていろとでも言つつもりか、このままだとレンは死ぬ。」

「・・・分かつて、おります・・・ですが・・・」

デイ、もういいから。勝手ばかりしてこんな口に遭う俺なんでもう放つておいて。

そう言いたくとも、想いは言葉にならなかつた。もどかしくて、悔しくて。それでもデイに伝えたかった想いが涙になつて溢れ出る。「レン?意識があるのか?」

俺の涙に気がついたデイが目尻から溢れる涙を拭い、切羽詰った声でそう呼びかけてくる。けれどビリしても口が開かない。何かを話したくても言葉にならない。

「レン、レンッ・・・」

「王一搖さぶつてはなりません。」

一人の声がどんどん遠くなつていいく。深い場所に意識を引っ張られていく。

風が吹き肌を撫でられ優しい風が俺を守りつとしてくれているのが分かつた。風に抱き締められてどんどん五感が鋭敏になり、俺は自身が風になつたかのような錯覚を覚えた。

風に。空氣に触れているもの全てが分かる。それは不思議な感覚だった。

遠くからもの凄い勢いで何かがこっちへ向かって来ている。見知った空氣を纏つていてるその近づいてくる気配には覚えがあった。やがて、音としても聞こえ始め近づいてきたそれにデイとナジエイルも気がついたのか、一人の会話が途切れた。

大きな鳥の羽ばたく羽音が響き、突風が俺たちに吹き付けてくる。それらの全てが止んだ時、聞きなれた低い声が聞こえた。

「これは一体どういう事だ。」

その人物が何かから飛び降り、そして近づいてくる足音が聞こえる。

「何でレンがそんなズタぼろにされてんだよ。」

「貴様には関係ない。」

「関係ないだあ？どの口がほざいてやがる。・・・つたぐ、あいつが単身戻つて来たから何か気になつて来てみりや何なんだこれは。」どうしてライカがここに来たのか不思議だったけど、そうか。逃がしたあの怪鳥がライカの元に戻つたんだ。

「で、お前らは一体何をしてるんだ。死にかけのレンを囮んで指咥えて見てるだけか。」

「・・・黙れ。」

デイが怒りに燃えていた。こんな声、聞いたことがない。

「お一人とも、言い争つている場合ではありません。ライカ殿、我々もただ指を咥えて見ているのではありません。この状態のレン殿

は、動かせないです。肺に肋骨が刺さつていて少しでも動かせば更に危険な状態になります。」

二人を制したのはナジエイルだった。何とか平静を勧めようとしているのが抑揚のない声が感じ取れる。

「怪鳥で連れて帰ろうにもあれは揺れます。そうすれば城に辿り着く前にレン殿は・・・」

「お前は治せないのか、ナジエイル。」

「・・・私は・・・回復の力は持つてはいないのです。」

悔しそうにナジエイルが言った。

回復の力って、そんな魔法みたいなのがこの世界にあるのか。初めて知った事実に俺はそんなことを思っていた。俺なら使えるのに、こんな状態じゃ何も出来ない。

その時。

柔らかな風が俺を包み込み、何かを教えようとしてくれた。暖かいその風は俺の全身を包み込むと、少しだけ力と。そしてあることを教えてくれた。

「城に回復の術が使える奴はいるか。」

「・・・居ますが・・・ここまで重症の者を治せる者はいません。」

「・・・使えねえなあ！」

苛立つたライカの口調にナジエイルが閉口する。ディイはもう、何を言おうともしなかった。ただ俺を優しく抱きしめているだけ。

「・・・」

伝えたかった。今、風が教えてくれたんだ。ディイ、聞いて。

「・・・」

必死の思いで俺は声を絞り出そうとした。俺を見守っていたディイがすぐにそれに気がつく。

「レン！・・・レン・・・」

「・・・・・デ・・イ・・つ・・・・・れで・・・・つて・・・」

震える手が俺の頬を覆い、目深に俺を覗き込んでくる。やっとの

思いで目を少しだけ開くと、俺の視界いっぱいに『デイの姿があった。

嬉しくて、涙が零れた。

「…………せ・・・・・か、い・・じゅ・・・・・」

「…………世界樹？世界樹に行きたいのか？」

小さく頷くと、それだけで全身に激痛が走り俺は呻いた。体内で溢れている血がまた逆流してきたのか口の中に鉄の味が広がって、俺はそれを吐き出した。

「…………レンジ！」

「ここから世界樹は遠過ぎます……どうやつて……」

一人の緊迫した声が遠くなつていぐ意識の中で聞き取れた。

お願い。早く連れて行つて。

そう、声にして言おうにももつ叶わなかつた。

「俺が連れて行つてやろ。」

ライカの厳しい声がギリギリの意識の中に響いた。

「ライカ殿が？…………ですが、どうやつて……怪鳥にはもう間違つてもレンン殿は乗せられません。」

「別に怪鳥に乗らなくても俺なら連れて行ける。」

空気が動いて、俺の側にライカが膝をつくのが分かつた。頬に触れる手の感触がした。

「レン、聞こえてるか。世界樹に行きたいんだな？」

行きたい。ピクリとも動かせない体で、それでも俺は微かに頷いた。

「分かった、連れて行つてやる。……おい貸せ。」

初めの言葉は俺に、最後の言葉はきつと『デイ』に向けて言われた言葉だ。

「…………」

「おい、何やつてんだ。早くレンをよこせ。」

ライカの苛立つた口調が聞こえた。どうしたんだろう、『デイ』が動こうとしない。それどころか一層強い力で抱きすくめられる。

「おい、てめえふざけてんのか！」

「俺が治す。」

どこか生氣のない声だった。『デイの心が崩れそうになつていて』がこの時俺には分かつた。俺がこんな目に遭つたせいで『デイの心が壊れそうになつてしまつて』いる。

『強いつと思つていた』『デイの脆さを、こんな時に俺は知つてしまつた。』『こつさせてしまつたのは自分なのだ。』

『デイ。』

「てめえに治せるはずがねえだろ！現実を見る。」

「・・・レンに触るな・・・」

「・・・・・・・・っ！」

『バン、と響いたのは頬を張る音だった。』

『冷静になれ、今のお前には何も出来ない。治せるのは恐らくレンを呼んだ世界樹だけだ。こんな事で崩れるな、お前は王だろう。』

「・・・・・・・・ライカ・・・」

「お前は王として自分のやるべき事を全うしろ、『デイ。』

『一人が互いの名を呼び合つて』を初めて聞いた。

『デイとライカ、二人はどこか深い所で繋がつている気がした。名を呼び合つたこと』でその思いが俺の中で強くなつた。この、二人は。『行け。』

ライカの強い声に押され、『デイ』が俺をそつとライカの腕に受け渡した。最後まで指に絡まつっていた手を放された時、俺はゆっくりと目を開いた。

『デイの顔が目に映る。』

「レン・・・・」

「・・・・・デ・・・・イ・・・・」

微笑を浮かべると、『デイの顔が泣き出しそうに歪められた。でも、すぐに目に力強さを取り戻した。』

『ちゃんと治して、戻つてくるのを待つてる。』

「・・・・・うん・・・・・」

俺の返事を聞くと『デイ』は立ち上がり真っ直ぐに歩き出した。そし

て怪鳥に乗り込みもう一度だけ俺を振り返った時、その顔はもう王のものになっていた。

怪鳥が羽ばたき、風が吹き荒れる。そして一気に空へと舞い上がるのを俺は切れ切れの息の中で見届けた。

「レン・・・よくがんばったな。」

大きな手が俺の頭を撫で、ライカが笑みを浮かべ俺を見下ろしていた。

「・・・行くぞ。すぐに着く。」

俺はライカの体に自分の体を預けた。すると強く抱きしめられる。「辛いだろうが、俺がいいと言つまで息をするな。」

返事をする代わり、俺は目を閉じた。そして今にも途切れそうになつてゐる息を止めた。それを確認したのかライカの周りに感じたことのない力が集まってきた。続けて浮遊感に包まれたかと思うと、次の瞬間には辺りの空気が変わつていた。

「もういいぞ。」

濃厚な緑の匂いと暖かく労わるような空氣に満ち溢れたその場所は、目を開かなくとも世界樹の側なのだと分かつた。俺は止めていた息を吐き出し、そして吸つた。

それだけで体の中に力が入り込んでくる。

「・・・ライカ・・・」

薄つすらと目を開くと額に汗を浮かべたライカが目の前にいた。見下ろしてくる眼差しが優しい。

「・・・他人を運ぶのは初めてだが、上手くいったな。」

「・・・あり、がと・・・」

「礼は治つてから嫌つて程させてやる。」

ほんの僅かでも俺が回復したのに気づいたのか、ライカがニヤリと笑みを浮かべ俺を抱いたまま立ち上がつた。そして世界樹の元へと歩いていく。

「驚いたな。こんな世界樹は初めて見る。」

感嘆とした声をあげ、ライカは世界樹を見上げた。

「お前を守りうとしてるんだな。」

そつと世界樹の幹に背もたれさせかけるように下ろされると、背中に世界樹の息遣いを感じた。ざわざわと木の葉がざわめき立つ。後ろ手に世界樹の幹に触れるとそこに熱いものが集まってきた。体の中にそこから力が注ぎこまれてくるのが分かつて、俺はため息をついた。

あたたかい。

「・・・レン？」

訝しげなライカの声が俺にかけられて、俺は顔を上げた。

「だい、じょうぶ・・・すぐに・・・」

次にどうなるのか、俺には不思議と分かつていた。ライカの表情がギヨツとしたものになっていたので安心させようと発した声は最後まで言えなかつた。言い切る前に俺の体が飲み込まれるように世界樹の中に取り込まれてしまつたから。

遥か高い場所から大地を見下ろしながら俺は風を全身に受けて立つていた。この景色はいつも見ているもの。守るべきもの。そして愛してやまないもの。

『こんなに綺麗な場所なのに。』

争いがこの場所にいつもあるなんて信じられなかつた。

昔からそうだつた。どんなに守ろうとしてもこの世界の人間たちは争いを繰り返す。そして命を削り、全てを削り、色々なものを失くしていった。

『時折、投げ出してやるつかとも思つてしまつんだ。』

俺が守らなければこの世界は均衡を崩してしまつ。分かつていて、それを投げ出したくなつてしまつことが最近特に増えたような気がする。

『・・・・辛いんだ・・・』

笑顔で満ち溢れた豊かな世界に出来るはずなのに、自分の力が及ばなくて皆が苦しみ抜いて今を生きている。

『全部捨てて、終わらせたいと思つたことも何度もある。』

何度も新しく生まれ変わって『それ』から全ての記憶を引き継いで、たつた一人でこの世界を守つてきた。始まりなんてもう遙か彼方にあつて思い出せやしないし、思い出しても無駄なことだつた。この場所から動くことは出来なくとも、俺には世界の全てが見えていた。どこもかしこも争いで埋め尽くされてしまつて、もうどうすればいいのか分からぬ。

『だから、一人は辛いから・・・呼んだんだ。』

ほら、また。新しい争いが生まれようとしている。

俺は上空からそれを見下ろしていた。足元に広がる光景は剣を打ち鳴らし合う人々とその音と、『矢の飛び交う音。そして人々の悲鳴と怒声。

俺の役目はこの世界を守ることなのに、一つもそれが叶わない。

膨大な量の記憶が俺の中に流れ込んできていた。同時に誰かの悲しむ感情も。

まるでその全てを自分が体験したかのような氣さえしてくる程に、

俺は『それ』の中に溶け込んでいた。

『もう辛いんだ。守れないのが・・・』

そう、守れないのは辛い。こんなに側にいるのに自分には何も出来ないんだ。だから無を願う心が生まれてしまう。全てを無くすことで自分が自分には出来てしまつから。

『終わらせてしまいたい。』

守れないのなら。皆が同じように終われば、楽になるのだろうか。遙か足元、大地の上では人々が飽きなく争いを続けていた。剣に体を切り裂かれ倒れ伏す人、弓矢に射抜かれて苦痛に顔を歪める人。俺はそれを見下ろしながら、涙を流した。

『いつも、そうだった。人は苦しみへと向かって生きていこうとする。』

何て愚かなんだろう。

『それ』の悲しみは計り知れないほどに深かった。俺は『それ』の意識に深く同調し、同じように泣いた。

『終わらせたいんだ、だから・・・・力を貸して欲しい。』

『それ』が言った。

『終わらせたい・・・・?』

そこでようやく、俺は自分が『それ』とは違うものなのだと、このことを理解した。

「・・・・終わらせるって、この世界を?」

『そう、そうすればもう誰も苦しまない。』

疲れきったその声の主は言った。

「それは違う。」「

同調して一つになろうとしていた意識がそこで分かれた。

「・・・確かに争いは悲しいものだけど、人は愚かなんかじゃないんだ。」

深く悲しみ嘆いている『それ』に俺は言った。

「皆、何かを守ろうと戦ってる。・・・お前と一緒にだよ。」

俺の心に重なっていたもの、それは世界樹そのものだった。
「皆が色々なものを守ろうとして、うまくいかなくて争いになってしまって・・・お前が放棄してしまったら人は何も守れなくなってしまう。」

俺は空を仰いだ。青く澄み渡った青い空の下で人々の争いが繰り返されているのは苦しいことだけど、それを嘆いて悲しむことなんて誰にだって出来る。

「守りたいんだ。俺は、ここで守りたいものがある、守りたい人がいる。」「

デイ。

「俺は戦いたいんだ・・・大事なものを守る為に。」

終わらせたりなんてしない。

「だから、がんばろう。一人が辛いのなら、俺がずっと側に居るから。」

この世界をたつた一人で守り続けてきた世界樹の苦しみなんて俺には計り知れない。でも、一人だから辛いんだ。

「お前を守るよ。」

今度は言葉だけじゃない。

「だから、力を貸して欲しいんだ。」

俺の言葉と同時に景色が揺らいで、一変した。

俺は世界樹を見下ろすように立っていた。世界樹はざわざわと木の葉を鳴らせ、俺を伺っているようにも見えた。

「大丈夫。俺とデイが、絶対に守ってやる。」

お前の親なんだから、守るのは当然だ。

俺は世界樹の葉先に触れ、一枝を優しく包んだ。

「俺の体を治して欲しいんだ。・・・・・デイが、待ってる。」

守ると約束をした。一緒に戦うと、デイと約束をしたんだ。だから行かなくちゃ。

『怖くは、ないのか?』

「・・・怖いよ。だつてもしかしたら死ぬかもしれないんだ。でも・・・」

俺は世界樹に向かつてニカツと笑つて見せた。

「戦わないと守れないのなら、俺はそうしたい。」

「デイを守りたい。デイの国を、そしてこの世界を。世界樹を。

「みんな、守りたいんだ。」

「・・・お前は強い。』

ふつと、どこか力の抜けた声が頭の中に響く。

『今までの者とは違う。この世界を受け入れようとする者はほとんどいなかつた。』

「・・・そななのか?』

『今まで私を生み出してきた者たちは、お前ほど心が大きくなかった。』

世界樹の声が泣いているように聞こえて、今までの孤独を俺に教えてくれた。

『・・・・お前の体を癒し、力を与えよう。』

胸の中心が燃えるように熱くなつて、体中に力が溢れた。

『この世界を、守つて欲しい・・・』

「もちろん。』

俺は世界樹の葉に抱きつくと、頬を寄せた。そこからも力が流れ込んできて、髪の先から指の先まで力がみなぎる。

「全部終わつたら、デイと一人で来るよ。』

だから俺に戦いを乗り越える力を。一人じゃ何も出来ないんだ。笑つてしまつくらいに俺は弱いから。

『 デイ 待つていて。』

淡い光に包まれて、俺は自分の体の傷が癒えていくのを見つめいた。そして不思議な力で体を満たされると、一步を踏み出した。早くデイの所へ行かなきゃ。それだけが頭の中についた。

『・・・・・』

「大丈夫、心配するなって。」

聞き取れないほどの小さな声が俺の耳元で一言だけ囁くのを聞いて。俺はつい笑ってしまった。一度だけ振り返り世界樹を見上げる。こんなにも堂々と佇んでいるのに、まるで子供のようなことを言うなんて。

「じゃあ、行つてくるー。」

両手で力いっぱい世界樹に向かって手を振ると、返すようにざわざわと葉が揺れた。それを見届けてから俺は光の差す方へと真っ直ぐに歩き始める。

木から飛び出すなんて体験は「これから先もつ一生する」とはないと思う。

「びっくりしたあ。」

まさかそんな出方をするなんて思つてもいなかつた俺は頭から思いつきり地面に倒れながら、そんな一言を発した。

「・・・驚いたのはこっちだ。」

頭上から声が降ってきて、顔を上げると呆れ顔をしたライカが立つていた。俺は苦笑いを浮かべながら立ち上がると服の埃を払つた。

「居てくれたんだ。」

「そりやあな。で、見た所怪我は治つてるみたいだな。」

俺は自分の体を見下ろし、胸を押さえ、その場でジャンプをする。うん、どこも痛くない。

「大丈夫みたい。」

「死にかけ寸前の奴がぴんぴんして戻つてくるなんて、不思議なもんだ。」

ライカが世界樹を見上げると、物言いたげに世界樹が葉を揺らめかす。

「ま、治つたんなら話は早い。状況を説明するぞ。」

ライカはその場に腰を下ろすとポケットからタバコのよつなものを取り出しそれに火をつけた。深く息を吸い込んで、煙を吐き出す。俺はライカの正面に腰を落とした。

「お前が世界樹に取り込まれてから一日が経つていて。その間に戦争は開始された、宣戦布告をしたのはカーミアだ。」

「・・・カーミアが？」

「それがタランフィリアの迷惑だつたようだ。仕掛けられたのなら正当な理由を掲げて相手を叩き潰せる。・・・どうやら王女様はいつもになく立腹のようだぜ。」

ライカは話を進めながらまた煙を燻らせる。

「お前をぼろぼろにして怒り狂ったあの野郎に戦いを仕掛けさせる。王女にとっちゃや、一石二鳥だな。気も晴らせた上で相手を思う存分叩きのめせるんだ。こんな都合のいい話はない。」

「デイが戦争を仕掛けた。俺はその事実に少なからずショックを覚えていた。それでは戦いの意味合いが違つてしまつ。

「あいつを責めるなよ・・・それほどのことをあいつはされたんだ。無理もないだろう。」

「ライカ・・・」

本当に、ライカは人の心が読めるんじゃないのかな。寸分違わずこっちの思つていることを言い当ててしまうんだから。

「・・・責めないよ。そりやあちよつとショックだつたけど、それはデイが俺を大事に思つてくれている証だと思つ。」

俺だつて逆の立場だつたらきっとやつする。デイを傷つける人を許したりなんて出来やしない。

「・・・ふん、言つてくれるな。」

ライカは悪態をつきながらタバコの灰を落とし、また口に運ぶ。一呼吸を置いて煙を吐き出す。なんか、様になつてかつこいいなあ。これが大人の男つて奴なのかな。

「戦況はますますだ、だが優勢と言つわけでもない。この状態が続ければカーミアが不利になるのは目に見えている。」

「どうして?」

「王女が姿を現していないからだ。」

「エルミナが?」

「そうだ。いつもは最前線にあの王女が立ち指揮を取つていいんだが今回はそれがない。かえつてそれが気になる。」

俺に戦争のいろはは分からぬし、未だに戦い方なんて知らない。戦争で軍師つてポジションがあるくらいだから駆け引きしながら戦うのは当然なのかもしれないけど。

ライカの言う通り、あのエルミナが姿を現していないのには違和

感を覚える。あれだけの強さを持つてゐる人が、おまけに結構好戦的つぽいのに、戦場に姿を現さないなんておかしい。

嫌な予感がした。

「ライカ、俺行くよ。」

俺は立ち上ると遠くを見た。この視線の先には『ディがいる。

一人で戦つてゐる。俺が来るのを待ちわびながら。

「ディが待つてゐる。」

不思議な気持ちだつた。俺はこれから危険の中に身を投じようとしているのに少しも怖いなんて気持ちがない。それでなくとも相手はあのエルミナなのに。

遙か彼方を見据え、俺は無意識に体に力を込めた。
目を閉じるとそこにディの姿が浮かびあがつた。埃立つ大地の上で敵味方が混同する中で戦い、指揮を執る姿。これはきっと、今のディの姿だ。

俺は微かに目を開き、意識を集中した。『見える』ことを当然と感じてゐる自分に不思議と少しの疑問も抱かないまま、意識をディから切り離す。映画を見ているように画面が次々と切り替わつて行き、最後にエルミナの姿が見えた。

戦場ではない場所でエルミナは一人蹲り、震えていた。俺にあんなことをしでかした時とはかけ離れた弱々しい姿に、疑問が湧き上がる。

「この人は本当にあのエルミナなのか？」

「・・・・エルミナ」

呼びかけるとエルミナがガバリと身を起こした。そして『俺』を見てくる。

「・・・・レン・・・・」

涙でぐしゃぐしゃになつた顔が痛々しい。

「レン・・・・生きててくれて、いたのね。」

そこに居たエルミナは俺の知つてゐる人ではなかつた。弱々しく、傷ついた小鳥のように震えていた。

「・・・お願ひ・・・止めて・・・」

「・・・エルミナ?」

「私を止めて、お願ひ・・・」

エメラルドグリーンの瞳からとめどなく涙を流しながらエルミナは『俺』に懇願した。

「・・・お願ひ

声は最後まで届かなかつた。何かに遮られたように、エルミナの姿が消されてしまったのだ。

「おい、どうした。」

ほぼ同時にライカに呼ばれ俺はハツと我に戻つた。そこは変わらず世界樹のふもとで、俺はライカの横で立ち向かっていた。
あれは一体なんだつたんだろう。あれは本当にエルミナだったのだろうか。

「レン。」

「・・・ライカ、俺・・・」

今、自分が見たものは現実だ。それには確信があった。

「遠見をしていたのか?」

「・・・遠見?」

初めて聞く言葉に俺は首を傾げた。今自分が見ていたものは確かに今の『彼ら』の姿のはずだけ。

「何か見えていたんだろう?」

「・・・うん」

「それは遠見の力だ。そんな力まで持つていたのか。」

「・・・よく、分からぬけど・・・。」

あの弱々しいエルミナの姿が脳裏にこびりついて離れない。一体、どう言つことなんだ。エルミナは自分の意思で戦いを起こしているんじやないのか? そうでなければあの姿に説明がつかない。

早く行かなくちゃ。

俺は妙な焦燥感に襲われた。何かがおかしいとこの時はつきひとつ感じたのだ。

「ライカ、鳥を貸して。」

「あ？・・・ああ。」

俺はライカの返事を待たずに側に居た怪鳥の元へと小走りに近づいた。そのまま飛び乗ると手綱を手に巻きつけ、一気に空へと舞い上がった。後方でライカが何かを大声で叫んでいたけれど、聞き取れないまま俺は一直線に戦場へと向かった。

青く晴れていた空が次第に曇り始め、雷が鳴り始める。空気が重く湿り気を帯び始めもうじき雨が降るのは容易に想像がついた。俺はそんな中、ひたすら戦場へと向かつて怪鳥を飛ばせる。

考えていたのはエルミナのことだった。あの姿がもし本来の彼女自身なのだとしたら、そこまで凶暴性を持つているエルミナは一体何なのか。

『止めて』と言つてあの時泣いていたエルミナの声は偽りなんてなかつた。

この戦いは、もしかしたらエルミナが引き起こしたものではないのかもしれない。

あくまで推測の域を脱することが出来ないまま、どんどん大きくなっていく焦燥感に俺は手綱を強く打ち鳴らした。早く、一刻も早くデイの元へ。そしてエルミナに会わなければ。

重く立ち込めた雲間から太陽が姿を消した時、一滴の雨が俺の頬を濡らした。起こっている戦いを嘆いているかのようなその雨は次第に足を強め、あつという間に豪雨となつた。

息をするのすら厳しい雨の中で、まともに田も開けられない俺はそれでも必死に前方を見据えた。流れ落ちる雨を何度も拭い、一心に戦場を目指す。

戦いはカーミニアとタランフィリアの国境付近で起こっていた。導かれるようにして俺はようやく戦場へとたどり着くと、遙か下方を見下ろした。そこには大勢の兵士達が争いを繰り広げていた。

激しい雨音と、剣を打ち合つ音と、兵士達の怒声のする戦場を俺

は見下ろした。激しく降りつける雨が全身を濡らす中、聞こえてくる音がどこか現実味がなくて。

「・・・・・デイ・・」

何千人、下手をしたら何万人もの兵士がその場で命をかけた戦いに身を投じている。この中に、デイが居る。探し出すのは困難に思われるはずだった。

けれど。

分かつてしまふのはどうしてなのか。俺にはデイがどこにいるのかがすぐに分かつてしまった。見えない糸で繋がれているのなら、それだけで。引力に引き付けられるようにデイを見つけた俺はその場所に向かつて怪鳥の高度を下げる、

「デイ！」

雨音に声をかき消されないよう叫んだ。ピタリとデイの動きが止まり、上を見上げる。

「・・・・レン！」

俺を見つけたデイが強く俺の名を呼んだ。胸に温かいものがジワリと広がってくる。視線が交わり絡み合ひ距離まで高度を落とすと、俺は手綱を緩めそのままデイに向かつてダイブした。

「デイ！」

デイの腕に抱きとめられしがみつく。デイが剣を下ろし俺を柔らかく包み込んだ。

「レン、もう大丈夫なのか？」
「うん、もう大丈夫。」

いきなり姿を現した俺に、周りの兵士達が驚きに動きを止める。雨音だけがその場に響いていた。

「エルミナは？まだここには来てないの？」

顔を上げ開口一番俺は言った。それが予想外の言葉だったのかデイは訝しげな顔をして見せた。

「王女はまだ姿を現していない。レン、どうしたんだ。」

「・・・気になることがあって。デイ、俺・・・エルミナの所へ行

「うかと思つんだ。」「

「何を馬鹿なことを・・・あんな日に遭わせられてなおも王女の前に行くとこりうのか。」

ディは思い出したのか怒りをあらわにし、声を荒げた。

「あれを許すことはもはや出来ん。今この場に姿を現さないことも、俺には許しがたいことだ。」

ディは怒りに燃えた目を遠くにやつた。その先に何があるのかなんて考へるまでもない。ディの視線の先にタランフィリアの城があるのだ。

「聞いて、ディ。俺・・・さつきエルミナに会つたんだ。エルミナは泣いてた。」

「・・・・・?」

「自分を止めて欲しうって、泣きながら俺に言つてきたんだ。」

「どういこりうことだ。」

俺は、ディに俺が見たものをつぶさに語つた。推測でしかないかもしない、俺の中にある違和感も。

ディは最後まで言葉を挟むことなく俺の言葉を聞き終えると、何かを考えるように眉を寄せながら目を閉じた。俺は、ディの腕に触れながら待つた。

そして再び目を開いた時、ディの目の奥の怒りが少しだけ和らいでいた。

「レンは、いいのか?」

「え?」

「王女を許せるのか。」

「許すも何もないよ、ディ。俺は・・・ただ、守りたいだけなんだ。この世界を。」

あの時エルミナにされたことに俺は怒りなど全く覚えていなかつた。この戦いを引き起こした原因は全て俺にあるし、あんな日に遭つたのも今では何とも思つてない。体は治つてるしね。

「ディが俺のされたことに怒つて戦いを起こしたことは、嬉しいよ。

そこまで俺を想つてくれてることなんだもん。だけど、もしエルミナが自分の意思であんなことをしたんじゃないのなら、止めたいんだ。だから、それを確認しに行きたい。」

俺はエルミナの心を知りたかった。

俺たちは本当に闘い合わなければいけないのか。
もしそうでないのだとしたら、こんなにも無意味な戦いなんてない。

「正直、どんな理由が王女にあらうとレンにしたことを許す気には・俺はない。だが、当のレンが許してしまっているのならこの戦いに意味などないな。」

「デイ・・・

「王女の所へ行こう。」

「・・・うん！」

「だが、あれは狡猾な女だ。レンに見せた姿が眞実とは限らない。どこまでも冷静な、デイに、俺は思わず苦笑いを浮かべた。

「そうかもしけない。でも、確かめてみなきや分からぬだろ。」

雨はなおも激しく降り注ぎ、俺を、デイを濡らし続けた。デイの肌をいくつもの雨が流れ落ちていきそれが触れている俺の手にかかる。冷たいだけなはずの雨が、少し温かかったのは、気のせいなんかじゃない。

雨は全てを覆い、流し去るうとしていた。

この世界がどれだけ長い間存在してきたのかは分からぬ、でもこんなにも弱々しく震え続けている。そこに生きている全ての人達が自分の為すべきことを模索しながら生きている。

俺に一体何が出来るのだろう。

この世界を救う為に俺には何が出来るのだろう。
守るつて、一体何なんだろう。

考えたつて、今の俺には分からぬのかもしけない。

それでも、出来ることだつてある。ほんの小さなことでいいんだ、
例えは差し伸べられた手を取るだけでも。

救いの手を差し出すだけで精一杯の人だつてきつと、居る。

「デイ、ごめん。」

「何のごめんなんだ?」

「エルミナの所に行くの、デイは辛いだろ?」「デイの弱さを見てしまった今、その元凶の元へ自分から行こうとする俺についていかない訳にはいかない。デイの苦しさは計り知れない。それでも、行くと言つてくれた。

「・・・感情を抑えきれる自信は、ない。だが・・・逃げてばかりもいられないだろう。」

一人では乗り越えられなくても一人なら。もっと多くてもいい。俺はデイと一緒にならなんだつて乗り越えられる。デイもきっと同じ気持ちで居てくれているはずだ。

「行こう。」

デイの手を取り、俺は笑いかけた。その手が強く握り返されるのが、たまらなく嬉しかった。

「ディイが戦場を離れることに、ナジエイルはもちろん賛成なんでした。それがエルミナの所へ行くとなるとなおさらだった。けれど俺達の決意が固いことを知つて盛大にため息をついて最後には「仕方がないですね」としかめつ面をして見せた。

「まず何より、レン殿が無事に戻つて来られたこと・・・喜ばしく思います。ですがやんちゃも大概にしていただきたいものです。」

「うめん・・・」

「ここには引き止めなければならないのが私の役目ですが、この戦争を止める為に必要なことならば仕方がありません。」

ディイが居た最前線から遙か後方のカーミア軍の拠点となつてているテントにナジエイルはいた。俺達は一度そこまで戻り、戦場を一時離れることをナジエイルに告げに戻つてきていた。

「何より止めても無駄なのでしょうね。」

「・・・へへ。」

「お怪我をされませんよう、十分に気をつけること。これを守つて頂くことが前提ですが・・・王もレン殿も守つていただけますか?」

ナジエイルの深い青い瞳が不安に微かに揺れたのに気づいてしまつた俺は、自分がどれだけの無茶を言つているのかを突きつけられた気がした。

「約束するよ、ナジエイル。」

握っていたディイの手にぐつと力を込め、俺は笑つて見せた。ディイと顔を見合わせると、ディイも力強く頷いてみせる。ナジエイルはそこでやつと固かつた表情を緩めるとほんの少しだけ笑みを浮かべた。

「・・・お気をつけて。」

ナジエイルの言葉を聞き届けてから俺達はテントを出た。予想していた以上に簡単にオッケーが出たのは本当に意外だった。ナジエイルのことだからもつと怒つて頑として譲らないかと思つていたの

」。

「あんまり怒られなかつたね。」

小声で囁くとデイも頷き「予想外だ。」と驚きを隠さなかつた。

いまだ降りしきる雨はそれでも足を弱めつつあつた。俺達は用意してある怪鳥に一人で乗り込むと遠くを見据えた。

その姿さえ見えない遙か先に、エルミナが居る。

俺は唇を噛み締めた。これで戦いが終わるよつこと、強く祈つた。

怪鳥を飛行させながら俺達はその間、終始無言だつた。話さなくても平氣だつたから。

ただこれから先に起つことが、想像もつかなくて怖くもあつた。ここまで来ると頭の中にはエルミナのあの弱々しい姿しか浮かばない。

少しずつ溢れてくるこの恐怖は以前エルミナに感じたものとは違つていた。あの時は圧倒的な恐怖に支配されたけれど、今はもっと漠然とした掴みようのない恐怖。

俺は自分がエルミナに何か出来るかなんて思えない。でも、確かに助けの手が差し伸べられているのは事実なのだ。

何かに苦しんでいるエルミナのあの姿が嘘か偽りかも分からぬ今、それでもあの言葉に嘘は感じなかつた。

「・・・レン・・・

「・・・何?デイ・」

「・・・この戦いが終わつたら・・・」

何かを呑いたデイの言葉は雨に書き消され、こんなに側にいるのに俺の耳には届かなかつた。何を言つたのか知りたくて聞き返そつとした時。眼下に城が見えてきた。

真っ白な城が不自然にその場所に浮かぶよつにあつた。

「着いたな。」

タランフィリアの城、エルミナが居る場所。デイは怪鳥を旋回さ

せると城の頂上へと降り立つた。人の気配が少しも感じられないのはイリツィアと同じだけ、こゝはそれ以上に全てが沈黙していた。

「・・・人、居ないのかな。」

「分からんが、どうも様子がおかしいな。」

「デイが先に怪鳥から飛び降り、俺が降りやすいように手を貸してくれる。その手を取りながら俺は怪鳥から降りた。」

全ての人間を戦場に送り出しているなんてあるはずがない。そんなことは俺にだって分かる、本拠地を空けていては危ないはずだから。なのにこの人気の無さはなんなんだろう。

俺は先に歩き出したデイの後を追つた。城の内部に入ると一層人気のなさが際立つた。まるで物音がしない、するのは俺とデイの足音だけ。長い階段をひたすら歩きながら俺達は最下層を目指した。不思議なことに階段以外の何もこの城にはなかつた。らせん状の階段が延々と続くだけで他に続くべき扉や出入り口の一切がないのだ。まるで俺達をその場所に連れて行きたいかのように続く階段を俺達は下り続けた。

「デイ・・なんか・・、おかしくない?」

「・・・ああ・・」

窓もない。降り続けてはいても、目印になるものがなければ一体どれくらい下つてきたのか見当もつかないくらいにその階段は深く、長く続いた。

ジワリと、不穏な空気が辺りに漂いだしたのを感じ俺は足を止めた。数歩先まで進んでからデイが俺を振り返る。

「レン?」

階下から少しづつではあるけど何か嫌なものを俺は感じ取っていた。この感じを俺は知っていた。

あの泉でエルミナが纏つていた空氣と全く同じものだったのだ。

「・・・デイ・・・」

不安に駆られデイを呼ぶと俺は自分の体をかき抱いた。デイは何も感じないのか、こんなにも重い圧迫感を。でも降りなければ何も

始まらない。俺は一度深呼吸をしてから「なんでもない」とまた足を進め始めた。

長く続く階段をひたすらに下り続けそしてようやく俺達は最下層へとたどり着いた。下りきった階段から少しだけ廊下が続いていて、その奥には大きな扉がある。この奥にエルミナがいる。

俺達は一度だけ顔を見合わせ、そして進んだ。扉を開いたのはデイだった。重く軋む扉を押し開け一步中に入ると、広いレンガ造りの部屋の中央にエルミナが一人佇んでいた。

後ろ姿で立ち尽くしているように見えるエルミナに俺達は無言で近づいていく。気がついてないはずはないのに、一向に振り返ろうとしないエルミナに後もう数メートルの所で俺達は足を止めた。

「レン。」

鈴を転がしたような高い声が俺を呼んだ。

「まさか来るとは思わなかつた。」

振り返りもせずエルミナが言った。壁に向かつて立っているエルミナの視線の先には碎けた鏡のカケラが散らばっている。それで気がついた。

ここは、あの時の場所だ。痛めつけられてなお、鎖で吊るされた場所。そしてデイと鏡越しにエルミナがデイと会話をしたあの場所。デイもそれに気づいたのか底うように俺の前に立ちはだかる。

「・・・エルミナ・・・」

「どうして來たの?」

「・・・どうしてつて・・・」

「どうして來たりしたの。」

エルミナが振り返った。その姿に俺は息を呑んだ。

エルミナはあの時見たように、顔を涙でぐしゃぐしゃにしていた。溢れる涙はとめどなく流れ落ちていく。そして、その手が。

真っ赤に染まっているのだ。ぽたぽたと地面に染みを作り続けている赤い滴はエルミナ自身の流している血だった。怪我をしているのか。でもどうして。

「タランフィリアの。」

空気を裂くように「デイ」の声がその場所に響いた。

「お前のその姿が何なのか聞くつもりはない。言いたいことは一つだけだ、この戦争を終わらせる為にお前の言葉が必要だ。」

涙を流しながらエルミナが微笑んだ。

「・・・・分かつて、いるわ。カーミアの王。」

言葉つて、一体何のことだ。そう言えば俺は正確な戦争の終わり方をデイから聞いていなかつた。

「デイ?」

しかし俺の呼びかけにデイは振り返らなかつた。

「終わりの言葉をこの場で紡げ。」

「ちょっと待つて、デイ! 一体何のこと?」

俺は慌ててデイの腕を掴み強く引いた。デイは視線だけを俺に投げかけた。その目は見たことのないくらい冷酷な。

「・・・デイ。」

掴んでいた手が力を失くし落ちた。逆らえない、こんなデイは知らない。

「・・・・言葉を、言つわ。でもその前に」

エルミナは血だらけの手の中に何かを持つていた。薄暗いこの場所ではそれが何なのか俺にはよく分からなくて。

「お願いがあるの。」

「この期に及んで一体何を。」

デイが腰に下げるていた剣を音もなく抜いた。切つ先をエルミナに向ける。

「・・・・私を殺してちょうだい。」

「!」

エルミナが力なく、一歩俺達に近づく。

「もう、嫌なの。・・・・もう争いたくない。本当はいつだってそう、思っていたわ。」

「戯言を。これまでの戦い全てを引き起にして来たのはお前自身だ

るつ。」

チャキ、ヒデイが剣を握りなおしたのか金属音がした。

「…………信じてもらえないでしょうね。でも…………私じゃないの。」

「エルミナ？」

「私じゃないの……だから、殺すの。」

更に一步近づいたエルミナの手の中にあるものが何なのか、やつと分かつた。僅かな光が反射して見えたのだ。

血まみれの手の中にあつたのは碎けた鏡のカケラだった。エルミナはそれを自身の首に押し当てるときもなく一気に喉を引き裂いた。

「エルミナ！」

引き裂かれた箇所から血が迸る。鮮血がエルミナを中心に床を濡らしその範囲を広げていく。俺もヒデイも、呆然とそれを見ていた。何が起こっているのか、頭が理解しない。

「・・・エル・・・ミナ」

常人ならすぐにでもその場に崩れ落ちて絶命するくらいに、エルミナは自身の首を深く搔つ切つた。その証に鮮血はいつまでもやまない。

「・・・でもね・・・」

エルミナは絶命していなかつた。それどころか、そのまま立つて話続けたのだ。あり得ない光景に俺達は言葉もない。

「自分じゃ、死ねないの。どうやっても・・・しないのよ。」

手の中にあつた鏡のカケラを取り落とすと、エルミナはまた涙を流した。

「私の中に・・・凶暴な何かがいるの。それに意識を奪われると、次に意識を取り戻した時、必ず私の前では誰かが死んでいるの。私、父も母も・・弟も、この手で殺したわ。そしていくつもの国を滅ぼした。でも・・・私じゃないの。」

エルミナの首筋の傷は信じられない速さで塞がり、とじた。血の

流れた跡だけが首に残されているだけだ。腕の傷も同じようにすっかり消えてしまっていた。

「…………信じられないでしょ、う？」

「エルミナ……」

「誰も信じてくれなかつた。だつて、『私』がしているんだもの。違つて言つたって、嘘にしか聞こえないわよね。」

泣きながらエルミナはおかしそうに声を上げて笑つた。

「お願い……レン、あなたなら私を殺せるわ。もう……辛いのよ……」

争いたくもない、殺したくもない。けど、自分の中の何かがそれをする。例えようのない恐怖が心を支配した。いつそ気が狂つてしまえばまだ楽になれたのに。

エルミナは血溜まりの中に崩れ落ち蹲ると悲鳴のような泣き声を上げながら心を吐露し俺に「殺して」と血を吐き出すように言つた。俺には何も言えなかつた。殺してと懇願されたつて俺には人は殺せない。

エルミナが嘘を言つているなんて、到底思えなかつた。この姿はきっと本来のエルミナの姿なんだろう。じゃあ、一体何が彼女にそうさせているんだ。

どうやつたら、彼女が望む方法以外で救えるんだ。考へても、考へても何も思いつかない。こめかみを滴が流れ落ちた。それが雨の残滓なのか汗なのか俺には分からなかつた。

「…………レン……あなたは……」

エルミナの声が、苦しそうに俺を呼ぶ。俺にはかける言葉が見つからなかつた。助けを求めているのに、どうしても言葉が出てこない。動けない。

「…………わた……し……あ……」

蹲つたままのエルミナが微かに痙攣した。とたん、腐臭にも似た嫌な臭いが立ち込め始める。圧迫感と、覚えのある恐怖感がエルミナから発せられ始める。

「・・・・あ・・・あ・・」

『デイもそれを感じ取つたのか、手に持つていた剣を構えなおす。明らかに異常がエルミナに起つていていた。目に見える姿には何の異常もないのにどんどんとエルミナではなくなつていく、それは気のせいなんかじやなかつた。

「・・・・・ああ・・」

腐臭が部屋に充满しきつた時、蹲つていたエルミナがゆっくりと顔を上げた。張り付いたような、禍々しいまでに美しい笑みを浮かべながら音もなく、彼女は優雅に立ち上がつた。

「レン、こんにちは。また会えて嬉しいわ。」

声が毒となつて耳に届く。さつきまでのエルミナじゃない。これはあの時、泉で会つた時のエルミナだ。直感がそう告げていた。

「『めんなさいね、びっくりしたでしょ?』

「……お前、誰……？」

声が喉に張り付いて上手くしゃべれない。掠れた声で俺は確認するように目の前のエルミナの姿をした人に尋ねた。

「私はエルミナよ。知っているじゃない。」

楽しげに笑うとエルミナは一步俺達に近づいてきた。それだけで圧迫感が強まる。

まるで別人だった。このエルミナはさつきまでのものとは全く違う。こんなことがあるなんて信じられなかつた。だけど、同時に脳裏に浮かび上がる言葉もあつた。

多重人格。

そんな病氣があるのも事実ではあるけどこれはそんなレベルじゃない。これは同じ姿かたちをした別人でしかない。

俺はディの背後で固唾を飲み込んだ。背筋を滝のような汗が流れ落ち手足が細かく震える。絶対的な恐怖を俺はこの時感じていて動くことさえ出来なかつた。

「レン、下がつていい。」

ピクリとも動けないでいる俺にディが振り返らずに言つと、俺が返事を返す間もなくディが動いた。一瞬で問合ひを詰めると無防備なエルミナに一気に切りかかる。

すべてが一瞬だつた。

俺は声を発する事も出来ず見つめるだけ。ほんの瞬きの間にディの剣がエルミナの体に食い込み、振り下ろされる。エルミナの腕が飛んで遠くへと投げ出される。

「さりと物が落ちる重い音がした。

「・・・いきなり酷いわ。」

腕を切り落とされたにも関わらずエルミナはさしてそれが大事ではないような口ぶりでそう言った。痛みなどまるで感じていないその様子に俺は事態を理解するのもやっとで。

「お前は・・・タランフィリアの王女ではないだろ？」「

『デイがエルミナの首筋に切つ先を突きつけ言った。

「あらあ、私はエルミナよ。」

おかしい。目の前に居るこの人は本当に人間なんだろうか。『デイもそんな風に思っているんじゃないだろうか。だつて、切り落とされた腕から血の一滴も溢れてこないのだ。エルミナの腕は肩から切り落とされていて、常人なら出血多量か腕を落とされたショックで死んでしまっているだろう大怪我のはずなのに。

「お前からはもう腐臭しかしない。正体を現したらどうだ。」

片腕になつたエルミナは『デイの追求にそ知らぬ顔をするだけだつた。俺の位置からは『デイの表情はうかがい知れない。だけどその背から怒りが伝わってくる。

俺に「殺して」と言つたエルミナは間違つてもあのエルミナとは違う人間だ。この腐臭を発するこの目の前にいる人間は一体何んだろう。腕を切り落とされても痛みに顔すら歪めない、まるで生きている人間じゃないみたいだ。

目の前では変わらず二人がにらみ合つてゐる。エルミナは涼しげな顔をしてゐるけど、そう言えばどうして攻撃を仕掛けっこないんだ。あんなに呆氣なく腕を落とさせるなんて。

「答える、お前は一体何だ。」

「・・・うるさいわね・・・

苛立ちをはらんだ声、明らかにエルミナは以前とは様子が違つていた。自らの意思で動けないようにも見える。『デイには剣の切つ先を突きつけられているだけだ、避けようと思えば出来るはずなのに。俺になら自分を殺せるとエルミナは言つていた。俺でなければな

らないのならその理由はなんだろう、最後にエルミナが言いかけていた言葉は一体なんだつたんだろう。

俺は、徐々に自分の手足の震えがなくなっていくのが分かつた。さっきまであんなに感じていた恐怖も薄れ始めている。目の前にいるエルミナに恐怖を感じなくなり始めていた。

「・・・・エルミナ。」

目を凝らし俺はエルミナを見つめ名前を呼んだ。俺の声に一人がハツと俺に振り返る。俺はゆっくりと一人に向かって歩を進めた。固い決意を胸に秘め。

「エルミナ・・・・応えて。」

「・・・レン、何を・・・」

ディの困惑した声を俺はこの時あえて聞き流し、足を止めずどんどんと近づきそして一人のすぐ側で立ち止まる。

「どうして欲しい？」

エルミナの目を覗き込むように俺は真っ直ぐにエメラルドグリーンの奥を見つめた。綺麗な目の奥に淀み腐敗した何かが見える。俺は確信した、今この意識はエルミナじゃない。

「エルミナ、聞こてるんだろ。応えて。」

「・・・・・一体何を言つている。」

口調が一変した鈴を転がした声。

「お前に聞いてるんじゃないんだよ。」

嫌悪感に語調がきつくなる自分がいた。そんな俺を見てエルミナが不愉快げに眉を吊り上げる。

「ガキがつ・・・・」

残された腕が俺に向かって叩きつけられようとするのを、ディが寸前で掴み止めた。エルミナの表情が醜く歪む。

「エルミナ・・・俺に、どうして欲しい？」

俺はエルミナの意識に語りかけた。目の前でどんどんと醜悪な顔になつていくもう一人のエルミナなんて氣にもせず、手を伸ばし頬に触れた。

エルミナが短く悲鳴を上げたかと思うとぐがくと痙攣を起こす。それは短い時間だった。再び顔を上げた時、エルミナの表情は憑き物が落ちたように晴れやかだった。

部屋に充満していた腐臭が消えてなくなる。

「・・・レン・・」

微笑を浮かべるエルミナの肩の切断面からせき止められていた血が溢れ始める。

「私を・・・殺して。今なら・・・」

「・・・それで、本当に・・・いいのか?」

「・・・・もう、だれも・・・傷つけないで済むの・・・」

「分かつた・・・叶えるよ。」

俺はデイの腰にある短剣を抜き取るとエルミナの体を抱きしめた。エルミナの中に居るもののが一体何なのか分からぬ。けど、こうしないとエルミナは苦しみ続けるだけだ。俺は歯を食いしばった。殺すのならばそれは本当ならエルミナの中にいる何者かなのに。

「・・・・カーミアの、王。」

「・・・・ああ。」

エルミナの呼びかけにデイが短く答える。

「・・・ごめんなさい。今・・・・」

エルミナの残された手が俺の背を越えてデイに差し伸ばされる。

「我は・・・タランフィリアが王女、エルミナ・デコバン。ここに

我が敗北を・・・認める・・・」

全てを終わらせる言葉をエルミナが紡ぎ、デイは無言を返事とした。

どこからこんな風になつてしまつたんだろう。こんなことがないままエルミナと出会つていればもっと違つた形になつていたはずなのに。

俺は涙が止められなかつた。どうしてエルミナが死ななければいけないのか分からぬ。それ以外に何か方法があれば絶対にそっちを取るのに。

「レン……」「めんなさい……」

デイに向かつて伸ばされていた手がそのまま俺の背に回り弱々しい力で抱きしめられた。

「……エルミナ……」

そんな風に謝らないでよ。俺の方がもつと酷いことをするのに。だけどこの戦いは俺が引き起こしたものだから、自分だけ逃げる訳にはいかなかつた。エルミナは自身の責任をきちんと果たしたのだから。

震える手で短剣の切つ先をエルミナの背中の中心に当たし、俺は泣きながらその背に刃を突き立てた。微笑を浮かべながら声もなくエルミナは俺の腕の中で崩れ落ちていつた。

手に伝わつた感触を、俺は一生忘れない。こんな嫌な感触、もう一度と味わいたくなんてなかつた。

「レン……」

本当にこんな結末しかなかつたのか。俺は崩れ落ちたエルミナを抱きしめながら泣いていた。そんな俺を労わるよつてデイが包み込んでくる。

「……デイ……俺……」

「何も言わなくていい。」

戦争は終わつた。俺の中に抜けない棘を残したまま。

「……なんでこんなことになつちゃつたんだろう。」

腕の中のエルミナは眠つてゐるかのように穏やかな顔をしていた。この人の命を終わらせたのは俺だ。それだけは変えようのない事実だ。

俺は自分の守りたいものを守つた。その為に必要なことがこれだつたのなら、この言ひようのない後悔は一体どうすればいい。

「……デイ、守るつて……何？」

「こんなにも重たいものだなんて思つてもみなかつた。」

「……レン……」

頭を引き寄せられ俺はデイの胸に額を押し当てた。涙は後から後

から溢れ、止まらない。

「何かを守るために、何かを犠牲にしなければならない。」

ディのその一言は俺の深い所に響いた。今までディはどれだけのものを犠牲にして何を守つてきたんだろう。俺なんかきっと比べられないくらいたくさん辛い思いをしてきたはずなのに、どうしてこんな風に強く言えるんだろう。

「誰もがそうして生きているんだ。」

聞き覚えのある言葉に俺は焦点が合わないまま、ディを仰いだ。この眼差しを向けられたことが以前ある。あの時は、視線の先にライ力が居た。

どうして同じことを一人が言うんだろう。

ディとライカには何か途切れない繋がりがあるのかな。

「・・・そう、だよね・・・。ライカにも・・・同じこと、言われたんだ。」

自分の守りたいもの全てを守りたいなんて、どれだけ願つたって出来ない。その言葉の意味を俺は痛感していた。エルミナを救えなかつたことでやつと知つた。

不思議だった。俺はエルミナとともに会話もしたことがないで、あつたことと言えば酷く痛めつけられたことだけ。恨みこそそれ、こんな風にその相手を想うなんておかしいのに。

どうしても憎みきれないものがエルミナにはあった。

「・・・エルミナ、ごめんな。」

こんな風にしか出来なくて、ごめん。俺は色を失ったエルミナの頬に指で触れた。もう温もりもほとんどない白い肌は陶器みたいだつた。

この人は死んだ、俺が殺して奪つた。彼女の望みだつたとしても、刻まれた罪はもう消せない。俺は人をこの手で殺してしまつた。

「レン、自分を責めるな。これしか方法はなかつた・・・、つ？」

最初に異変に気がついたのはディだつた。ディは不意に俺を抱きしめている腕に力を込めるときばやく辺りを見回した。

「ディ？」

ディは無言のまま辺りを伺い続ける。どうかしたのだろうか、と。

俺も部屋を見回してみるけど何も起こっていない。

「…………どうかしたの？」

「気づかないか？…………この臭いは……」

言われて俺は鼻を鳴らし、微かに漂う臭いを拾つて俺は全身を固くした。愕然とするしかなかつた。この臭いはかつてエルミナから発せられていたあの臭いだつた。

俺は恐る恐る腕の中のエルミナに視線を落とす。相変わらずエルミナは眠るように息絶えた姿でそこにいた。でもどんどんとあの腐臭が強くなつてきている。

「…………どうして……？」

エルミナが死んでもう一度とあの臭いが発せられるはずはないのに、だつてあればエルミナの中にいた奴が放つっていたものなのだから。

エルミナが死んでしまつた今、この臭いが存在するはずがない。

「器の死は私の死ではないからだよ、ルティシア。」

「…………っ、・・・誰だ！」

部屋に反響した低い男の声はあるで聞き覚えのないものだつた。どこから発せられた声か分からぬその声にディが鋭く声をあげる。「想定外だつたよ。まさかお前がこの女に会いに来るとは思つてもいなかつた、あれだけ痛めつけてやつたというのに。」

異変は俺の腕の中で起つていて。エルミナの体が俺の腕の中でぐずぐずと崩れ落ちたかと思うとヘドロのようなものに成り果てたのだ。俺は呆然とそれを見ているだけしか出来ない。何が起つてているのか分からなかつた。

「可愛いルティシア、恐怖を乗り越えここまでいた褒美に今日は見逃してあげよう。」

元はエルミナだつたそのどす黒いヘドロのよつなものが波うち、意志を持つて俺から離れていきながら言葉を発する。そしてそれは一気に膨れ上がると形を形成し始める。

「全く、傀儡の分際で私を押さえ込むとするなどとは愚かな女だ。

「・・・おんな？」

「お前たちはエルミナと呼んでいただろう？」

「ヘドロは少しづつ人の形になつていつた。

「使えない女だつたがおかげでお前がこの世界にいることが分かつたから、まあクズにしては役に立つたのかもしないな。」

腐臭がどんどん濃くなつていく。エルミナの中にあつたものの正体がこれであることはもう明白だつた。

「お前・・・何？」

そう訊ねたのは目の前の出来事が理解出来ない人間なら当たり前に聞くことだつた。俺は今の事態を上手く飲み込めずにいた。

「忘れたのか？・・・まあ、それもそうだろう。あれから随分と長い時間が過ぎた。」

形を成し終えたそれは、見たことのない男の姿をしていた。褐色の肌、黒い髪と瞳。圧倒的な存在感を放ち、男はそこに立つていた。ヘドロが男に変貌したあり得ない光景に俺は無意識にディに縋り付いていた。

「最期の力で私を道連れにしようとしたのだろうが所詮は無力、似合いの末期だつたな。」

「・・・何だと？」

エルミナへの暴言に俺は怒りが抑えられず声を荒げるが、男は気とした様子も見せず俺を見て微笑みかけてくるだけだつた。

「ルティシア、もうすぐだ。それまで待つていろ。」

男は真っ直ぐに俺を見てそう言つてきた。さつきから男は変な名

前で俺を呼んでくるけどその名に心当たりなんてもちろんない俺は、怒りと同時に困惑も覚えていた。

俺を見ながら何度もその名で呼んでくる。誰かと勘違いをしすぎる訳ではなさそうだつたけれど、確認はしたくなかった。必要以上に男に関わりあいたくない気持ちが大きかつたのだ。どうしてそう思ってしまうのかも分からず、俺はひたすら困惑するばかりで、ルティシア、なんて。

間違つても俺の名前なんかじゃないのに、この男はどうしてその名で俺を呼ぶんだろう。

俺に返事は求めていなかつたのか、男は言い切ると笑みを浮かべたまま一步後ろに下がる。次に取る行動が予測できず、俺は男を見守るだけしか出来ないまま。

「必ずお前を迎えていくぞ、ルティシア。」

男が手を壁に向かってかざすと一呼吸を置いて、壁が碎け散つた。あの泉で見たエルミナの力と同じものだつた。じゃあ、あの時もこいつが？

「・・・お前、誰なんだよーどうしてエルミナを・・・

立ち去ろうとしている男の背に俺は身を乗り出し吼えた。男の目的が分からぬ、知らないままでいることは躊躇われた。

「現世で行動を取るには私の力はまだ足りなかつたのでな、あの女を傀儡にして力を吸収させてもらつた。ちょうど器を探していた時にあの女が力を求めていたから、力を与えてやると言つてやつたら一も二もなく私を受け入れたぞ。馬鹿な女だ、自分すらも取り込まれるとも知らず。」

男の言葉に俺は怒りが込み上げてくるのを感じていた。そんな理由で人一人を殺したつてのか。おまけにそれを平然と言つてのけることが怒りに拍車をかける。

「だが、完全ではないにしろ私は戻ってきた。そしてルティシア、お前と共にこの世界を取り戻す。」

「・・・え？」

「私はお前の対となるもの、そしてお前の半身。」

男の言葉に俺の頭は真っ白になつた。何かを思い出しかけ、俺は男を見つめた。

それを打ち消したのは『デイ』だった。

「貴様は何者だ。」

男は『デイ』の問いかけに眉を跳ね上げ明らかに不愉快そうな表情を浮かべる。

「……この世界のたかが一国の王ごときが私の名を尋ねるとはな。

「貴様に払う敬意などない。」

「……言つてくれる。」

「一体何が目的だ。」

『デイ』は犬歯をむき出しにし、今にも男に襲いかかりそうな勢いだつた。俺は男と『デイ』を交互に見やるだけしか出来ない。

「ルティシアに免じて今回だけは答えてやろう。私はこの世界に君臨する者、我が名はヤソロジフス。」

「……何、だと……？」

「……デイ、知つてるのか？」

男が名乗った名前に『デイ』は心当たりがあるのか明らかに顔色が変わり動搖をする。俺の肩を抱きしめる手に力が入りギシギシと骨が音を立てる。

「……デイッ！……い、た……」

「……あ、……すまない……レン……」

パツと手を離され俺は自分の肩に手を当てた。『デイ』はそれでもなお混乱がありありと伝わってくる表情で男を見たまま動こうとしたい。

「全ての用意が整つた暁には、ルティシア。お前を迎えに行こう。」

ヤソロジフスと名乗ったその男はそれ以降『デイ』には目もくれず俺に向かつてそう言い放つと、自身が空けた壁の穴に近づき身を躍らせた。

あまりの展開に俺は呆然とするばかりだった。ヤソロジフスの姿が消えても俺は動くことも出来なくて、『デイの腕の中に居るだけ。

今、あの男が言った言葉の意味を理解しろと言われた所でそう易々と飲み込めるはずも無かつた。ヤソロジフスは俺のことをルティシアと呼び、自身の半身だと言っていた。俺はそれをどう受け止めればいいんだろう。だって俺はこの世界とは全く関係のない場所で生まれた。この世界の存在だってつい最近知ったばかりで今までの係わり合いなんてあるはずがないのに、男の言葉は俺が深くこの世界に関わっているような口ぶりだった。

「あの男が・・・ヤソロジフスだと・・・？」

沈黙を破り『デイ』が掠れた声で言った。『デイ』はあの男のことを知っているんだ。

「デイ・・・・さつきの人、何？」

けれど、『デイ』は答えてはくれなかつた。厳しい目で男が姿を消した壁の穴の向こう側を睨みつけながら、俺を抱く肩にグツと力を込める。

「・・・・・レン、帰ろ。」

俺の問いに最後まで答えないまま『デイ』は俺の手を取りながら立ち上がつた。吹き込んでくる風に『デイ』のマントがなびく。立ち上がつた俺は『デイ』に肩を抱かれながらヤソロジフスが飛び降りた穴に近づいた。

遙か足元には城が広がり、タランフィリアの兵士達が慌しく動いていた。こんなに高い場所に俺達は居たんだ。ここへ来る時にあんなに階段を下りてきたのに。

あるはずのない世界へと招き入れられていたのだろうか。

「・・・・・戻つて、戦争の終結を宣言しよう、レン。」

「・・・・・うん。」

何も終わってはいない。もしかしたらこの戦争はこれから起ころるべきことのほんの前章でしかないのかもしれない。そんな予感を覚えながら俺は『デイ』に連れられ、戦場へと戻つていつた。

カーミアとタランフィリアの戦争はタランフィリアの敗北宣言によつて終結した。撤退していく兵士達の中に俺は見覚えのある人物を目にした。ディの返事を受け取りに来たあの兵士だ。

彼は固い表情で俺達の前に来るとエルミナの所在を尋ねてきた。エルミナの異変を彼は知つていたようで、ディがエルミナの死を告げると彼は絶句し絶望に肩を落とした。

かけるべき言葉なんてあるはずもなくて、俺はその様子を見ているだけしか出来なかつた。

「カーミアの王よ・・・王女は・・・もしかして・・・」

再び顔を上げた時の彼の目には涙が滲んでいた。

「王女は私が殺した。戦争を終わらせる為にはやむをえなかつた。」

「カーミアの・・・」

「遺体はないが、せめて盛大に送つてやつて欲しい。」

ディは事実を何一つ彼に告げようとしなかつた。エルミナを殺したのは俺で、エルミナは操られていただけで、エルミナを操つていたのはヤソロジフスという名の男で、これから恐らく何かが起こつてしまつであろうことを。何一つ言おうとはしなかつた。

「名を聞こう。」

ディはタランフィリアの兵士にそう尋ねた。兵士は涙の溜まつた目をもう一度固く閉じ、次に目を開いた時には真っ直ぐにディに眼差しを向けた。

「・・・タランフィリアが宰相、イエール・ジョニー。」

「そうか、イエール。どうかエルミナ亡きタランフィリアを守り立て直して欲しい。」

「・・・御意。」

イエールは深々と頭を下げるとなかに踵を返し自軍へと戻つていった。

残された俺達はイエールの姿が見えなくなるまでその背を見続け

た。

「・・・王。」

ナジエイルの涼しい声が俺の耳に届いた。振り返るとどこか憂いを帯びた表情をしたナジエイルがそれでも凜とした姿で立っていた。

「レン殿も、お疲れでしょうからどうぞ城へお戻り下さい。」

その様子からナジエイルにはテイが言つた言葉が全てではないのだと分かつているのかもしねりない。俺は小さく頷き側にあつた椅子に腰を落とした。

疲労が一気に噴出してきたみたいに体が重かつた。それ以上に心が。

俺は膝の上で自分の両手を何度も握り締めた。ヤソロジフスが現れたことで忘れかけていたエルミナの死と、自分のしたことを思い出したのだ。

汚れなんてない手の平が真っ赤に染まつてゐるような気がして、怖かった。

「・・・レン・・・」

ディイがいつの間にか俺の前に立つていて、優しい眼差しで俺を見下ろしていた。ディイは全部が自分の責みみたいに言つたけど、事実は違うのだと俺は十分に承知していた。

エルミナを殺したのは俺であつて、『ディイじゃない。』

「・・・・ディイ、俺・・・・・」

そしてこれからきっとまた何かが起つ。終わつたこの戦争は俺が招いたもの、これから起つるだろう未来に待ち構えていることもたぶん俺が引き金になる。

漠然としたものではあつたけれど、この予感は当たつてしまはずだ。

「・・・・ここに来ない方が良かつたのかな。」

この世界が狂い始めたのは俺がここへ来てから。世界樹を生み出す為に必要だったのもしれないけど俺にはもつそつは思えなかつた。

深い悔恨がいつまでも俺の中から消えなくて、それどころかどんどん大きくなつてしまつてしまつて、俺は耐え切れず涙を落とした。

「レン、それは違う……違つんだ。」

「だけど……」

「レンを巻き込んでしまつた、俺の責だ。だから……頼むからそんな風には思わないでくれ。」

ディイは俺の前に跪くと膝の上にあつた俺の手を握つた。大きな温かい手、俺はそれを握り返すことがどうしても出来なかつた。

「……違わないよ……」

結局、守ると言つておきながら俺は何もしなかつたし反対に守られてばかりだつたじやないか。俺は何もしていない、何もやってない。

「……違わないんだ、ディイ……」

現実があまりにも重過ぎて潰れてしまつそうだつた。

守りたいだけなのに、どうすればいいのかすらもう分からぬ力すぎる自分が嫌でたまらなかつた。

「……俺が弱いから、何も守れないんだ。」

強くなりたい。

全部、大事なものを守れるように。

「レン。」

「……強くなりたいよ……ディイ……」

止められない涙がいくつも落ち視界を揺らめかせる。ディイの銀髪が、俺の好きな灰色の瞳がぼやけて見えない。頬をディイの両手で覆われて真つ直ぐに自分の顔に向かせるようにさせられると、どんどんディイの顔が近づいてきた。そつと触れるだけの口付けをされ唇はすぐに離れていった。

「……ディイ？」

「泣かないでくれ……」

ディイの顔が泣き出しそうに歪められていた。俺だけじゃない、ディイも苦しんでいる。

「・・・・デイ・・・・

またこんな顔をデイにさせてしまった。あんなに強いデイにこんな顔をさせて、デイを苦しめているのも俺だ。

「そんな顔、しないでよ。」

俺は泣きながら無理やり笑みを浮かべた。俺にはまだ何も出来ない、けれどまだ何も終わっていないから。

待ち受けているだろう未来は想像なんてこれっぽっちもつかないけど、きっと俺が思う以上に辛い困難が待ち受けている。あの男が現れて、それだけは想像が出来た。

強くならないと駄目だ。こんな顔をデイにさせていくつじや、駄目なんだ。

「こんな、すぐへこたれてたんじゃ駄目なんだよな。」

「・・・・レン・・・・

「俺、負けないようにならん。がんばる、から・・・」

いつか全てを守れるくらい強くなつてみせるから。

「・・・・だからごめん、今だけ・・・」

一度と抜けない棘が刺さつた心にじくじくとした痛みを広げ続けている。失つてしまつたらもう絶対に取り戻せない、人の命は奪われた命はもう取り返せない。

こんな後悔をもう一度と覚えたくない。知りたくもない。失くしたくないよ、もう一度と。だから、これからはもつと頑張つて強くなつて守るから。

あともう少しだけ、泣かせて欲しいんだ。

「・・・・レン・・・・

デイの肩に顔を埋めると背に腕が回された。力強く温かい腕が俺の全てを包み込む。

声もあげずに泣き続ける俺を、泣き止むまでデイはずつとそうし続けてくれた。

つい先日まで戦争をしていたとは思えないくらい穏やかな日々が過ぎていた。あれから三日、俺はぼんやりと時間を過ごしていた。何も考えたくなかったのだ。

「レン殿。」

窓辺の椅子に腰掛け外を眺めていた俺の背後からナジエイルの声がかけられ振り返る。

「ナジエイル、どうかした？」

「食事をお持ちしました。」

「・・・・・ありがと。」

俺は立ち上るとナジエイルの側に近づいた。豪華な台車に乗せられていたのはこれまでとは違つ質素な料理だ。

「・・・これなら、召し上がつていただけますか。」

テーブルに音を立てながら皿を並べ、ナジエイルは辛そうな聲音で言う。それには理由があった。俺が、あの日からまともに食事を取つていなかつたからだつた。

「・・・うん・・・・」

運ばれてきた料理は俺の世界で言ふところのお粥みたいなもので、俺はいつものように「いただきます」と手を合わせてから皿にスプーンを入れてすくつた。一口だけ口に入れて、何とか飲み込む。病気をしていても食欲だけはいつもあつたのに今はその一口だけでお腹がいっぱいになつたような気がしてしまつ。俺はスプーンから手を放した。

「・・・・・レン殿・・・・」

「ごめん、お腹がいっぱい。」

「一口しか召し上がりませんよ。」

「そう、なんだけど・・・・」

「どうしてもそれ以上口をつけることが出来ない。食べたいとする

思えないなんて。

「夜もあまり眠つておられないと王から聞いております。このまま

では。」

俺はナジエイルを見上げた。心配そうな顔をしているナジエイルに俺は申し訳なさで身を小さくしてしまった。

眠れないのも事実だつた。寝れば夢を見る、それは大概が悪夢で俺は悲鳴を上げその声でいつも田を覚ましてしまつていた。それからは全然眠れない。

鏡なんて一度も見てないけど、隈が出来ているのに間違いはないだろうな。

「何でかな、元気なんだけど・・・」

「この状態が元気であるはずなどないでしょう。」

呆れ口調でナジエイルが言つて、そして俺の前の席に腰を落とした。戦争が終わつて事後処理や各国とのやり取りで忙しいディに変わつて、ナジエイルが俺の話し相手をしてくれていた。ナジエイルだつてきつと忙しいはずなのに。

「・・・お心は、晴れませんか。」

戦争最後の日、何が起つたのかナジエイルは知つていた。ディから全てを聞いたと、その翌日俺に言つてきたのだ。

「・・・眠るとあの日のことを夢に見るんだ。」

何度も繰り返される悪夢。俺は夢の中で何度も何度もエルミナを殺し、その体が崩れ落ちる様を突きつけられていた。

「他に何か方法があつたんじゃないかつて、今でも思う。俺、エルミナがそうして欲しいって言つたからそうするのがいいんだつて思つてやつたけど・・・もっと他に・・・」

そう思つてはみても死を願う苦しみから救う方法なんて、俺には分からない。

俺は今まで自分がどれほど恵まれた環境に居たのか、あの戦争を通り過ぎて知つた。

「生きていれば、他に何かあつたのかもしれないのに。」

永遠に生きる道筋を奪つてしまつた。たとえ相手が望んでいたつて、それは間違つていたんじやないかつて、そればかりを考えてしまつ。

でも他に方法なんて思いつかない。俺の生きてきた世界との世界はあまりにも違うからどれが正しいのかがわからない。

「（）自分を責めないで下さい。仕方のないこともあるのです。」

「・・・・・人を殺すことも？」

「・・・・・ そうなのかも、しれません。」

いつそなじられたら楽だつた。人殺しと罵られて責め立てられたらこんな真綿で首を絞められるような苦しみはなかつたのかもしない。

誰もそれをしてくれないから、俺は自分で自分を責め続けるしかなかつた。

「何も守れなかつたね、俺。」

「・・・・レン殿・・」

「初めてナジエイルに会つた日、俺・・・あんな偉そうに守るつて言つたのに。」

「・・・あれは・・」

「ごめん。」

ナジエイルは返事をしなかつた。酷く傷ついた顔をして、何も言わないまま立ち上がると食器も台車も持たないまま飛び出すように部屋から出て行つてしまつた。開いたままの扉が音を立てながら揺れていた。

その向こう側に無機質な廊下があつた。俺はぼんやりとしながら立ち上がり扉の前に立つと扉を大きく開いた。窓なんてどこも開いてないはずなのに風が舞い込み着ている寝巻きの裾をなびかせる。涙が零れ落ちた。

俺はそのままふらふらと歩き出した。いつもは人がたくさんいる

のに誰ともすれ違わないまま城の外に出ると俺は真っ直ぐに怪鳥のいる小屋に向かう。たどり着くとそこにも誰もいない。いつも小屋を見ている男の姿はどこにもなかつた。

俺は小屋の中に入ると一番手前にいた怪鳥の前で立ち止まつた。
「なあ・・・ちょっと、いいかな。」

手を差し伸べると怪鳥は首を伸ばし俺の手の平に頭を擦り付けてくる。馬ほどもある頭を抱き寄せ「世界樹まで連れて行つてくれるか?」そう囁くと怪鳥は分かつたとでも言いたげに一つ、鳴いた。手綱もつけないまま小屋の外に一羽を連れ出しそのまま乗り込むと、怪鳥はいつもより穏やかに羽ばたき飛び上がつた。

俺が振り落とされないようにする為か、怪鳥の飛ぶ速度はいつもよりかなりゆっくりとしている。それが気持ち良くて、俺は体中に感じる風を目を閉じて受け入れていた。風を切つて飛んでいるはずなのに体中に風がまとわりついてくる。包み込んでくれていると言つた方が正しいのか。

そしていつもよりかなり時間をかけて俺は世界樹の元へと向かつた。

たどり着くとそこはあの時と同じまま、世界樹がそびえ立つていた。まるで喜ぶかのように世界樹が葉を鳴らすのを聞いて、怪鳥から降りた俺はゆっくりと世界樹の元へと歩み寄ると太い幹に抱きついた。

世界樹があつて、風が肌に触れて、柔らかな口差しに照らされた。それだけで心が軽くなるようだつた。ここに居たら何も考えなくて済む、辛いことを忘れられた。俺はしばらくの間ただ世界樹に触れながら無心になつた。

急に強い風が吹いて世界樹の葉が大きな音を立てる。まるで心配して子供をあやしているようにも思えて俺は「大丈夫だよ」と小さく呟いた。

顔を上げて見上げた世界樹は俺が生み出したなんて思えないくらい力強く俺の前に在つて、少しでいいから強さを分けて欲しいなん

て思つてしまつた。

そのまま幹に背をつけると崩れるよつとして俺はその場に座り込んだ。木の根の間にすつぽり収まれる場所を見つけて、椅子に座るようにして俺は空を見上げた。

青空が果てしなく広がっている。

こんなに穏やかな気分になつたのはあれから初めてかもしない、ほんやりと空を見上げながら俺はそんなことを思つていた。

気持ちいい。

田を闊むると心地良さに負け、俺はそのまま寝入つてしまつた。

第一章・最終話

夢も見ず、眠れたのはあれから初めてのことだった。少しづつ、水面下から引き上げられるように眠りから覚めた俺は瞬きを繰り返した。ふと太ももに重みを感じてそこを見ると見たことのない小動物が俺の膝の上でまどろんでいた。尻尾の短い猫みたいだ。

俺はそっと白い毛並みに触れるといつは小さな鳴き声をあげた。すると肩から鳥の鳴き声がする。見ると肩には鳥が留まっていた。辺りを見渡すと俺の周りには小動物が何匹も居て、各自が好きな場所で羽を休め、寝ていた。

「・・・・・あは。」

その光景について笑ってしまった。もう片方の手を伸ばそうとして、何かに掴まれているのによく気がついた。

「目が覚めたか？」

右側から聞きなれた低い声が聞こえた。

「・・・・・デイ、どうして・・・」

リラックスした表情のデイが俺の隣に座っていたのだ。何でここにデイが居るのか不思議で俺はそんな間抜けな返事をしてしまったいた。

「城に戻つたらレンがいないと騒ぎになつていてな。きっと、ここだろうと思つたんだ。」

「あ・・・」

「・・・・じめん。」

「うか。俺、また何も言わずに出てきたから。

勝手に出かけるととんでもない目にいつも遭つていたのにまたやつてしまつた。俯くとデイが「いいんだ」と笑つた。

「あんまりにも気持ち良さうに寝ているから起こせなかつた。」

「・・・・・デイ。」

「よく、眠れたか？」

『デイの手が解かれそのまま頬を撫でてきた。俺が眠れずにはいることを一番心配していたのはデイだったから、安心していろようだつた。』

「うん……寝ちゃつた。」

「……それなら、いい。」

『デイは優しい眼差しで俺に微笑みかけると手を頬から放した。そのまま俺に手を差し伸べてくる。きょとんとその手を見ていると「こっちへ」と声をかけられ、俺は動物を抱いたまま這つてデイに近づいた。デイの胸に背を預けると腕の下からデイの手が回り抱き寄せられる。』

「レン……辛いか？」

『何がとは言わなかつたけど、俺には『デイが何を聞きたいのかすぐ分かつた。』

「…………そう、なのかも……しれない。」

「ならば、元の世界へ戻るか？」

『デイの言葉を俺は冷静に受け止めた。言われて、そう言えば一度も元の世界に戻りたいなんて考えもしなかつた自分に気がついた。』

「…………デイは、戻った方がいいと思つてる？」

「レンが辛いのならば、帰してやりたいと思つた。」

『俺はデイの手に自分の手を重ねた。』

「辛いんだろう？」

「…………辛いよ。でも……逃げたくないんだ。」

『まだ何も終わつてない、始まつてもいい。それなのに全部を『デイに押し付けて一人逃げるなんてしたくない。』

『逃げではないだろう。元々レンは巻き込まれただけだ、責任を感じる必要はない。』

「…………巻き込まれたんだとしても、もう俺は十分すぎるくらいに関わつてるから。知らないふりなんて出来ないよ。」

『帰つたら楽になるのかもしれない。だけど、どうしてもそれだけ

はしたくなかった。それ以上に、

「それに戻つたら『デイと離れ離れになるだろ?』

『デイと離れていたあの日々を繰り返すなんて嫌だつた。

「『デイと離れるくらいなら、辛いのがまだいいよ。』

もう一度とこくは戻つて来れないかもしねない。そうしたら『デイとは一度と会えない。』

そんな風に生きていくくらいだつたら、辛くても今が良かつた。

「・・・・本当なら・・・」

『デイは酷く言いづらさうに何かを言いかけていて、俺はそれを待つた。

「レンに戻るよう、言わないといけないのだろうが、俺にはもうそれは出来ない。」

「・・・・うん。」

「これから先は、恐らくもつと辛いことが待つてゐるはずだ。分かつてゐるのに俺は、レンを手放してやれない。」

「・・・・・うん。」

「・・・・すまない、レン。もう・・・」

「いいよ。むしろ離される方が嫌だよ。そんなこと、ずっと考えてたの?」

見えない位置でむくれると『デイは俺の肩に顔を埋めてきた。

「レンを愛してる。この胸にあるのはそれだけだ。』

胸が締め付けられる。俺が『デイを想うのと同じに』『デイも俺を想つてくれている。その人に巡り合える奇跡なんて俺は今まで知らなかつた。』

俺は背を『デイに抱かれながら空を見上げた。あんなに青かつた空はすっかり夕日に染まつて赤くなつていて。』

「・・・離さないでよ・・・ディ。ずっと。」

「唯一無二」。俺の半身。かけがえのない人。そんな言葉では片付けられないくらい、どうしようもなく俺にはもうディが必要で。

離れるくらいなら死んだ方がましだ。

「頼まれても、もう離さない。」

いつの間にか側に居た動物たちは姿を消していた。その場に俺とディの一人きり。俺はディの腕を解くと振り返つてディの首に腕を回した。

「約束だからな。」

「・・・ああ、約束だ。」

そつとディの唇に自分のそれを重ね合わせた。触れるだけだった口付けは次第に深く重なつて、薄く口を開くとディの舌が入り込んできた。交ざりあって溶け合つて、一つになれたらしいのに。

「・・・・ん・・・は、あ・・・・・ディ・・・」

「レン・・・・・」

俺達は飽きることなく、ずっと唇を合わせあつた。深く、浅く。名前を呼び合いながら。

たつたそれだけで体中を満たす幸福感に酔いながら、俺は強くディと抱き合つた。

見知った感覚に襲われたのはそんな時。

「・・・え・・・」

一いつの世界を移動する時に感じる浮遊感が突然、俺を襲つた。

「な・・・ん・で・・・・」

背筋が冷たくなつた。そんな、どうして。

「ディッ・・・・・」

必死にディの体にしがみつくとディは異変を感じ取つたのか離す

まいと俺を強く腕に抱いた。

「やだつ、帰りたくない！」

「・・・レン、離すな！」

どうしようもない強い力が俺を連れて行こうとする。俺はそれに必死で抗つた。今戻る訳にはいかないんだ、『デイ』を一人になんてしてくないんだ。

俺は固く目を瞑ったまま『デイ』にしがみついて離そうとしなかった。けれどどうしようもない浮遊感に、連れ去られるようになってしまった。

俺は何度も経験した浮遊感に捕まってしまった。

強烈なその感覚が少しずつ弱まりついには過ぎ去ると、俺は恐る恐る目を開けた。初めにしたのは、『デイ』の姿を搜すことだった。

体を起こそうとして、手を握り締められている感触にそつちへ目をやると、『デイ』がそこに横たわっていた。

「デイ！」

慌てて側に這い寄り揺り動かすと短く呻き声を発し、『デイ』が薄つすらと目を開いた。

「デイ、良かつた。」

「・・・レン・・・」

『デイ』がここにいると言う事は、俺は戻らなくて済んだのだろうか。『デイ』の手を放さないまま辺りを見回すとそこは明らかに世界樹のふもとではなかつた。けれど見知つた風景。

俺は目を疑つた。

「・・・ここ・・・俺の世界だ。」

田の前にあるのは、『デイ』の世界のものよりも遙かに小さいけれど、俺が植えた世界樹。

「レンの？」

「・・・・・う、ん・・・間違いないと、思つ。」

「こんなことがあるのだろうか。俺が移動するのはわかる、何度も移動してきたし戻るべきは俺なのだから。でも、『デイ』がこの世界に来れるなんて思つてもいなかつた。」

「・・・・・一体、どういうこと?」

呆然としながら俺は呟くだけしか出来なかつた。

第一章・最終話（後書き）

第一章の終わりになります。読んで頂きありがとうございました。
引き続き第三章もアップして行きたいと思います。
どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5263u/>

Eternal Love 2

2011年7月18日00時14分発行